



62

4123

62-4123



\*1200701691750\*



始





# 物價問題

慶應義塾大學教授  
グドホルツ・ソフ  
高城仙次郎著

大正  
14.4.8  
製本

時事新報社出版部

62-4123

# 物價問題

## 目次

第一章 物價は何故に騰落するや……………一—三三

  第一節 緒言……………一

  第二節 物價と價格……………二

  第三節 市價決定の法則……………五

    第一款 市價の決定……………五

    第二款 法則の數字的説明……………七

    第三款 市價の變動……………一〇

    第四款 貨物の市價と其需要……………一一

  第四節 需要……………一三

    第一款 需要の意義……………一三

目次

第二款 需要と消費額……………一四

第三款 個人的需要と社会的需要……………一五

第四款 個人的需要の決定……………一七

第五款 市價と需要との因果關係……………二五

第五節 供給……………二六

第一款 供給の意義……………二六

第二款 供給と生産額又は在庫量……………二八

第三款 個人的供給と社会的供給……………三一

第四款 個人的供給の決定……………三一

第五款 新舊市價の評価……………三九

第六款 供給者の評價……………四二

第七款 評價の要素……………四七

第八款 營業費と生産費……………五一

第九款 供給の限度……………七八

第十款 價格の移動……………八六

第六節 市價の變動……………八九

第一款 市價決定要素の表圖……………八九

第二款 市價變動の直接原因……………九二

第七節 需用變動の原因……………九五

第一款 人口の増減……………九五

第二款 貨幣の效用の増減……………九九

第三款 消費欲の増減……………一〇九

第四款 景氣の循環……………一一一

第五款 政府の政策……………一一三

第六款 戦争……………一一四

第八節 供給の増減……………一二七

第一款複製不可能の物品……………一七七  
 第二款普通商品……………一二一

第二章 物價平準……………一三—一六二

第一節 物價平準の意義……………一三  
 第二節 交換の媒介物……………二四  
 第三節 貨物の交換比例……………二七  
 第四節 物價平準(過渡時代)……………三二  
 第五節 物價平準(貨幣經濟)……………四三  
 第六節 物價平準(名目貨幣流通の場合)……………四九

第三章 貨幣數量說……………一六三—一六六

第一節 緒言……………一六三

第二節 ニューコームの研究……………一七一

第三節 ケメラーの研究……………二二二

第四節 フイシャーの研究……………二四八

第五節 反對說……………二九七

第六節 貨幣の數量と物價の高低……………三〇七

第四章 物價變動の影響……………三〇九

第一節 各貨物市價騰落の影響……………三一九—三四六

第二節 一般物價の騰貴と經濟界……………三二四

第三節 物價騰貴と生計費……………三二七

第四節 物價と一般勤勞所得……………三三〇

第五節 物價と財産所得……………三三二

第六節 物價と財産の價值……………三三七

第七節 結論……………三四三

第五章 物價調節……………三四七—四一〇

第一節 物價調節の意義と主張……………三四七

第二節 物價は調節し得るや……………三五〇

第三節 物價調節策……………三五三

第四節 特殊物價調節の可否……………三九七

第五節 一般物價調節の可否……………四〇三

# 物價問題

高城仙次郎

## 第一章 物價は何故に騰落するや

### 第一節 緒言



本講義に於ては主として我國及び諸外國に於ける物價の趨勢、物價騰落の原因、物價調節の理論と實際等に就きて説述したのであるが、本論に入るに先ちて物價騰落の理論を講述して置く必要があると思ふ。何故となれば、物價の騰落又は其の調節に關する研究は總て物價の原理を基礎として或は又之を出發點として之を行はねばならぬものであるが、各特種問題を取扱ふ毎に、物價騰落の原則を説明しては、前後重複するの虞があるからである。加之、物價の高低を定むる根本原因に就きては不幸にして學界に未だ一般に認められたる定説が無いのであるか

物價は何故に騰落するや

ら、此點から觀ても講述者が如何なる見地より研究を進めつゝあるかを明かにして置く義務がある。

然しながら、物價の理論を講述すると云ふも、之を一般的に且つ根本的に説明するには夫れのみならず、全學年間の講義を捧ぐるも尙ほ不充分であるから、遺憾ながら本講義の論旨を明かにする爲めに必要な程度に於て簡易なる解説を試みることをとする。

### 第一節 物價と價格

物價とは貨物の價格と云ふ意義を有してゐるのであつて、常に複數として用ゐられてゐる。例へば砂糖、白米、洋傘、鐵、綿絲、生絲其他種々の商品が騰貴若しくは下落したときに、吾人は之を一口に物價が騰貴又は低落したと云ふを常とする。従つて砂糖の物價とか、白米の物價とか云ふことは出來無いのである。

然らば價格とは何であるかと云ふに、貨物と貨物との交換比例に外なら無いのである。例へば白米一斗と砂糖十斤とが交換せらるれば、白米の價格は一斗に付

砂糖十斤であるとも云ひ得るし、又砂糖の價格は一斤に付白米一升であると云ふを妨げ無い。白米又は砂糖が他の如何なる貨物と交換せらるゝ場合にも亦之に準ずる。然しながら、現今に於ては貨物と貨物とが直接交換せらるゝことが甚だ稀であつて、各貨物は通例貨幣と交換せられてゐるのであるから、實際に於ては貨物の價格は貨幣の一定額を以て言顯はされてゐる。例へば白米の價格一斗に付砂糖十斤と云はずして、金三圓又は四圓と云ひ、砂糖の價格一斤に付白米一升と稱せずして金三十錢若しくは四十錢と云ふの類である。尙ほ價格と類似の用語を列記すれば左の如くである。

代價 價格を貨幣にて云ひ現はしたるものであつて、價格と同意義に用ひらるるが、坊間にては價格よりも廣く使用されてゐる。

代金 或る一定量の貨物に對して支拂はるゝ貨幣の一定額。價格又は代價は抽象的の數量であるが、代金は貨物の賣買者間に實際授受せられる貨幣其物である。

價値、値段 代價と同一。

物價は何故に騰落するや

定價 公稱價格。即ち商人が豫じめ販賣の標準として定め公表してゐる價格。  
賣價 實際に取引の標準となりたる價格。

原價 購入價格又は生産費。

單價 貨物の一單位の價格。

價額 一貨物の單價に數量を乗じたるもの又は數種貨物の單價に各其數量を乗じたるもの、合計。

正常價格、相當價格、正當價格 共に生産費と略ぼ一致せる價格又は世人が一般に正當なりと看做したる價格。

市價 一貨物が一市場に於て取引さるゝ際の標準價格。市場とは一貨物が同一の時に於て同一の價格若しくは殆んど同一の價格を以て賣買せられるゝ場所又は地方を云ふ。米穀取引所又は青物市場の如き一定の比較的狭き場所も一市場たり得るし、又一市町村が市場と看做され得るは勿論、一國のみならず、世界全體も一箇の市場を構成するものと考へ得る場合もあるが、通例市場と云へば一都會又は一都市内に於て取引の頻繁に行はるゝ區域を指す。

尤も市場は此市場と名けられる場所に於ける取引の組織又は取引の狀況を意味することもあるが、市價との關係上より觀たる市場は一定の場所と看做すを便利とする。如何となれば、市價は場所又は地方を異にするに従ひ高低を生ずるを常とするからである。

相場 市價と同一。

時價 一定の時の市價又は現在の市價。

### 第三節 市價決定の法則

前節に略述したる如く、物價は諸種貨物の價格を意味するのであるから、物價の研究は各貨物の價格に對する講究を基礎とせねばならぬ。而して價格及び類似の概念中にて市價即ち多人數の取引する一市場に於ける一貨物の標準價格は最も重要な地位を占むるものであるが故に、吾人は先づ此市價が如何にして定まるものなるかを明かし、然る後一般物價騰落の原因に論及することに定める。

#### 第一款 市價の決定



一定の時一定の市場に於ける或る一貨物の價格は其の時其市場に於ける同貨物の需用と供給とが一致する點に於て定まるの傾向を有するものである。例へば砂糖が一斤三十錢にて賣買せらるゝとすれば、砂糖の販賣者が三十錢ならば賣らんと欲せる砂糖の分量と砂糖の購買者が同じく三十錢ならば買はんと欲せる砂糖の分量とが同量であるから、砂糖の市價が一斤に付三十錢に定まるのである。假りに此際購買者が一斤三十錢ならば購入せんと欲する分量が合計一萬斤であるとするとすれば、販賣者が同一の價格にて賣却せんと欲せる數量も亦一萬斤である。若し此の時砂糖に對する需用が一萬斤であるに反し、供給が五千斤に過ぎ無いとすれば、市價は三十錢に定まらずして、三十錢以上、例へば三十五錢又は四十錢或は夫れ以上に定まるに相違無い。何故となれば、購入者は一萬斤を買入れんとせるに、供給高が其の半額に過ぎ無いが故に、一方に於て供給者は價格を引上ぐるに至る可く、又他方に於ては需用者が三十錢以上を支拂ふを辭せざるからである。斯くの如く一貨物の市價は其貨物に對する需用と其の供給が同一分量である場合に定まるものであるが、斯くして定まる市價は其市價の定まる時及び場所の

みに適用せるゝものであつて、他の時又は他の場所に於て定まる市價と同一で無いと云ふことを常に記憶するを要する。如何となれば、貨物の市價は日々に、否な或る場合には綿絲、生絲、定期米等に於けるが如く時々刻々變動するものであり、又同日の同時刻に在りても處を異にするに従ひ同一貨物の市價に多少の開きを保つてあるからである。

第二款 法則の數字的説明

以上略説したる市價決定の法則は需用と供給との増減する状態をば數字を以て表せば尙ほ一層之を明瞭に示すことが出来るから、左に前に用ひたる砂糖の例を襲用して其價格が騰落するに従ひて需用と供給とが反比例に伸縮する状態を表示することにする。

一斤の價格	需用	供給	一斤の價格	需用	供給
一	一〇〇、〇〇〇斤	—	二五	一三、一〇〇斤	六、〇〇〇斤
一〇	三〇、〇〇〇	一、〇〇〇	二六	一二、五〇〇	六、五〇〇
二〇	一五、〇〇〇	三、〇〇〇	二七	一一、〇〇〇	七、三〇〇

物價は何故に騰落するや

二八	一一、一〇〇	八、二〇〇	三四	七、五〇〇	一一、八〇〇
二九	一〇、五〇〇	九、〇〇〇	三五	六、五〇〇	一二、五〇〇
三〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	四〇	三、〇〇〇	二〇、〇〇〇
三一	九、六〇〇	一一、〇〇〇	五〇	一、〇〇〇	三〇、〇〇〇
三二	九、〇〇〇	一一、二〇〇	一〇〇	五〇〇	七〇、〇〇〇
三三	八、四〇〇	一一、五〇〇	一〇〇〇	一〇、二〇〇、〇〇〇	

右表に示すが如く、砂糖一斤に付一錢ならば、合計十萬斤の需用があるが、斯くの如き安價にては一斤の供給だに無い。従つて市價が一錢には定まらなす。之に反して、若し價格が十圓ならば、需用は僅かに十斤に過ぎ無いが、供給は二十萬斤に激増する結果として需用と供給とが平衡を得ない爲めに、市價が十圓に定まるが如きことは無い。然し此兩極端の間に於て、價格の上るに連れて需要が減退すると同時に供給が膨脹するのであるから、需用と供給とを平均せしむる價格があるに相違無い。此需用と供給と平衡を保たしむる價格は前表に示す通り三十錢である。即ち砂糖が一斤三十錢ならば、需用が一萬斤で、供給も亦同じく一萬斤であ

つて、市價は一時此點即ち三十錢に落付くのである。市價が此價格にて落付くのは、若し價格が二十九錢ならば、需用は一萬五百斤あるも、供給は九千斤に過ぎ無いが爲め、需用者の方で價格を糶上ぐることになり、又價格が三十一錢ならば、供給は一萬一千斤あるも、需用は九千六百斤に過ぎない結果として、供給者間に競争を生じ價格を引下ぐるに至るが、若し價格が三十錢ならば、需用者の購入せんと欲する分量と供給者の販賣せんと欲せる分量とが全然一致し、兩者の間に過不足なく従つて需用者の間に於ても、將た又供給者の間に於ても價格を糶上げ若しくは之を引下げんとする者が一時無くなるからである。

以上は市價の決定する順序の梗概であるが、同じく砂糖と云ふも、幾多の品種のあるのは勿論であつて、各種の砂糖は皆夫れ々異なりたる價格を以て賣買せらるゝが、孰れの市價も上述せる市價決定の原則に依りて定まるのである。而して各種砂糖の市價が品質の優劣に比例して等差を保つは、價格が同一であるとするれば、品質の優等なる種類に對する需用比較的多く、供給比較的に尠きに反し、劣等なる種類に對しては需用尠く其の供給多きが爲めである。例へば一等種の砂糖の

價格が一斤三十錢なれば、需用も供給も共に一萬斤ある場合に、二等種の砂糖の價格が若し一斤三十錢であるとすれば、夫れに對する需用は一萬斤に満たざるのみならず、供給が一萬斤を超過するのは想像するに難くない。若し果して然らば三十錢にては供給は需用に超過するを以て、市價は三十錢以下に定まらざるを得ないことにある。

以上砂糖の市價竝に砂糖の各品種間に於ける市價の等差に就きて論じたる所は總ての貨物の市價及び總ての貨物の各品種間に生ずる市價の高低に適用し得るものである。

### 第三款 市價の變動

貨物の市價が一定せらるゝ徑路は上説の如くであるが、斯くして決定せらるゝ市價は單に一定の時に於て、例へば大正十一年十一月一日に於て貨物取引の標準として用ひらるゝ價格であつて、一時的の存在を有するに止まる。尤も一貨物の市價が實際に長期間維持せらるゝことも無いではないが、各貨物の市價は原則として日々に、又時としては一日の中に數回も變動するの傾向を有するものである。

例へば砂糖が今日一斤三十錢の市價を以て取引せらるゝとすると、明日は此市價が三十一錢となり、或は又二十八九錢に低落するところがあり得る。然らば何故に市價が斯くの如く時の経過と共に昂下するかと云ふに、貨物の需用若しくは供給又は此兩者が共に變動するからである。例へば若し供給に何等の増減無きに、需用のみ増加すれば、市價は騰貴し、之に反して需用が減退すれば、市價は低落するに至る。又、需用に何等變化なき際に、供給のみ膨脹せば市價下落し、收縮すれば反對の現象を呈する。更に又、需用も供給も共に同比例に増加若しくは減退すれば、市價には何等の影響を及ぼさ無いが、斯くの如く兩者共に増加する場合に於ても、若し需用の膨脹が供給の夫れに及ばざれば、市價は低落し、前者が後者よりも著しければ、市價は騰貴する。之と同じく、需用と供給共に減退する際に、若し需用の減退率が供給の減退率よりも大なれば、市價は低落し、少なければ反對の結果を呈する。

### 第四款 貨物の市價と其需給

以上本節に於て説述したる如く、市價は貨物の需用と供給との一致するの點に於て定まるものであつて、又市價の變動は従つて需用と供給との増減に依りて誘

致せらるゝ現象であるが、一貨物の需用と供給とは如何にして定まるものであるか。上文に於て吾人は砂糖が一斤一錢ならば、十萬斤の需用あるも、供給は全然無く、又一斤十圓ならば、需用は十斤に過ぎざるも、供給は二十萬に上り、更に又一斤三十錢ならば、需用も供給も共に一萬斤ありとの假例を設けたるが、何故に砂糖が一斤一錢ならば、需用が十萬斤に上るも、供給は皆無であり、一斤十圓ならば、需用は僅々十斤に過ぎざるも、供給は二十萬斤にも膨脹し、又一斤三十錢ならば、需用と供給とが全然一致するのであるか。吾人は何故に斯くの如き假定を設け得るのであるか。如何なる根據ありて或る一定の價格の下には或る一定の需用と供給ありと云ひ得るか。又、價格の上下するに従ひ、何故に或る一定の率を以て需用と供給とが伸縮すると説き得るのであるか。此問題を解決するに非ざれば、市價が如何にして決定せらるゝものなるかを闡明し得無い。市價の研究は結局需用と供給の研究に歸着する。市價が需用と供給とに依りて定まると云ふ原則は重要な理論ではあるが、此原則のみに依りては市價決定の法則を根本的に理解すること不可能であつて、此原則を一階梯として夫れより一步を進めて需用と供給とに關

する學理を究め、始めて市價決定並に變動の根本的原理を會得することが出来る。されば、吾人は次に項を改めて先づ貨物の需用が如何にして決定せらるゝかを説き轉じて貨物の供給に關する理論及び現象に言及せんと欲する。

#### 第四節 需用

##### 第一款 需用の意義

一貨物に對する需用とは一定の時に一定の市場に於て一定の價格を以て人が購入せんと欲せる其貨物の數量を云ふに外ならない。例へば、前節に於て砂糖が一斤三十錢のとき一萬斤の需用ありと假定したが、此際に於ける需用は即ち吾人が茲に其意義を明確ならしめんとせる需用であつて、價格が一斤三十錢ならば、人の購入せんと欲する砂糖の分量が一萬斤なりとの謂である。吾人は説述の簡明を期する爲め時としては便宜上單に一貨物の需用が多いとか或は少いか、若しくは其需用が増減するとか云ふことあるも、此際には常に或る一定の價格を標準として論述しつゝあるのである。例へば、前節に於けるが如く、砂糖の需用が増加

したと假定する場合には、價格が一斤何錢なる際に、例へば三十錢なる際に需用が增加したことを假想せるのである。夏期には我國に於ては木炭の需用が尠いと云ふが、それは木炭の價格の高低に拘らず、人が購入せんと欲せる其の數量の少きことを意味せずして、夏期に於ける木炭の市價では需用が多量に上ら無いとの謂である。之と同じく冬期に於ける木炭の需用多しと云ふも、冬期に於ける市價にては需用多しとの謂ひに外ならない。假りに夏期に於ても、尠一俵の市價が僅かに五錢に過ぎずとせば、需用は激増す可く、又冬期に於ても、尠一俵百圓とすれば、需用は皆無となるであらう。従つて或る一定の價格を假定せざる一貨物の需用は全然無意義であつて、需用と云ふ際には常に或る一定價格を前提とせるものであることを忘却してはならぬ。

### 第二款 需用と消費額

一貨物の需用は斯くの如く一定の價格の下に於て人の購入せんと欲せる其貨物の數量に外なら無いのであるが、此貨物の需用と其の消費額とを混同する者が少く無い。勿論一貨物の購入は直接又は間接に消費を目的とするものであるか

ら、消費の多き處には需用も多く、又需用の多き處には消費も自ら多きを常とする。然しながら、兩者は決して同一物では無い。一貨物の消費額とは人が享樂又は事業の用に供する目的を以て使用或は消耗して、其の效用を減少し若しくは消滅せしむる其貨物の數量を云ふのであつて、其物の購入を意味するので無いから、需用とは自ら直接の關係を有してゐない。我國に於ては白米の消費は多量に上り、夫れに對する需用も亦少くないが、年々の白米の消費額と其の需用額とは同量で無い。我國の米穀生産額の少からざる部分は生産者が自身に消費するのであつて、賣買の目的物とはならない。従つて此部分は白米に對する需用とは密接なる關係を有してゐない。我國に於ける白米の消費額は従つて夫れに對する需用よりも多量に上つてゐると云ひ得る。又生絲の如く多量に海外に輸出せらるゝ貨物に在りては國內に於ける消費額よりも需用は遙かに多量である。如何となれば、生絲が消費以外に輸出の目的の爲めに盛んに需用されてゐるからである。

### 第三款 個人的需用と社會的需用

又、一貨物の需用を研究するに當りては個人的需用と社會的需用との別を明か

にするを要する。凡そ一定の時及一定の市場に於て或る一貨物を購入せんと欲する者は通例單に一人で無くして、數人、數十人若しくは數百人の多數に上るを常とする。而して茲に個人的需用と稱するは各個人の需用を意味するのであつて、社會的需用とは此各個人の需用の總計に外ならない。例へば、前節に於て吾人は砂糖一斤三十錢ならば需用は一萬斤に上ると假定したが、此一萬斤は社會的需用に外ならぬ。換言すれば吾人の假想したる一市場に於て一定の時に多數の人が一斤三十錢を以て購入せんと欲した砂糖の總量である。普通吾人が單に一貨物の需用と云ふ際には此社會的需用を意味してゐるのである。然しながら、此社會的需用は多數個人の需用の總計であるから、自ら複雑なる内容を有してゐる結果として之を直接に研究するも、其の伸縮の原則を闡明するは容易でないが、若し比較的單純なる現象たる個人的需用に關する理論を討究すれば、社會的需用の増減を支配する法則を明示することが出来る。如何となれば、社會的需用は個人的需用を總括したるものであつて、後者と同一比例に伸縮するものであるからである。従つて吾人は、次に此個人的需用が如何にして定まり且つ如何にして伸縮するも

のなるかを明かにせんと欲する。

#### 第四款 個人的需用の決定

或る一個人が一貨物を如何程需用するかは其貨物の市價と其貨物に對する此個人の評價との關係によりて定まるのである。假りに人ありて鉛筆一本を購はんと欲せる際に、其の市價が十錢であつて、此鉛筆に對する此人の評價が十錢以上、例へば十五錢であるとすれば、勿論此人は其鉛筆一本を購入するに相違ない。然しながら、若し其場合此人の評價が十錢以下、例へば八錢であるならば、鉛筆を購は無いであらう。即ち貨物の購買は市價が其貨物に對する購入者の評價よりも低きか、少くとも評價よりも高からざる場合に於てのみ行はるゝものである。然らば、評價は如何にして行はるゝものであるか。曰く、評價とは貨物の效用と其貨物に對して支拂はるゝ貨幣の效用との比較に依りて行はるゝものであつて、此評價の金額は學術的には貨物の效用をば貨幣の效用を以て除して之を求め得る。例へば、或る一個人に對する鉛筆一本の效用が十五であるとし、其人に對する貨幣金一錢の效用が一であるとすれば、一を以て十五を除して十五錢と云ふ評價を求め

得るのである。之を通俗的に説明すれば、鉛筆一本を十五錢に評價するとは鉛筆

一本の價値をば一錢銅貨十五枚の價値に等しいと看做すことに外なら無い。

同一貨物に對する此評價は勿論人毎に異なるを常とする。如何となれば多數個人に對する同一貨物の效用には人に依りて皆夫れ々等差があるのみならず、各個人に對する貨幣の效用も亦異つてゐるからである。例へば鉛筆一本の效用は甲に對しては十五であるも、乙に對しては二十に上り、丙に對しては之に反し僅かに八であり得る。又、甲に對する一錢の效用は一であつても、乙に對しては一五であつて、丙に對しては二であるかも知れぬ。若し果して然りとせば、甲は鉛筆一本を十五錢に評價するも、乙は十三錢三厘(30+1)に評價し、丙は僅かに四錢(40)に評價するであらう。

又、同一貨物に對する同一人の評價が事情に依りて異なる。例へば、甲は鉛筆一本を購ふ場合には之を十五錢に評價するが、若し二本、又は二本以上を購ふとすれば、二本目、三本目、四本目等は如何程に之を評價するであらうか。勿論此際には鉛筆に對する甲の評價が低下するに相違無い。如何となれば、鉛筆一本丈けを買入

れ、ばこそ、一本の效用は十五に上るが、二本以上を購入すれば、甲に對する鉛筆の效用が次第に減少する。假りに二本目の效用が十四、第三本目が十三、第四本目が十二、第五本目が十一、第六本目が十に減少するとすれば、鉛筆に對する甲の評價が、購入の本數を増すに従ひ、漸次十四錢、十三錢、十二錢、十一錢、十錢に低下する。従つて甲は此際鉛筆を六本迄は購入するかも知れ無いが、夫れ以上は買入れまい。何故となれば、若し七本購買するとせば、七本目の效用は或は九又は八に減少し、従つて此七本目の鉛筆に對する甲の評價も亦九錢又は八錢に低下するも、市價は一本十錢であるが故に、若し七本を購入するとすれば、七本目に對して甲は自己の評價額よりも高き市價を支拂ひて之を買入れると云ふことになるが、斯くの如きことは購買者が時として誤つて行ふの例はあるも、意識的に何人と雖も一貨物に對して自己の評價額以上の價格を支拂ふが如きこと無いからである。

以上個人的需用に就きて説述したる所を前節に掲げたる砂糖の需用供給伸縮表に當嵌めて考察すれば、社會的需用が如何にして定まり且つ如何にして増減するものであるかを一層明瞭に爲すことが出来る。今此需給伸縮表の一部分を再

び掲載せば左の如くである。

一斤の 價格	需用	供給
二八	一一、一〇〇	八、二〇〇
二九	一〇、五〇〇	九、〇〇〇
三〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
三一	九、六〇〇	一一、〇〇〇
三二	九、〇〇〇	一一、二〇〇

右表に示したるが如く、砂糖一斤の價格が三十錢ならば、需用と供給とが共に一萬斤ありて、兩者が相平均する爲めに、砂糖の市價は此價格即ち三十錢に定まるのであるが、吾人の知らんと欲する所は何故に砂糖が一斤三十錢ならば一萬斤の需用があり、又二十八錢ならば一萬一千百斤、三十二錢ならば九千斤の需用があるかと云ふに存する。前表に掲ぐる此需用は既に上文に指摘したる如く、社會的需用即ち多數個人の需用の統計に外ならない。今假りに問題を簡單にする爲めに、需用者は甲、乙、丙の三人の外に無しと看做し、此三人の需用は左表に示す通りであり

とせよ。

價格	總需用	甲	乙	丙
二八	一一、一〇〇	一五〇	五、一〇〇	五、八五〇
二九	一〇、五〇〇	一二〇	四、八八〇	五、五〇〇
三〇	一〇、〇〇〇	一〇〇	四、七〇〇	五、二〇〇
三一	九、六〇〇	九〇	四、五〇〇	五、〇一〇
三二	九、〇〇〇	七〇	四、〇〇〇	四、九三〇

若し甲、乙、丙の需用が右表に示す通りであるとするとすれば、次に吾人の知らんと欲するは何故に砂糖が一斤二十八錢ならば、甲は百五十斤、乙は五千百斤、丙は五千八百五十斤を購入せんとし、又價格が一斤三十二錢ならば、甲は七十斤、乙は四千斤、丙は四千九百三十斤を需用するかに在る。吾人は先ず甲の需用を研究しやう。砂糖の價格が一斤二十八錢のときに、甲が何故に百五十斤を購入せんと欲するかと云ふに、それは甲が百五十斤を買入れたときに於ける砂糖一斤に對する甲が評價が二十八錢であるからである。然らば如何にして甲は此際砂糖一斤を二十八

物價は何故に騰落するや



錢に評價したのであるか。假りに、甲に對する金一錢の效用を二とせば、甲が砂糖百五十斤買入れたる場合に於ける一斤の效用は五十六に相當すると看做した爲めに、甲は二十八錢と評價したのである。換言すれば、甲は百五十斤の砂糖を購入した際に於ける自己に對する一斤の效用と金二十八錢の效用とを同一と看做したのである。價格が二十九錢のとき百二十斤、三十錢ならば百斤丈けを買入れるに止めるのも皆な同一の理由に基くのである。尙ほ此原理は左表の研究に依りて一層明瞭に爲すことが出来る。

(一)	(二)	(三)	(四)	(五)
斤數	砂糖の 效用	一錢の 效用	評價	需用
七〇	六四	二	三二	七〇 <sub>斤</sub>
九〇	六二	二	三一	九〇
一〇〇	六〇	二	三〇	一〇〇
一二〇	五八	二	二九	一二〇
一五〇	五六	二	二八	一五〇

右表の第一段は甲が購入せんとせる砂糖の假定數量を示したものであるが、斯くの如く甲の求める砂糖の分量が七十斤より九十斤、九十斤より百斤、百斤より百二十斤に増すに従ひ、甲に對する砂糖の效用が次第に減少する。假りに、七十斤購入する場合に於ける一斤の效用をば右表の第二段に示すが如く六十四とし、九十斤購入する場合には六十二、百斤ならば六十、百二十斤のときには五十八、百五十斤とすれば甲に對する一斤の效用が五十六であると定め、且つ甲に對する一錢の效用をば右表の第三段に示す如く二であるとすれば、七十斤購入の際に於ける評價は右表第四段に示せる通り三十二錢、九十斤ならば三十一錢、百斤のときには三十錢、百二十斤とすれば二十九錢、百五十斤の場合には二十八錢である。而して、若し此際市價が三十二錢であるならば、甲は七十斤を需用する。如何となれば、七十斤を購入する際に於ける甲の評價は三十二錢であるからである。此の時何故に甲は七十斤以上又は以下を買入れないかと云へば、假りに甲が九十斤購入すれば、甲に對する砂糖の效用が七十斤買求める場合よりも低く、従つて評價が低下する。前表には九十斤を購入するときの甲の評價を三十一錢としてあるが、甲は一斤三

物價は何故に騰落するや

十一錢に評價してゐる砂糖をば三十二錢で買入れぬに相違ない。又何故七十斤以下、例へば五十斤丈けを購入するに止めないかと云へば、五十斤を買求めたる際に於ける甲の評價は三十二錢よりも高く、或は三十四錢、又は三十五錢に上るかも知れぬ。然るに砂糖は一斤三十二錢で購入することが出来るのであるから、甲は砂糖が安價であると思ひ、序に今少しく買求めて置かうとするが、七十斤以上は買はない。若し又、砂糖の市價が三十一錢ならば、甲は九十斤、三十錢ならば百斤、二十九錢ならば百二十斤、二十八錢ならば百五十斤を買入れる。其現由は既に右に説明した通りである。

以上甲は需用に就きて論じたる所は乙及び丙にも適用さるゝものである。即ち砂糖の市價が例へば一斤三十錢のときに、乙は四千七百斤を購入し、丙は五千二百斤を買求めんとするは、乙は四千七百斤購入するときに一斤を三十錢に評價し、丙は五千二百斤購入する際に一斤を同じく三十錢に評價するからである。又、市價が一斤三十二錢の場合に乙が四千斤、丙が四千九百三十斤買入れんとするものも上述の原則に基いてゐる。

砂糖に對する甲、乙並に丙の需用は斯くの如くに定まり、又斯くの如くに増減するのであつて、此甲、乙、丙の需用が合して砂糖に對する一定の時に於ける總需用となるのである。而して上述の如く此の需用と供給とが一致する價格にて市價が定まるのである。

#### 第五款 市價と需用との因果的關係

斯くの如く市價は需用と供給との一致する點に於て定まり、需用は價格と評價とに依りて決定さるゝものであるが、或は市價が需用と供給とに依りて定まり、需用が價格と評價とに依りて定まるものであると説くは一種の循環論では無いかと思ふ者があるかも知れぬ。市價決定の法則に對する右の説明法は稍々循環論に似たる點が無いでもない。然しながら事實は決してそうで無い。親の身長は子の身長三倍であつて、子の身長は親の身長三の一であるならば、親子の身長は幾何なりやとの問題は解決すること不可能であるが、親の身長は子の身長三倍であつて、子の身長は親の身長より四尺短ければ、親子の身長は幾何なりやとの問題は直ちに容易に解くことが出来る。之と同じく、一貨物の市價は需用に依り

て定まり需用は市價に依りて定まると云へば、循環論であるも、吾人が上文に於て述べたるは斯くの如き非條理なるもので無くして、市價は需用と供給とに依りて定まり、其中需用は價格と評價とに依りて定まると説きのであるから、 $x$ は $y$ に均しく $y$ は $x$ 均しと云ふが如く、未知數を以て未知數の價値を示さんとしたのでは無い。

## 第五節 供給

### 第一款 供給の意義

一貨物の供給とは一定の時に一定の市場に於て或る一定の價格を以て人が賣却せんと欲せる其貨物の數量を云ふのである。前節に於て砂糖の需用に就きて説明したると同じく、吾人が砂糖一斤三十錢ならば、一萬斤の供給ありと假定する場合には、砂糖が此價格にて取引せらるゝとすれば、人が賣らんと欲してゐる分量が一萬斤であると假りに定めてゐるに外なら無い。吾人は便宜上單に一貨物の供給が少きとが或は多きとが、又は増減したとか云ふことあるも、既に上文に於て

需用に就きて説明し置たる如く、一定の價格を標準としてゐるのである。例へば近年青物の供給が減少したと云ふときには、近年に於ける青物の市價では供給が少くなつたとの謂であつて、値段の高低に拘らず、青物の出荷が減じたと云ふのでは無い。又、砂糖に就きて云へば、一斤三十錢なるが故に一萬斤の供給があるのであつて、若し一斤二十錢ならば、供給は五千斤に減じ、一斤一圓ならば、供給が三萬斤に増すかも知れ無い。生産業者及び商人が自己の生産又は販賣しつゝある貨物が將來騰貴するならんと思惟する際には、賣却を手控へることがある。是れ即ち賣惜みと稱するものであつて、此賣惜は云ふ迄も無く供給を減退せしむるの結果を呈するが、此供給の收縮は其時の市價が標準となつて現はれたものである。例へば若し米が一石三十圓である際に、假りに農家及び正米商が近き將來に於て一石五十圓に騰貴するに相違無いと考へたならば、盛んに米の賣惜みを行ひ、米の供給が其の爲めに頓みに減退するに至るに違ひ無いが、米價が一石三十圓であるから、供給が少いのであつて、若し此際一石五十圓にて購入することを辭せざる需用者があれば、農家も正米商も喜んで賣渡すであらう。此現象に關する知識は往々

悪用せらるゝことがある。即ち自然の成行に住せば、市價の騰貴する見込の全然なきときに當りて、供給を手控へして故意に市價を暴騰せしむることがある。之を要するに、一貨物の供給は一定の價格を標準とせるものであつて、價格の高低を離れて供給の大少又は増減を論ずるの不可能であることを常に記憶せねばならぬ。

### 第二款 供給と生産額又は在荷量

一貨物の供給の大小は上述の如く一定の市價を標準として定まるものであるが、此貨物の供給と其の生産額又は在荷量とを混同する者が尠く無い。我國に於ける總ての貨物は我國に於て生産したるか或は外國に於て生産したのを輸入したのであるから、生産無くしては供給無しと云ひ得るのは勿論であるのみならず、一貨物の生産額が多量であればあるに従ひ、供給も多量に上るを常とするが、生産額と供給額とは同一物で無いのみならず、此兩者は常に同比例に増加又は減退するものではない。例へば我國に於て米の供給が多いと云ひ得るが、それは相當の値段にて販賣することが出来るからである。縱令米穀の産額が如何程多くとも、價

格が法外に低くければ、供給が多額に上らない。農夫は米の生産者であると同時に消費者であるから、米價が高ければ自家用に供する分量を除きたる産米を全部賣却するも、米價が非常に低くければ、賣拂を延期するを常とする。否な米價が一時暴騰した際には自家用米をも賣拂ひ、其の後自家の消費に供する米をば、必要の生ずるに従ひて米商より購入することすらある。従つて、我國に於て一年に假りに五千五百万石の米が生産せられたとしても、此五千五百万石の全部が供給せらるゝことは無くして、其の中の一部が農家に依りて販賣せらるゝに過ぎ無い。而して此供給せらるゝ部分は市價の比較的高きときには多く、低きときには少なり。

鉛筆、傘、靴、鐵器等の如き製造品は米穀などの農作物とは多少異なりて、全部販賣の目的を以て生産せらるゝものであるから、此等製造品の産額と供給額とは農作物に於けるよりも密接なる數量的關係を有してゐるは事實であるが、此場合に於ても生産額と供給額とは常に必ずしも一致するものではない。既に生産されてゐても市價が何等かの原因に依りて一時暴落してゐる際には、生産者は供給を手

控へる。

以上供給額と生産額との關係に就きて述べたことは供給額と現に市場に推積されてゐる貨物の數量との關係にも適用が出来る。或る貨物を國內の生産者より買入れたるか或は外國より輸入せる商人が若し其貨物の市價が近き將來に於て騰貴すると見込んだならば、其時まで商品を持堪へんとするを常とする。従つて或る貨物の現在量が多い場合に供給も亦多量に上るのであると云ふとは不可能である。尤も或る一定の時に在りては一貨物の供給は、如何程價格が暴騰するも、其時に於ける此貨物の現在量を超過することを得ない。故に貨物現在量の最大限と供給の最大限とは一致するものであると云ひ得る。例へば或る一貨物に對する需用が頓みに激増し、購買者が如何なる高價をも支拂ふことを辭せないとするれば、其貨物の供給者が在庫品を全部賣放つかも知れぬ。若し果して然りとすれば、此際に於ては此貨物の現在量と供給額とは全然一致するのであるが、斯くの如きことは稀有の現象であつて、多くの場合には一貨物の供給は其貨物の現存量よりも尠なきを常とする。

### 第三款 個人的供給と社會的供給

一貨物の供給は上述の如く一定の價格を標準として定まるものであつて、其貨物の生産額及び其在荷量と混同するを避け無ければならぬものであるが、供給には更に個人的と社會的との區別を明かにせねばならぬ。一貨物の個人的供給とは或る一個人が一定の價格を以て賣却せんと欲せる其貨物の數量を云ふのであつて、社會的供給とは一定の時に於ける此個人的供給の總計を意味するに外ならぬ。通例吾人が單に一貨物の供給と云ふ場合には、其貨物の社會的供給を指してゐるのである。第三節に掲げたる砂糖市價決定の假例に於て砂糖が一斤三十錢ならば、一萬斤の供給ありと看做したるが、此際に於ける一萬斤は社會的供給に外ならない。一定の時に一定の市場に於て或る一貨物を購入せんと欲する者は通例二三人と云ふが如き少數で無くして、數十人又は數百人にも上ることあるは勿論である。上記の一萬斤の供給も數十人又は數百人の供給を合計せるものに外ならぬ。而して此社會的供給は社會的需用と共に貨物の市價を決定せしむる直接原因であるが故に、是れより吾人は此社會的供給が如何なる原因に依りて

定まるものであるかを研究せねばならぬのであるが、社會的供給は上述の如く個人的供給の合計に外ならぬのであるから、需用の場合に於けると同じく、社會的供給を直接研究せずして、個人的供給を通じて社會的供給の大小が如何にして定まるものなるやを闡明するを得策となす可きであらう。如何となれば、個人的供給決定の原則が了解せらるれば、個人的供給の總計に外ならざる社會的供給決定の現象は自ら理解せらるゝに至るからである。

#### 第四款 個人的供給の決定

一定の時に於て或る個人が一定の價格を以て賣却せんと欲する一貨物の分量は其價格と此貨物に對する供給者の評價とに依りて定まるものである。概して云へば、或る個人の所有せる一貨物の數量が多ければ、其貨物に對する所有者の評價比較的低く、其數量少ければ、評價比較的高きを常とするものであるが故に、若し此所有主が其貨物の一部分を賣却するとすれば、賣却後に於ける評價が賣却前よりも高く爲るは自明の理である。斯くの如く貨物現在量の多寡に依りて所有者の評價に高低を生ずるは、前節に於て、需用を説明する際に略述して置いた通り、一

個人の所持してゐる或る貨物の分量が多ければ、此個人に對する其貨物の效用比較的低く、又分量少ければ、其效用比較的高きが故である。而して貨物供給者の評價が人毎に異なり、又同一人に在りても貨物の種類並に品質を異にするに従ひ逕庭あるは勿論、種類及び品質を同じゆする貨物に對しても時の経過と共に變動するものである。

斯くの如く物に對する所有者の評價は物、人、時を異にするに従ひ高低を存するものであるが、或る一定の時に於て一貨物に對する其所有者の評價よりも高き價格を以て購入せんと希望せる者あるときには、此所有者は其貨物の一部分を賣渡すことがある。然し此際幾單位を賣却するであらうか。假りに或る富豪が市内に一万坪の敷地を有する邸宅に住つて居つたが、社會奉仕の爲めに庭園の一部分を賣却することに定めたとせよ。然らば此富豪は敷地の内幾坪を賣拂ふであらうか。假りに最初此富豪は庭園の敷地をば一坪百圓に評價して居つたとする場合に若し一坪百二十圓の價格を以て千坪購入の申込あらば、勿論之に應ずるであらう。更に又他より同一價格を以て千坪の申込あるも之を快諾するかも知れぬ。

如何となれば、既に千坪を賣却したる後に於ける庭園の敷地に對する富豪の評價は最早一坪百圓では無くして夫れより稍々高く爲つてゐるに相違無いが、此新評價が百二十圓に達してゐないかも知れぬからである、假りに千坪賣却したる後に於ける評價が百十圓であつて、二千坪賣却したる後に於ける評價が百二十圓であるとするならば、富豪が賣拂ふ土地の面積は結局二千坪に過ぎ無い。何故となれば、更に其の上千坪を賣却するとすれば、評價は百二十圓以上、例へば百二十五圓又は百三十圓或は百四十圓にも上ることがあるから、百二十圓にては賣渡すことを見合すに相違無いからである。勿論此際購入希望者が一坪百二十圓以上、如何程にても所有主の評價に相當する金額か或は夫れ以上の價格を支拂ふことを辭せなければ、賣買契約は成立する。要するに上記の富豪は庭園の敷地を賣却すればするに従ひて、其敷地に對する評價が漸次上昇するのであるが、富豪は此評價が購入希望者の支拂ふを辭せざる價格と略ぼ一致するに至る迄賣却を繼續するのであつて、其時迄に賣却する土地の面積が即ち一定の價格の下に於て定まる富豪の土地の供給額に外なら無い。

以上土地に就きて述べたる所を吾人の砂糖の例に當倣めて考へる必要があるが、第三節に掲げたる砂糖の供給額は社會的供給であるから、砂糖の個人的供給が如何にして定まるものなるかを明かにするには、先づ砂糖の社會的供給を構成する各個人の供給を知らねばならぬ。第三節に於ては砂糖が一斤二十八錢ならば總供給は八千二百斤、二十九錢ならば九千九百斤、三十錢ならば一萬斤、三十一錢ならば一萬二千斤、三十二錢ならば一萬二千二百斤に上ると假定したのであるが、此供給高は勿論多人數の供給者の販賣せんと欲せる砂糖の分量の總計である。然しながら今假りに説明を簡明にする爲めに供給者は甲乙丙三人であつて、各人の供給高が下表に示す通りであると定めぬ。

一斤の 格價	總供給	甲	乙	丙
二八	八、二〇〇 <sub>斤</sub>	四、〇〇〇 <sub>斤</sub>	三、二〇〇 <sub>斤</sub>	一、〇〇〇 <sub>斤</sub>
二九	九、一〇〇	四、六〇〇	三、四五〇	一、〇五〇
三〇	一〇、〇〇〇	五、一〇〇	三、七〇〇	一、二〇〇
三一	一一、〇〇〇	五、八〇〇	三、九五〇	一、二五〇

物價は何故に騰落するや

三二 一一、二〇〇 五、八五〇 四、〇五〇 一、三〇〇

即ち砂糖が一斤二十八銭ならば、甲は四千斤、乙は三千二百斤、丙は千斤、二十九銭ならば、甲は四千六百斤、乙は三千四百五十斤、丙は千五十斤、三十銭ならば、甲は五千百斤、乙は三千七百斤、丙は千二百斤、三十一銭ならば、甲は五千八百斤、乙は三千九百五十斤、丙は千二百五十斤、三十二銭ならば、甲は五千八百五十斤、乙は四千五十斤、丙は千三百斤を販売せんと欲するのであるが、何故に甲乙丙は各々前表に掲げたる価格を以て夫れれ、同じく前表に掲げたる數量を賣却せんとするのであるか。

例へば丙は何故に砂糖一斤二十八銭ならば千斤、二十九銭ならば千五百斤、三十銭ならば千二百斤、三十一銭ならば千二百五十斤、三十二銭ならば千三百斤を賣らんと欲するに至るのであるか。曰く、砂糖一斤二十八銭のとき丙が千斤を販売せんとし、一斤三十銭ならば千二百斤を賣却せんと欲するのは丙が砂糖千斤を賣却する際には一斤を二十八銭に評價し、千二百斤を販売するときは一斤を三十銭に評價するからである。他の場合即ち砂糖が一斤二十九銭、三十一銭又は三十二銭なる際にも之に準ずるのであつて、今之を表にて示せば左の如くである。

販賣高	評價	價格	供給
一、〇〇〇 <sub>斤</sub>	二八	二八	一、〇〇〇 <sub>斤</sub>
一、〇五〇	二九	二九	一、〇五〇
一、二〇〇	三〇	三〇	一、二〇〇
一、二五〇	三一	三一	一、二五〇
一、三〇〇	三二	三二	一、三〇〇

右表に示すが如く、丙が千斤賣却する場合には一斤を二十八銭に評價するのであるが、其の際假りに一斤二十八銭にて購入する者あらば、丙は千斤を販売し、又千三百斤販売するとすれば、一斤を三十二銭に評價するが故に、價格が三十二銭ならば千三百斤を賣却する。されど丙は何故に夫れ以上或は夫れ以下を供給し無いのであるか。例へば砂糖が一斤三十銭にて賣買されつゝあるときに何故に丙は千五十斤又は千二百五十斤を供給せずして千二百斤を賣却せんとするのであるか。曰く、若し丙が千五十斤販売するとすれば、一斤を二十九銭に評價するが、一斤三十銭に賣れるのであるから、供給高を千五十斤に止めずして夫れ以上を賣却せ

物價は何故に騰落するや



んと欲する。又此際千二百五十斤販賣すれば一斤に對する丙の評価は三十一錢であるが故に、若し市價が三十錢であるならば、千二百五十斤を供給せずして夫れ以下を賣却する。而して千二百斤販賣すれば、丙の評価と市價とは全く一致するのであつて、夫れ以上又は夫れ以下を販賣すれば、兩者が權衡を失することになるから、丙は砂糖が一斤三十錢にて賣買せらるゝ際には千二百斤を供給するのである。

以上丙の個人的供給に就きて説述したる所は甲及び乙の個人的供給にも勿論適用される可きである。即ち砂糖が例へば一斤三十錢にて賣買せらるゝ際に甲が五千百斤、乙は三千七百斤供給するのは、甲は五千百斤を賣却するとき砂糖一斤を三十錢に評價し、乙は三千七百斤販賣する際に之を三十錢に評價する故である。要するに、如何なるものたるを問はず、多人數に依りて供給せらるゝ貨物の個人的供給は上述の如く其貨物の市價と各供給者の評價との一致する點に於て定まるものであつて、其貨物の社會的供給、換言すれば其の總供給は此個人的供給に合計に外なら無い。而して此社會的供給と前節に於て説明した社會的需用との一致

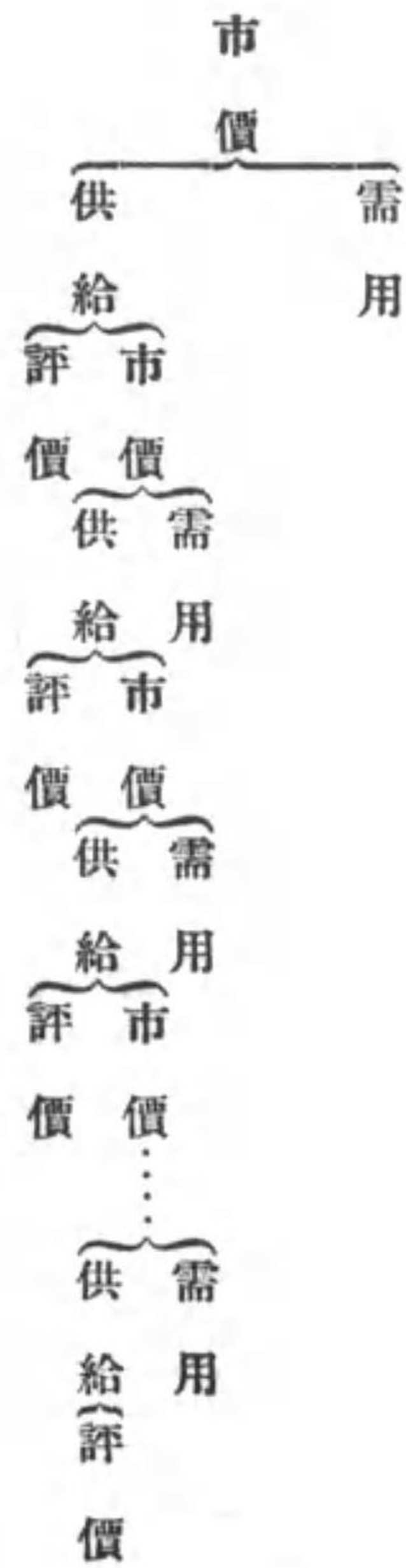
する點に於て市價が新らしく決定せらるゝのである。

#### 第五款 新舊市價と評價

一貨物の供給は斯くの如く其貨物の市價と其貨物に對する各供給者の評價とに依りて定まり、此個人的供給の合計たる社會的供給と同じく個人的需用の合計たる社會的需用とが新たに一市價を定むるのであるが、個人的供給並に個人的需用の一決定要素たる市價と新たに定まる市價とは同一物で無いことを記憶するを要する。假りに前者を舊市價と名くるとすれば、後者は之れを新市價と稱し得る。此新舊市價は上述の如く同一物では無いが、兩者間には勿論密接なる關係が存してゐる。即ち舊市價は新市價決定の一要素と看做し得るのである。例へば大正十一年十二月一日に於て決定されたる砂糖の市價は前日即ち十一月三十日の市價を標準として定まりたる砂糖の需用と供給とに依りて現出したるものであつて、十一月三十日の市價は其前日即ち二十九日に於て決定されたる糖價を標準として定まりたる砂糖の需用と供給との一致せる點に外なら無い。又此二十九日の糖價は其前日たる二十八日の市價が基礎となつて定まりたる砂糖の需用

に依りて決定されたものである。

新市價と舊市價との間に於ける此關係は飽くまで既往に遡りて之を追及するを得るものであるが、今假りに此關係をば單に供給側のみより研究するに、十二月一日に於て定まる供給は十一月三十日の市價と十二月一日に於ける供給者の評價とに依りて定まり、十一月三十日の供給は二十九日の市價と三十日に於ける供給者の評價とが決定要素となりて定まりたるものである。此市價並に供給と供給者の評價との間に於ける關係は上述の如く飽くまで過去に遡りて之を明かにすることを得るものであるが、此複雑なる關係も出來得る限り簡單明瞭に表示する爲めに、一圖表を試作して左に掲ぐることにした。



右表に示すが如く、假りに需用をば一時全然度外視して、供給の方面のみより市價決定の原因を尋ねるに市價は供給に依りて、供給は舊市價と評價とに依りて、更に此舊市價は供給に依りて、而して此供給は舊市價と評價に依りて定まるものであるが、此關係を飽くまで既往に遡りて追及すれば、吾人は遂に供給決定の標準となる可き、又は實際に其の標準と爲つた舊市價の存在し無かつた時に到達するに相違無い。換言すれば、或る貨物が初めて市場に提供せられたときに到達するのである。而して各商品が初めて賣買せらるゝときには勿論其前に定まりたる價格なるものが有り得可からざることであつて、最初の取引の際に其貨物の價格が初めて定まるのである。而して此最初の價格も夫れ以後の價格に於けると同じく矢張り需用と供給との一致する點にて定まるものであるが、此最初の供給の標準たる可き舊市價なるものが全然無いのであるから、此場合に於ける供給は供給者の評價のみに依りて定まるのであると看做さなければならぬ。従つて各貨物の供給は根本的に之を論ずれば各其貨物に對する供給者の評價に依りて定まるものであると云はざるを得無い。然らば各貨物の供給を根本的に定むる此供給

者の評價は如何にして定まるものであるか。是れ吾人の次に研究しなければならぬ問題である。

## 第六款 供給者の評價

各貨物は對する供給者の評價が如何にして定まるものであるかを明かにするには先づ總ての貨物をば(一)古書畫、骨董品又は歴史的建築物等の如く完全に複製し能はざる物と、(二)筆、墨、織物、墨等の如く自由に複製し能ふ物との二種に分類せねばならぬ。第一種の複製し能はざる物品は比較的少數且つ少量で、今日世界に存在せる物品の大多數は複製し能ふ物であつて第二種に屬する。古書畫骨董品は勿論技術的には複寫又は複製し得るものであり且つ實際頻繁に複寫若しくは複製されてゐるが、世人は此複寫或は模造されたる古書畫骨董品をば原物と同様に看做さ無い。換言すれば、模造品は原品と同一の價値を有して居らぬ。模造品が原品と同一物と看做され無いのは尙ほ信玄の影武者が信玄と同一人で無いのと異なら無い。従つて、模造が如何に巧妙であつても、經濟學の立場より之を觀れば、古書畫骨董品の模造品は、之を複製品と看做すことが出來無い。之に反して多量に

需用され又多量に供給せらるゝ普通商品例へば呉服類、傘、靴、下駄、足袋等に在りては全然同種同質の物が生産せられ、且つ世人に依りて同一物と看做されてゐる。

此意味に於て大多數の商品は上述の如く複製し能ふ物である。

然らば何故に斯くの如く複製し能ふ物と複製し能はざる物との間に區別を立つる必要あるやと云ふに、此兩者間に於て評價に一大相違があるからである。古書畫骨董品の多くは數十年又は數百年前に製作せられたるものであつて、現在又は將來に於て鑑賞上の見地より觀て之と全く同價値の品を作製すること不可能と看做さるゝのであるから、此等の物品は自ら其生産費の見積とは何等の關係無く評價せらるゝを常とする。尤も古書畫骨董品の所有者中には其の購入價格を標準として之を評價してゐる者もあらう。例へば一骨董品を數年前に一萬圓にて購入せる者が現在之を少くとも一萬圓に評價してゐることは稀有であるまい。然しながら、此購入價格は生産費とは何等關係無きものであつて、購入者側より觀れば、此價格は購入當時に於ける自己の評價に基いてゐるものである。従つて古書畫骨董品の評價は根本的に之を云へば生産費又は購入價格を離れて行はるゝ

のである。

果して然らば古書畫骨董品の供給者は如何にして之を評價するのであるか。假りに一骨董品の所有者に對する其の效用を千と看做し貨幣金一圓の效用を一と爲し得るならば、其所有者は此骨董品を金千圓に評價するであらう。勿論實際には書畫骨董品の所有者が斯くの如き精密なる方法を以て其の評價を行は無い。此等の人々が其の所有に係る書畫骨董品の評價を試みるに當りて意識的に行ふことは同じく自己の所有に屬する貴重品の價值と比較し、同時に他人の意見を參酌して評價を定むるを常とする。然しながら、此評價現象を學術的に分析して之に一般的の説明を加ふるとすれば、上記の如く一骨董品に對する其の所有者の評價は所有者に對する其物品の效用と貨幣の效用とに依りて定まるものであると云はなければならぬ。而して所有者に對する古書畫骨董品の效用の大小は所有者の趣味、鑑賞力、地位、職業等に依りて定まり、貨幣の效用には財産及び所得の大小、係累者の多少、生活程度の高低、知識の程度、賢愚、性質の如何に依りて等差あるは勿論であるから、古書畫骨董品の評價は人に依りて大に逕庭あるは自然の數である。

古書畫骨董品の如き複製し能はざる貨物の評價は斯くの如く生産費の見積を離れて行はるゝものであるが、此等の物品は既に上文に於て指摘したる如く比較的少數であつて、日常多量に生産せられ且つ多量に消費せらるゝ普通の貨物程に重要で無い。然らば此重要な複製し能ふ貨物に對する供給者の評價は如何にして行はるゝものであるか。されど單に貨物の供給者と云ふも、二階級あることを認めねばならぬ。即ち生産者と商人とである。先づ生産者の評價に就きて之を観るに、一貨物を生産しつゝある者が其貨物の評價を試みるに當りて其貨物の生産費を標準と爲す可きは自明のことである。例へば洋傘一本を製造するに三圓の費用を要するとせば、其の製造者は之を三圓に評價し、四圓の費用を要するとせば、之を四圓に評價するであらう。又農夫が米一石を生産するに二十五圓の費用を要すると思はゞ、米一石を少くとも二十五圓に評價し、又其見積が三十圓ならば、評價額も亦三十圓を下らぬに相違無い。然らば何故に生産者が生産費を標準として評價を行ふのであるかと云ふに、生産者と雖も一貨物を一度限り生産して

再び之を行はざるのみならず、他に同一貨物を生産する者が無い場合には、生産費を離れて其の貨物の評價することある可きは尙ほ古書畫骨董品の所有者が生産費の見積を標準とせずして評價を試みるに異なら無いのであるが、同一貨物を繼續して生産する場合には其生産費を回収するを得れば満足するからである。換言すれば、一個一圓の生産費を以て製作したる貨物を少くとも一圓にて賣却すれば、其賣揚を以て再び同一貨物を一個生産するを得るのであるが故に、自己に對する同貨物一個の價值をば一圓に見積るのである。又、之に反して自己が再び同一貨物を生産するの意志無きも他に同一貨物を生産するもの者あるときは、此他の生産者の支出する生産費を標準として評價を行ふものである。即ち他の生産者の支出する生産費が一個一圓ならば、前の生産者も一個一圓に評價し、二圓ならば二圓に評價する。蓋し最早自己が再び製作せざる貨物の價值は少くとも他の生産者の支出する生産費に相當すると思惟する爲めである。

以上略述する所は一貨物の生産者自身が如何に其貨物を評價するかを説きたるものであるが、貨物を自身にて製造せずして生産者より之を購入し消費者に販

賣する商人は如何に其貨物を評價するかと云ふに、商人は仕入値段を標準として商品を評價するのである。即ち一商品を五圓にて仕入れたる場合には之を少くとも五圓に評價し、十圓にて仕入れたる際には之を最低十圓に評價する。如何となれば、此價格を以て同一貨物を再び製造者又は卸商等より購入するを得るからである。勿論是れは生産費又は卸値段が變動し無いことを前提としてゐるのであつて、若し生産費又は卸値段が騰貴又は低落しつゝある場合には小賣商人の評價は此騰貴或は低落した生産費又は卸値段を標準として行はる。

斯くの如く商品に對する商人の評價は仕入値段を標準とするものであるが、商人は此仕入値段以外に營業費を回収する必要あるのみならず、幾分かの利潤を收めなければならぬから、商品に對する商人の評價は仕入値段即ち原價より多少高く爲る。尙ほ此の外に白米商の精白に於けるが如く、或は又魚商の刺身調製に於けるが如く、商品に多少加工する場合には加工費も亦評價に加算せられるは理の當然である。

#### 第七款 評價の要素

物價は何故に騰落するや

上述の如く貨物供給者の評價は其供給者が生産者自身なると商人なるとに依りて異なるものであつて、生産者の場合に在りては評價は生産費のみを標準とするに反し、商人の評價は仕入値段を基礎とするものであるが、吾人は是れより進んで此兩評價間の關係を一層明瞭に爲し度いと思ふ。單に商人と云ふと雖も小賣商、卸商、仲買商等種々ありて、生産者と消費者との媒介機關は貨物の性質に依りては往々頗る複雑なものであるが、叙述を簡明になす爲めに假りに商人は小賣商及び卸商のみであると定めて説明を進めよう。

一商品の原價は卸商より之を觀れば生産者に支拂ひたる代價に外なら無い。従つて此原價に營業費を加へたるものが卸商の評價である。然らば小賣商人に在りては如何。小賣商人は菓子商に於けるが如く直接生産者より商品を仕入れることもあれば、又多くの場合に於けるが如く卸商より仕入れることもある。生産者より直接仕入れる場合には原價は生産者に支拂ふ代價であつて、之に小賣營業費を加へたるものが小賣商人の評價と看做し得る。之に反して卸商人より商品を購入する場合には卸商人に支拂はるゝ卸値段が原價であつて、之に小賣營業

費を加へたるものが小賣商の評價となるのであるが、卸値段には卸商の營業費が既に含有せられてゐる。

以上説明せる所は貨物が生産せられたる地方に於て直接又は間接に消費者に販賣せらるゝことを前提としたるのであるが、斯くの如く生産されたと同一の市町村に於て消費せらるゝ貨物は比較的少數の日用品に限られて居つて、大多數の貨物に在りては原産地と消費地を異にしてゐる。而して原産地と消費地とが同一である場合には生産者より消費者へ貨物を配給するに多少の費用を要するも、其金額は僅少の例外を除きては論ずるに足らざる程低きものなるを常とするのであるが、原産地と消費地とを異にする貨物に在りては運送に比較的高額の費用を要するは云ふまでも無きことであつて、此運送費は往々生産費の數割に上るのみならず、時としては魚類、薪炭類に於けるが如く其の數倍に上ることすらある。従つて此種の貨物に在りては小賣値段の要素として運送費が生産費よりも遙かに重要な地位を占めてゐる。

以上略述したる所に依りて明かなる如く、貨物に對する供給者の評價は生産者

と消費者との關係及び生産地と消費地との異同の如何に依りて其の標準を異にするものであるが、今此評價の構成分子を生産者と消費者との關係を基礎として表示すれば左の如くである。

生産者と消費者との關係 評價の要素

生産者——消費者  
生産費  
(運賃)

生産者——小賣商——消費者  
生産費  
小賣營業費  
(運賃)

生産者——卸商——小賣商——消費者  
生産費  
卸賣營業費  
小賣營業費  
(運賃)

右表に示すが如く、生産地が消費地と同一であつて、且つ生産者が直接消費者に

貨物を供給する場合に於ける其貨物に對する供給者、即ち此場合には生産者の評價は生産費のみを標準とせるものであるが、貨物が一旦小賣商の手に渡りて夫れより間接に消費者に賣却せらるゝ場合に於ける其貨物に對する供給者、此場合には小賣商人の評價は小賣商が生産者に支拂ひたる生産費と小賣商自身の營業費とを基礎として行はるゝものである。又生産者と消費者との間に小賣商人のみならず卸商も介在する場合には、生産者が貨物を卸商に賣渡す際に於ける生産者の評價は勿論生産費のみを標準とせるものであるが、卸商が小賣商に販賣するとの評價は卸商が生産者に支拂ひたる生産費並に卸商自身の營業費を基礎として行はれ、更に小賣商が消費者に貨物を供給する場合に於ける小賣商の評價は小賣商が卸商に支拂ひたる生産費、卸賣營業費以外に小賣商自身の營業費を標準として定まるものである。而して勿論生産地と消費地とを異にする場合には生産者と消費者との關係が直接的たると將た又間接的たるとを問はず、上記の要素以外に運賃が評價構成の一分子となるは再言するの要を見無し。

第八款 營業費と生産費

物價は何故に騰落するや

普通商品に對する供給者の評價は上述の如く運賃、小賣商及び卸商の營業費並に生産費を標準とせるものであるが、此の中運賃は商人が貨物の運送に對して運送業者に支拂はるゝ貨料であつて、其の高低は通常商人の左右するを得無いものである。換言すれば、運賃は商人の立脚地より之を觀れば既に與へられたるものであつて、如何ともすることが出来無い。貨物運送の依頼人は各種貨物の一定量に就きて運送業者の要求する賃金をば否應なしに支拂はねばなら無い。従つて運賃は大多數の貨物市價の少からざる部分を構成するものであるにも拘らず、生産業者も商人も共に、運送業を兼營せざる限り、運送費の輕減を圖ることが出来ないのである。只、少量の貨物の運送をば數次に運送業者に依託するよりも一時に多量の物品の運送を託する方比較的費用の少きは勿論である。然しながら生産業者又は商人は通例此範圍を超へて運送費を節約することが出来無い。之に反して營業費及び生産費は、多少の例外はあるが、或る程度まで之を輕減すること必ずしも不可能で無い。されば左に營業費及び生産費の解剖を試み、如何なる點に於て之が節約を行ひ得るかを明かにしやうと思ふ。

先づ營業費に就きて觀るに、卸賣と小賣との間に且つ販賣規模の大小に依りて多少の相違あるは勿論であるが、一々細論するは餘りに煩はしいから總括的に説明するとすれば、營業費は(一)一般經費、(二)商品費、(三)此兩者の性質を併せ有するものの三種に分類することが出来る。而して此中(一)一般經費に屬する營業費としては店舗費、設備費、燈火費、暖爐費、廣告費、運轉資金の利子、火災保險料、經營費、店員費、並に諸雜費等を挙げ得る。爰に運轉資金の利子と名くるは商品の仕入れに要する資本の利子を謂ふに外なら無い。假りに人ありて一萬圓の資金を以て成る貨物の小賣又は卸賣を開業するに當りて、其資金の中五千圓を以て一店舗を購ひ、一千圓をば諸種設備の費用に充て、殘額の四千圓を以て商品を仕入れたりとすれば、四千圓に對する利子は即ち吾人の所謂運轉資金の利子である。若し此資金が借入金であつて、之に對して年一割の利息を支拂はねばならぬとすれば、商店主は營業費の一部分として年額四百圓の利子を見積りて之を營業の利潤より回收せねばなら無い。然らば店舗購入費の五千圓並に設備に對する支拂金千圓、合計六千圓に對する利子は如何と云ふに、之に對しても年利六百圓を見積らねばならぬので



あるが、店舗及び設備は概して年々幾分か價值を減ずるものと看做さねばならぬから、此兩者に對しては更に所謂減價償却を行ふ必要がある。假りに此償却率を年一割とすれば、利子以外に一ヶ年六百圓の經費を見積らねばならぬ。従つて、店舗費は合計千圓(五千圓の二割)、設備費は二百圓(千圓の二割)に相當する。之に運轉資金の利子六百圓を加ふれば、營業費は此三項目丈けにても一ヶ年一千六百圓に上る計算になる。

右の試算は店主が全然借入金で以て營業することを假定して行つたものであるが、若し自己の資金を用ゆるとすれば、聊か趣きを異にするに至るは勿論である。店舗竝に設備の減價償却は矢張り此場合にも約一割、即ち年六百圓位に見積らねばならぬであらうが、一萬圓の資金に對して他人に利子を支拂ふ必要が無いのであるから、此點に於て多少の相違を生ずることになる。勿論自己の資金を利用すればとて、利子を計算する必要が無いのでは無い。何故となれば、若し店主が一萬圓の資金を營業に用ひ無いとすれば、之を銀行に預入するか、或は有價證券に投資するか、或は又他人に之を貸與して相當の利子を收むるか、或は更に他の方面に

之を利用して多少の利得を擧げるに相違無いのであるから、此一萬圓をば自己の事業に投じたる際に於ても、此資金其物の運用より若干の収益を得んとするは理の當然であるからである。然らば店主は幾何の收入をば此資金の利用より豫期するであらうかと云ふに、それは他の方面に之を用ひたる場合に收め得ると店主の信ずる所得額の見積りに依りて定まるものと看做し得る。此見積りが金融事情に對する見積者の知識及び投資上の經驗等に依りて等差あるは勿論である。假りに此見積りが年一割であるならば、資金を借入れて營業すると看做したる前の假例に於けると同じく、店舗費、設備費竝に運轉資金利子の合計は一千六百圓に上るのであるが、若し利子の見積額が年五分に過ぎないとすれば、此三項目の營業費は一ヶ年合計一千百圓に過ぎ無いことになる。尙ほ店舗が購入せるもので無くして借家であるなれば、夫れに對して支拂はるゝ家賃が店舗費を構成するのは云ふまでも無きことである。若し此家賃が一ヶ月百圓ならば、店舗費は一ヶ年千二百圓であつて、設備費は減價償却として百圓、其設備に對して支拂ひたる千圓の利子として百圓(一割と看做せば)、合計一ヶ年二百圓、運轉資金の利子を一割と看做して一ヶ

年四百圓、即ち總計一千八百圓に上ることになる。

次に經營費とは事業の經營監督に要する費用を謂ふのであつて、假りに店主が自ら商店の經營に當るの煩勞を避けて支配人を置き全部之に一任するとすれば、此支配人に相當の給料と手當を與へねばならぬ。又若し店主が自ら事業の經營を主宰するとすれば、自己の勞力に對する幾何かの報償を求むるに相違無い。何故となれば、假りに店主が事業の經營に時間と勞力とを費す必要なければ、他の方面に於て活動して何等かの報酬又は或る他の無形の満足を得ることが出来るのであるから、此報酬又は無形の満足を犠牲に供して全く無報償にて一商店の經營に艱難するが如きことは無いからである。然らば店主は幾何の報償を商店の經營監督より豫期するであらうかと云ふに、それは勿論店主の教育の程度、技倆、經驗等に依りて大なる逕庭あるは勿論であるが、店主が若し他方面にて活動すれば收め得ると信ずる所得額は即ち商店の經營より期待する報償額となるものであつて、此報償期待額は此商店の經營費と看做す可きものである。

此の外尙ほ一般經營に屬する營業費としては上述の如く燈火費、暖爐費、廣告費、火災保險料、店員費並に其他諸雜費等を挙げなければならぬが、此等は皆な單純なる性質を有するものであるから、特に一々其内容を説明する必要があるまい。而して店舗費以下此等一般經營の部類に屬する營業費は營業全部に掛る費用であつて、一定の規模を假定すれば、商賣の繁閑に依りて殆んど何等の増減を來さざるものと看做さなければならぬ。勿論二間の間口を有する店舗と十間の間口を有する店舗との間には店舗費、設備費、燈火費、暖爐費、火災保險料、運轉資金、店員費及び諸雜費等に一大等差あるは贅言するの要なき所であるが、或る一定の規模を有する一商店、例へば五間の間口を有する一店舗を假想して考へれば、賣揚が日々に増減するも、右に挙げたる一般經營は其毎日の賣揚に比例して伸縮し無いは勿論、殆んど常に一定してゐるものと看做して差支ない。

次に第二種の營業費に屬する所謂商品費としては包裝費並に配達費を挙げ得る。此兩經費は常に必ずしも必要なるものではないが、商品には適宜の用紙を以て包裝を施して購買者に渡す西洋の習慣が我國にても漸次普及しつゝ、ある今日、多くの商店にては商品の包裝費を營業費の一部として支出するの必要に迫られ

てゐる。又、商品が相當の價格を有するものなるか、或は重量の多き性質の物品である場合には、商店が店主の費用にて顧客の住宅又は顧客の欲する其他の場所へ配達することを要求せられるの常であるから、此配達に要する費用をも負擔せねばならぬ。

而して此第二種の營業費たる商品費の特徴とする所は、前に説明したる一般經營とは異なりて、商品の販賣量に比例して増減することに外ならぬ。即ち包裝費にせよ又配達費にせよ、共に商品一箇毎に幾何かを要するのであるから、販賣高が多ければ多きに従ひ、多額の經費を支出せねばならぬ。只、配達費に在りては、若し日々の販賣額が頗る多量に上り、従つて配達を要する賣品の數も多き場合には、商品一箇當りの配達費が配達量の少きときよりも比較的輕微であるは勿論であるが、一般經費に於けるが如く商賣の繁閑に拘らず一定してゐるものと看做すことが出来ぬ。

最後に第三種の營業費は第一種並に第二種營業費の性質を併有するものであり、つて、截然此兩者の孰れかに分類すること能はざる經費であるが、此第三種に屬する營業費としては營業稅並に廢品補填費を擧げ得る。單に營業稅と云ふも、其賦課の方法に依りて營業費に對する關係上より觀たる性質を異にするは勿論であつて、濫りに營業費に及ぼす其の影響に就きて輕卒なる斷定を下すことを避けなければならぬのであるが、我國の現行大正十一年營業稅の如く商店の貸賃價額、從業者の數、並に販賣額を標準として其課稅額を決定する規定の下に於ては、貸賃價額及び從業者を標準として賦課せらるゝ部分は前述の第一種營業費に屬し、販賣額を基準として課せらるゝ部分は之を第二種營業費と看做さなければならぬ。即ち前者は商賣の繁閑に拘らず一定の店舖に對しては常に略ぼ一定せるものなるに反し、後者は商品の販賣金額に正比例して増減するものである。次に廢品補填費とは一旦仕入れたる商品中に廢品と爲りたるものを補充するに要する費用、換言すれば廢品の醸す損失を謂ふに外ならぬのである。商品が廢品となりて全然販賣すること能はざるか、若しくは少くとも普通の定價にては賣却すること能はざるに至らしむる原因には種々あるが、其の主なるものとしては破損と腐敗とを擧げ得るであらう。破損は陶器、硝子又は硝子器等に於て最も頻繁に起る

廢品の原因であつて、腐敗は云ふまでも無く主として飲食物、殊に魚類、野菜、果物、菓子等に共通の廢品の原因である。而して破損に基く廢品より生ずる損失は商品の取扱高、従つて其の販賣高の増減に比例するものと看做し得るが、腐敗より來る廢品の損失は販賣高が増加して、商品の新陳代謝が急速に行はるれば行はるゝに従ひて、相對的のみならず、絶對的にも亦減退すると云ふを妨げまいと思はれる。

以上三種の營業費に就きて述べたる所を總括して考ふるに、營業費中には、或る一定の規模を有する店舗を標準とすれば、商賣の繁閑に拘らず常に一定せるものと、商品販賣高に比例して増減するものとあつて、第一種の一般約經費は前者に屬し、第二種の商品費は後者に屬するが、第三種の分類し能はざる營業費中の一部分は前者に類似するものであつて、他の一部分は後者の性質を備へてゐると云ひ得る。而して第一種の營業費は總ての營業費中最も多額に上るものである。殊に店舗費、經營費、店員費並に運轉資金の利子に於て然りである。之れに反して第二種の營業費、即ち各個の商品に就きて要する費用は比較的輕微であるのみならず、縱令此種の營業費が販賣高の激増せる結果として多額に上る場合に於ても、其の

膨脹は販賣品の數量に比例するものであつて、商品各個に對する此種營業費は自ら賣價の一部となりて購買者に轉嫁せられるのであるから、其の増加は眞正の意味に於て店主の負擔を加重するものであると云ひ得無い。又、腐敗より生ずる損失は上述の如く商品販賣高が多ければ多きに從ひ、相對的のみならず、絶對的にも多少減退するの傾向を有するものである。従つて店舗の規模に比して商品の販賣が多量に上り、資金の回轉が頻繁に行はるれば行はるゝに從ひ、商品一個當りの營業費が輕減される。假りに原價十錢にて仕入れ得る或る貨物を消費者に販賣する小賣商店の確定的經費、即ち第一種營業費の全部並に第三種營業費の一部分が一ヶ月三百圓であつて、商品各個に就きて要する不定營業費が一個に就き五厘に上る場合に於て、若し一ヶ月の販賣量が一萬個ならば、此商店にては右の貨物を一個十三錢五厘にて販賣することが出来る。何故となれば、原價十錢、商品費五厘の外に、要する費用は確定營業費三百圓の一萬分の一、即ち三錢であるからである。然しなから、若し販賣量が二萬個に上らば、一個十二錢には賣揃くことが出来る。何故となれば、此場合に於ても原價と商品費との合計は依然として十錢五厘

であるも、一個當りの確定費は一錢五厘に減ずるからである。又、販賣量が三萬個に膨脹すれば、一個十一錢五厘に値下することを得るは勿論である。

以上略説したる所は一定の規模を有する商店が販賣高の増加するに従ひ、商品一個當りの營業品の遞減する状態に外なら無いのであるが、賣店の規模が大なれば大なるに従ひ、商品一個當りの營業費が遞減するを常とする。或る商品を一ヶ月に十萬個販賣する商店は同一商品を僅かに一萬個販賣する店舗よりも多額の店舗費、設備費、燈火費、暖爐費、運轉資金利子、火災保険料、店員費及び其他諸雜費を要するは勿論であるが、其の差が十倍に上るが如きこと無きを常とする。殊に廣告費及び經營費は全然増加し無いことすらあり得る。如何となれば、大商店は小商店よりも廣告に多くの金額を消費するを常となすものではあるが、それは必ずしも絶對に必要な事では無い。又、或る程度までは一人にて一商店の經營に當ること不可能で無いのであるから、經營費は販賣高の増加するに連れて常に必ずしも膨脹するものでは無い。

商人の營業費に關して右に説述したる所は主として小賣商店の經營を標準と

したるものであるが、卸商店の營業費にも適用し得るのである。従つて一般物品販賣業の營業費は其規模の大なれば大なるに従ひ、且つ一定の規模を有する商店に在りては資金回収の頻繁なるに従ひ、比較的輕減さるゝの傾向を有してゐる。營業費が低下すれば、商品に對する商人の評價が下降し、此評價が下降すれば、商人は益々安價に貨物を提供することが出来る。此營業費輕減の手段として米國に於て廣く行はれてゐるのはデパートメントストア(百貨店)並にチェーンストア(連鎖店)の經營である。百貨店は最初佛京巴里にて試みられたものであるが、夫れのも最も發達したる國は米國であつて、他の文明國のみならず我國にても大都市には普及されんとしつゝあるは事新らしく指摘するの必要が無い。此百貨店の目的は一大店舗内に於て無數の種類の商品を販賣して一個當りの確定營業費即ち一般經營を輕減せんとするに在る。之に反して連鎖店は一都市内の所々に數十の小規模の店舗を開き、品目の比較的多からざる同種類の貨物をば各店にて共通に販賣するを目的としてゐる。連鎖店は其販賣貨物の性質に依りて靴店、煙草店、藥品店、裝身具店、簡易飲食店、食料品店、十仙乃至二十五仙の均一價格を以て安價の日

用品を販賣する均一店等に分類し得るが、各連鎖店の規模が百貨商店の如く廣大ならざるは勿論、往々普通各商店街に散在する獨立店舗と大差無いが故に、數十の連鎖店が一企業家に依りて經營され、且つ同一の組織と方法と價格とを以て同種類の貨物を供給する關係上孤立の商店に比して一般經費を減縮し得るは勿論であるものゝ、此一般經費節約の程度が一大建物内にて大規模に貨物の販賣を爲す百貨店に於ける經費節減に及ば無いのは明かである。然しながら、又一方に於ては、連鎖店は百貨店の有せざる長所を有してゐる。各百貨店は全體としては規模が大であるが、無数の商品を取扱ふのであるから、商品の仕入上に於て普通の大商店に比して特に優秀の地位を占めてゐないのであるが、連鎖店の經營者は比較的種類の動き貨物を自己の配下に在る多數の店舗にて供給するのであるから、各種の貨物の仕入高は自ら百貨店の各品種の仕入高よりも多量に上るを常とする。従つて各種種類の貨物をば假りに卸商より仕入れるとしても百貨店よりは優良なる條件にて之が供給を受くることを得るのみならず、生産業者より直接購入するの便宜が多い。前に指摘したる如く、卸商の評價は卸商の營業費を包含するもの

であるから、若し生産者より直接商品を仕入れることを得れば、此卸商の營業費に相當するだけ安價に貨物を仕入れ且つ之を消費者に供給出来る譯である。勿論百貨店と雖も、直接生産者より特約を以て供給を受くることもあるが、連鎖店は上述の理由に依りて生産者との此直接取引に於て百貨店よりも便宜の地位に立つてゐると看做し得る。加之、連鎖店は一都市に限られずして多數の都會に開設せられるものであつて、同種類の貨物取扱高が頗る多量に上る結果として、夫れが生産を自ら行ふを有利とする例もある。若し連鎖店が販賣貨物の生産を兼營すれば、商品の原價を益々低下せしむるを得るは茲に喋々するの要を見ない。

之を要するに、商品に對する商人の評價は營業の規模を大にするか、或は所謂薄利多賣を實行するか、或は又連鎖店に於けるが如く仕入方法の改善に依りて之を低下することを得るものであるが、物品販賣業者は、小賣商なると將た又卸商たるを問はず、自身其取扱品の生産を行はざる限り、生産費を左右することが出来無し。換言すれば、商人に對しては商品の生産費は前述の運賃と同じく與へられたる數量である。營業費は經營方針の如何に依りて或る程度まで輕減せしむるこ

とを得るが、生産費は生産者の要求する通り支拂はねばならぬ。然らば生産費は如何にして定まるものであり、又如何なる影響を商品の評價に及ぼすのであるか。單に生産業と云ふと、廣き意味に於ては農業、漁業、鑛山業、山林業、製造工業等の別があるのみならず、此等諸種の生産業に在りても、産出又は製造する物品の種類に依りて各其業務の状態を異にするものであつて、生産費の内容も亦貨物毎に自ら多少の相違ありと云ふも敢て過言で無いのであるから、貨物の生産費を徹底的に論述するには無数の物品の産出又は製作に要する費用に就きて研究を進め無ければならぬのであるが、そは云ふ可くして行ふ能はざることであるから、左には農作物と器械製作品との二種類の貨物に就き概括的に生産費の内容と其の増減の原因を略説することに定める。

先づ便宜上器械製作品の生産費に就きて觀るに、此種の貨物の生産費は營業費に於けるが如く同じく三種に大別することが出来る。第一種は一般的經營費であつて、一定の規模を有する製造工場に於ては生産量の多少に拘らず比較的確定せるものである。第二種は製造品費であつて、生産量の伸縮に依りて増減する費用

を包含し、第三種は兩者の性質を併有せるものに外なら無い。第一種の一般的經營として舉ぐ可きものは工場費、倉庫費、設備費、燈火費、暖爐費、火災保險料、廣告費、運轉資金、利子、經營費及び事務員費等であるが、此等の經營費は營業費中の一般經營費と大體に於て性質を同じうするのであるから、特に個々の費用に就てき説明を繰返す必要が無い。只、重要な一例外は設備費である。製造工場の設備として最も肝要なるものは云ふ迄も無く機械であつて、機械の購入、維持、修繕、減價償却に要する失費は往々製造業の一般經營費中の最高額に達する。又、事務員費は商人の營業費中には數へ無かつた費目であるが、製造業の經營中には是非共舉げなければならぬものである。單に製造業と云ふも、貨物の製作のみを行ふとは殆んど無いのであつて、物品の賣買事務が常に是れに伴つてゐる。先づ第一に製造業者は機械、原料、燃料及び其の他の消耗品を購入し、次に此等の物資を用ひて製作したる貨物を市場に販賣せねばならぬ。従つて製造業者は此貨物の製造に技師、職工及び其他の勞働者を要する外に、貨物の製作以外の事務を擔當せしむる爲めに事務員を使役せねばならぬ。是れが故に、製造業に在りては事務員費をば特に一費目とし

て擧げる必要がある。

次に第二種の製造品費としては原料費、動力費、勞力費、包裝及荷造費、積出費等を擧げ得るが、此等の費目は大體に於て製造量の増減に比例して伸縮するものと看做さなければならぬ。只、其中一例外と認む可きは勞力費である。製造品の賣行良好であつて、製造量を増加する場合には、職工並に其他の勞働者の數を増さなければならぬから、此際には勞力費は製造量に比例して膨脹すると云ひ得るが、其の反對に製作品の需用減退して、操業を短縮する場合に、製造業者は常に必ずしも製造量の減退に比例して工場従業員の数も縮少する事が出來無い。是れは次に説明する二個の理由に基くのである。一は多年使用し來りたる技師及び職工等をば一時事業が閑散になりたればとて直ちに其の一部を解雇する事が情實上不可能に屬するのと、他は一旦技師及び熟練職工を解雇したる後に於て景氣が恢復して製造量を増加する必要が生じた際に、以前と同一の技師を有せる技師及び職工を再び雇入れる事が往々困難である事情に外ならない。然しながら此範圍内に於て勞力費も矢張り製造量に稍々比例して増減すると看做すを妨げ無い。

最後に第三種の生産費即ち第一種及び第二種生産費の性質を併有する費目としては營業税を擧げ得るのであるが、我國の現行(大正十一年)營業税法にては、製造業に對しては、資本金額、建物賃價額並に從業者を標準として課税するの規定になつてゐるから、資本金額並に工場の賃賃價額に對して課せらるゝ部分並に從業者中の長期雇傭人に對して課せらるゝ部分は固定的の一般經費と同様に看做すを得可く、從業者中の一時的雇傭人に對して課せらるゝ營業税は事業の繁閑に比例して増減するものと見て差支あるまい。

斯くの如く製造品の生産費に於ても、商店の營業費と同じく、製造業の一般的費用であつて、製造量の増減に拘らず、略ぼ一定して伸縮すること殆んど無き經費と製造高に比例して増減する經費とがある結果として、製造業の規模を増大すればするに従ひ、且つ一定の規模を有する製造業に在りては製造量を増加するに従ひ、一個當りの生産費が益々低下するに至るは明かである。此一事は手工業即ち機械を用ひざる製造業に於ても見る現象であるが、殊に機械を用ゆる製造業に於て最も顯著である。機械を用ひざる製造業と機械を利用する製造業との間に於て

物價は何故に騰落するや



規模の増大より生ずる生産費減少の程度に等差あるは、手工業に在りては一般経費に比して、勞力費が多額に上る結果として、縦合職工の數を増して製作量を増加するも、製造品各個に要する製造品費が夫れに連れて膨脹する爲めに、一個當りの生産費の輕減が比較的少なきに反し、機械を用ゆる製造業に在りては、手工業に比して頗る巨額に上る固定的の一般経費が、縦合製造量を増大するも、膨脹すること無きのならず、勞力を要すること比較的少なき爲めに、製造品費の増加が手工業に於けるよりも低率なる結果として、一個當りの生産費が著しく輕減する、に基くものである。従つて器械を用ゆる製造業に在りては、益々規模を増大するか、或は一定の規模を有する事業に在りては、製造率を増加して愈々一個當りの生産費を減少せしめんと努むる傾向がある。

最後に農作物の生産費は如何と云ふに、是れは大別して(一)一般経費及び(二)特別経費の二種に分類することを妨げないが、一般経費としては種子費、肥料費、農具費、土地費、地租及び其他の公課、經營費並に勞力費、又特別経費としては包装費及び積出費等を挙げ得る。此等の費目は土地費を除きては特に説明を要し無いと思は

れる。農作に用ゆる土地は若し農業用に供せざる場合には普通他の目的に利用し得るものである。従つて地主は土地が農作に用ひらるゝ際に於ても若干の報償を期待するは勿論である。農場の所有者が土地の使用に對して幾何かの報償を求むるは製造業者が器械の利用に對して若干の報償を豫期するに類してゐる。只、器械類は自由に複製し能ふものであるから、製造業者は器械に要する費用を比較的正確に計算することを得るに反し、農夫は土地に關する費用を器械に於けるが如く正確に計出することが出来無い。何故となれば、土地は人間の自由に複製すると能はざる性質のものであるから、土地の生産費に就きて明確なる概念を求むると頗る困難であるからである。尤も農作地は荒地の開墾、海河湖沼の埋立に依りて新造することを得るものであつて、此場合には農作地の生産費を略ぼ正確に算出することを得るのみならず、此等新開地の附近の農作地の價值をも、新开地の夫れに準じて概算するを妨げ無い。然しながら開墾又は埋立が總ての地方に於て行ひ得るもので無いのは勿論であつて、新开墾地又は埋立地より遙かに隔りたる地方に於て古來より耕作し來りたる田畑の生産費を知るに由が無い。而かも此

種の農作地も賣買せらるゝことがあるから、従つて其の時價なるものがある。此農作地の時價は年々の農作物收穫高の賣揚より種子費、肥料費、農具費、經營費、勞力費、公課及び其他農作上の諸雜費を控除せる殘額を還元して定めらるゝものである。換言すれば、農作地の時價は夫れより生ずる純收入を資本價値に引直したものである。従つて農作地の時價は農作の豊凶並に農作物の市價の高低に依りて年々著しく騰落するを常とする。されば根本的に云へば、農作地の價値は多くの場合に於て主として農作物收穫の價値が標準となりて定まるものである。而かも收穫は年々増減し農作物の市價も亦時々騰落するものであるから、田畑の時價も前述の如く夫れに連れて昂落するが、一定の時に於ては一定の地價なるものがあるから、農夫は此地價を標準として農作に用ゆる土地に對して幾何かの報償を求むるのである。而して若し農夫が田地を耕作しても其田地の使用其物に對して何等の報償を得る能はざることが明瞭である場合に於ては、全然其田地を農作用に供するを斷念する例が尠く無いであらうと思はれるが故に、吾人は農夫の期待する此報償をば土地費として農作物の生産費中に數へねばなら無い。

扱て農作物の生産費は上述の如く一般經營費及び特別經營費に之を大別することを得るものであるが、一般經營費は一定面積の農作地に對しては略ぼ一定せるものであつて、收穫の大小に比較して伸縮するものではない。之に反して特別費として擧げたる包裝費及び積出費は收穫高に比例して増減するは勿論であるが、此種の費目は一般經營費に比して頗る輕少の金額に上るに過ぎ無い。従つて農業に於ける生産費は一定の時に於て且つ一定面積の農作地に對しては略ぼ一定せるものと看做し得る。是れ農業の一特徴であると云はざるを得無い。更に製造業に對する關係上より觀たる農業の第二の特徴は、製造業に在りては經營者は製造量を何日にも任意に調節するを得るに反し、農夫は一定面積の農作地の收穫高を任意に増減することが出來無い。農業の成績は自然界の現象の影響を蒙ること頗る多く、年に依りて所謂豊凶なるものを生ずる。従つて農産品の單位生産費は此等種々の原因の爲め豫算すること能はざるのみならず、年に依りて大なる等差を呈することがある。換言すれば、收穫が多量に上れば、單位生産費は降下し、收穫が少量なれば、單位生産費が高額に上る。

斯くの如く農作物の生産費は自然界の現象に依りて高低を生ずるものであるが、勿論生産費の軽減をば人力にて圖ること必ずしも全然不可能では無い。農作物の生産費を減少せしむる手段としては種子、農具、肥料等の改良、經營方法の改善、農業労働者の知識の増進等を挙げ得るが、此等の方策は徐々の發達に俟つ可きものであつて、急速に其の實效を期待するを許さ無い。又、農業の規模を擴大して單位生産費の減退を誘致することも出来る。一農家の經營する農場の面積が大なれば大なる程、經營費が比較的少なくなるから、此點よりして單位生産費の軽減を現出せしむることを得る。又、大面積を有する農場が全部一箇所に在る場合には、勞力費及び農具費の節約を行ふことが出来る。然しながら、此等種々の手段に依る農作物の單位生産費の軽減は機械を用ゆる製造業の擴張に依りて實現せしめ得る生産費の節約に比すれば、至極僅少の程度に止まるものである。農業に於ける生産費を節約することが斯くの如く困難なる主なる原因は、農業には廣大なる面積の土地を要する結果として、土地に要する費用は農作物の生産費中の最大要素となることがあるを常とするものであるが、故に、大規模に農業を營む爲め農場

を擴大すればするに従ひ、生産費が自ら殆んど夫れに比例して膨脹するからである。之が一例外を爲すは殖民地に於ける農業であつて、殖民地は人口稀薄なるが爲めに地價低く、従つて土地の賣收に多大の費用を要さ無い。時には全然無償にて處女地の所有權を獲得するを得ることすらある。然しながら、人口稠密の舊國にては土地の時價比較的が高く、之が賣收に多額の失費を負擔せねばならぬ。従つて人口稠密の國に於ては集約的耕作に依りて收穫の増加を圖るに至つた。集約的耕作とは耕耘を精密に爲し肥料を充分に施して一定面積の土地より以前よりも多量の農作物を産出するを云ふのである。此耕作方法を採用すれば、收穫を或る程度までは増加することを得るが、費用も亦増嵩する。此生産費の膨脹に伴ふ收穫増加の程度は地質の如何に依りて各農場間に逕庭あるは勿論であるが、總ての農場を通じて概括的に次の如く斷ずることを妨げ無い。即ち、或る一定面積の農場に對して耕作の度を密にすれば、收穫は或る程度までは失費以上の割合を以て増加するも、其程度を超ゆれば、收穫は絶對的には増加するも相對的には減少し、更に又或る程度を超ゆれば、收穫は相對的のみならず、絶對的にも遞減するの傾向

を有してゐる。今此理をば或る一反の田地に米を作ると假定して數字を以て示すとすれば左の如くである。

生産費	收穫	一石當生産費
一〇 <sup>円</sup>	〇・五 <sup>石</sup>	二〇・〇 <sup>円</sup>
一五	一・〇	一五・〇〇
二〇	一・五	一三・三三
三〇	一・八	一五・〇〇
三五	二・〇	一七・五〇
四〇	二・一	一九・〇五
六〇	二・二	二七・二七
八〇	二・三	三四・七八
一〇〇	二・四	四一・六六
五〇〇	二・二	二二七・二六

右表に示すが如く、一反の田地に十圓の生産費を投ずれば、五斗の收穫あるが爲

めに、一石當りの生産費は二十圓に相當するも、若し生産費を増せば、收穫は比較的に多くなる。即ち二十圓を投ずれば、收穫は一石五斗に上る結果として、一石當り生産費は十三圓三十三錢に減ずる。然しながら、生産費を三十圓に増せば、收穫は一石八斗に達するも、一石當りの生産費は十五圓に増加する。尙ほ此の上耕耘を密にして一反に對して全額百圓の費用を投ずれば、收穫は二石四斗に増加するも、一石當り生産費は四十一圓に上る。而して更に尙ほ耕耘の度合を密にすれば、收穫は却つて絶對的に減少するに至るものである。勿論耕作密粗の度合に連れて收穫量の伸縮する程度は各農場毎に異なるものであるが、總ての農作地は此現象に支配せられてゐる。此現象は土地收穫遞減の法則として普通知られてゐるものである。尤も此法則は農作地のみで無く、總ての土地に共通せる現象であるが、農作地に於て特に最も顯著に働いてゐる。即ち農場は此法則の嚴格なる支配の下に置かれてゐるが爲めに一定面積の田畑より收穫をば或る程度を超えて増加せんとすれば單位生産費が遞増するの傾向を有してゐるのであつて、此點に於て農場は生産量を増すに従ひ單位生産費を遞減するとの容易なる器械を用ゆる

物價は何故に騰落するや

製造業とは大に性質を異にしてゐる。従つて農夫は農作物の價格が相當の點まで騰貴するに非ざれば、生産費の膨脹を來たしてまでも收穫の増加を圖ることを欲し無い。農夫の立場より之を觀れば、多額の生産費を支出して收穫の増收を圖るよりも、收穫が比較的少くとも少額の生産費を負擔するを以て有利とする。何故となれば、農作物の收穫が増加すれば、其の市價が低落するから、收穫の賣揚が生産費を償はざることあるに反し、收穫が少量なれば、市價騰貴する結果として、多額の收益を擧ぐるを得るからである。

#### 第九款 供給の限度

前款に於て吾人は物品販賣業者並に生産業者の評價の基礎たる營業費及び生産費の内容並に此兩者増減の現象を説明したが、營業費並に生産費が一定の時に於ては各商人及び生産業者毎に異なるものであることを忘却してはなら無い。即ち或る商人の營業費は他の商人の營業費よりも低く、又或る生産業者の生産費は他の生産業者の生産費よりも少いのであつて、其開きは往々にして高率に上ることがある。換言すれば、一部の商人又は生産業者は貨物の供給上他の商人又は

生産業者よりも遙かに優秀の地位を占めてゐる。従つて若し此等の競争上の強者が供給量を増加すれば、他の供給者を驅逐して供給を獨占することを得る結果として、收益を増加するを得るに至る筈である。然しながら如何なる貨物と雖も、其の供給を獨占するは容易の業で無い。政府は法律を以て供給の競争を禁ずることを得るが故に、獨占業の經營は比較的困難でない。我國にては煙草の製造、郵便、電信、電話は政府に於て之を獨占し相當の收益を擧げつゝあるが、是れは法律の賜物である。然るに民間の事業家は政府に於けるが如く、法律の力を以て獨占業を營むの便宜を普通有してゐない。只是れの許されるのは電燈、電車、瓦斯に於けるが如き所謂公益事業に限られてゐる。而かも此等の特許獨占業は政府より種種の制裁を受け無ければならぬ故に、高率の收益を期待するは不可能である。其他の企業に於て民間事業家が獨占を確保するには巨額の資金と卓越せる經營の技倆とを要するのであるが、一事業を獨占するを得るに足るだけの資力と技倆とを併せ有する者は殆んど無い。尤も個人が人口の多からざる町村に於て或る種の生産業又は物品販賣業を一時的に獨占するの例は皆無ではないが、大都會に於

ては其の例頗る尠くない。況して一國全體に於てをやである。資金は勿論他より之を借入れることを得るものであるから、縦令自己に充分なる財産の無き者と雖も、事業に對する相當の經驗を有し且つ向上心に富める者が借入資金を以て事業を擴張し多大の成功を收むること尠く無いが、個人の資金借入能力に限りあるから、生産業又は物品販賣業をば借入資本を以て獨占し得る望が多く無い。又、合資會社或は株式會社を起して友人間若しくは一般公衆より資金を吸収し大規模なる營利事業を經營することが出来るものであるし、且つ實際に此方法に依りて無數の大事業が經營されてゐるが、此種の企業に在りても、設立者又は經營者の手腕及び人物に對する世人の信用に限度がある結果として、事業を獨占し得るに足る丈の資本を吸収することを得無い状態である。

斯くの如く生産業にせよ將た又物品販賣業にせよ一事業を獨占することは實際上不可能であるが爲め、一貨物に對する各生産業者及び各販賣業者の供給には限度なるものがあつて、各物品は常に多數の人に依りて供給されてゐるのである。然しながら、此事情に關聯して吾人の特に注意するを要する點は各貨物の供給者

間に於て供給能力並に評價の相違があるの一事に外なら無い。供給能力に相違を生ずるは資力及び資金吸収力に逕庭がある爲であつて、評價に等差あるは事業經營上の手腕及び其他特種の事情に存する相違に基いてゐる。左表は一貨物の供給者間に於ける供給能力並に評價の差を示したるものである。

價格	需用	供給		
		甲	乙	丙
十錢	九〇〇〇	一〇〇〇	—	—
十二錢	七〇〇〇	三〇〇〇	二〇〇〇	一〇〇〇
十三錢	六〇〇〇	六〇〇〇	三〇〇〇	二〇〇〇
十五錢	四〇〇〇	九〇〇〇	四〇〇〇	三〇〇〇

右表に示すが如く、假りに一貨物の價格が十錢より漸次十五錢に上るに従ひて、需用は九千より四千に遞減すると定めたる場合に、供給者が三人ありて、甲は十錢ならば千個、十二錢ならば二千個、十三錢ならば三千個、十五錢ならば四千個、乙は十二錢ならば初めて千個、十三錢ならば二千個、十五錢ならば三千個、最後に丙は十三錢ならば初めて千個、十五錢ならば二千個を供給するとすれば、市價は十三錢に落

物價は何故に騰落するや

付くに相違無い。何故となれば十三銭にて需用も供給も共に六千個あるからである。此甲乙丙三人の供給者中に於て甲は乙丙に對して供給上優秀の地位に立つてゐる。即ち甲は他の供給者よりも供給能力高くして且つ評價が低い。然らば何故に甲は供給を獨占し無いのであるか。換言すれば何故に甲は價格が十銭ならば九千の需用があるのであるから、僅かに千個を供給するに止めずして、九千個を供給し無いのであるか。曰く、十銭では千個以上供給することが出来無いからである。又乙及び丙も共に斯くの如き安價では一個も供給することが出来無い。従つて供給は需用を満たすに足らない結果として、價格は十銭に定まらずして、夫れよりも騰貴するに相違無い。然らば市價は十二銭に定まるかと云ふに、十二銭ならば需用が七千に減退する一方、甲は二千個を供給し、且つ乙は初めて千個を供給するに至るのであるが、供給總額は尙ほ需用を充たすに足ら無いのであつて、價格が十三銭ならば需用が初めて供給と一致する。即ち需用が一方に於て六千個に減退すると同時に、甲の供給が三千に増加し、乙の供給が二千に増加し、且つ丙が初めて千個を供給するに至るからである。而して價格が十五銭ならば、需用

は四千に減ずるが、甲の供給は四千、乙の供給は三千、丙の供給は二千個に夫れ々増加する。結果として、供給總量は需用に超過する爲めに、市價は十五銭に定ら無い。此際甲の供給丈にて需用を充たし得るのであるから、若し乙及び丙の供給が無かつたならば、甲は十五銭にて四千個を供給し得るのであるが、乙及び丙の競争がある爲めに、甲は市場を獨占することが出来無いのである。

斯くの如く、吾人の假定せる事情の下に於ては右の貨物の市價は十三銭に定まるのであるが、此丙の供給する千個に對する丙の評價は勿論十三銭である。換言すれば、丙が千個供給するに當りて丙の負擔する費用は一個十三銭に相當してゐるのである。各貨物の供給者の大多數は此丙の地位に在るものであつて、此等の者を限界供給者と名づけることを妨げ無い。即ち此等の限界供給者は云はゞ實費を以て貨物を供給してゐるのであつて、特に何等の利得なるものを收めてゐないのである。斯く云へば或は利益なくして一事業を經營するものがあると思像出来無いと思ふ人があるかも知れない。勿論事業家は生産者たると物品販賣業者たるとを問はず、奇利を博して資産を増殖せんと冀ふてゐるのであるが、大多數は

上述の如く實費に相當する價格、即ち自己の評價を以て物品を供給しつゝあるのであつて、何等餘利收得を擧げ得るの地位に居ら無いのである。然しながら、此評價なるものは、上文に於て生産費及び營業費を説述したる際に明かにして置いた通り、貨物供給上の實費を基礎として行はるゝものであつて、此實費の中には供給者の資金に對する利子のみならず、供給者自身の勞力に對する相當の報酬までも含まれてゐる。従つて、生産業者も物品販賣業者も相當の分量を供給してゐる間は各其事業より自己の生活費を收めてゐると看做し得るのであつて、大多數の小企業家は此生活費を儲ける丈けにて満足してゐるのである。此一事は尙ほ自身何等事業を經營せずして他人に勤勞を提供して辛うじて生活費に相當する俸給、給料又は賃銀を受けて満足してゐる人々の事情と異なら無い。従つて此等の限界供給者は、經驗を積むに従ひて經營上の手腕を増すか、或は又特別の事情に依りて事業の擴張を圖り得るに至らざる限り、何日まで以前と同一の規模を以て生産又は販賣を繼續せねばなら無いのであつて、是れ小企業家の大多數が實際に遭遇しつゝある運命である。

之に反して優秀の地位に在る供給者は多少の餘利收得を擧げ得るのである。前表に示したる乙は貨物が一個十二錢ならば千個、十三錢ならば二千個を供給するのであるが、若し市價が十二錢に定まりて、乙が千個を供給するとすれば、乙は何等の餘利收得を擧げることが出来無い。然しながら、前文に假定したる如く、市價が十三錢であつて、乙は二千個を供給するとすれば、其の中千個に對しては乙は一個十二錢の實費を要し、他の千個に對しては一個十三錢の費用を負擔するのであるから、第二の千個よりは何等の餘利收入を得無いが、最初の千個よりは一個に付一錢宛の収益を擧げることが出来るのである。而して若し乙が此一錢宛の餘利收得をば浪費せずして之を貯蓄するとすれば、長き年月中には資金が自ら豊富となりて、事業を擴張して、益々一個當りの經費を輕減し、愈々餘利利得の率を高めることを得るのであつて、所謂事業の成功者は優秀なる供給者の地位に立てる者が餘利利得を生活の向上に利用せずして、之を蓄積し以て事業資本の充實を圖りたる者に外なら無い。

最後に甲は最も優秀なる地位に立てるものであつて、市價が十三錢のときに供



給する三千個の中最初の千個の實費は十錢、次の千個の實費は十二錢、最後の千個の實費は十三錢であるから、最初の千個よりは一個に付三錢の餘利利得、次の千個よりも一錢の餘利收得を擧げ得るのである。

## 第十款 評價の移動

以上説明したる各供給者の評價と供給高との關係は一定の時に於ける事情を基礎としたるものであつて、時が経過し事情が變化するに従ひ、各供給者の評價が移動し、其の結果として供給高が變動することあるを記憶せねばならぬ。前款に於て吾人は一貨物の市價が十錢ならば甲は千個、十二錢ならば二千個、十三錢ならば三千個、十五錢ならば四千個供給すると假定したが、此甲の供給高は或る一定の時、例へば大正十二年一月十日に於ける甲の評價に依りて定まりたるものであつて、同年の二月一日には甲の供給高は一月十日に比して或は減少し或は増加することがあり得るのである。既に上文に於て論述したる如く機械製造品に在りては生産高を増すに従ひ生産費を軽減するを得るものであり、又物品販賣業に在りても規模を大にすればするに従ひ營業費を節約し得るものであるが故に、一貨物

の或る供給者が其の供給高を増すに従ひ供給能力の増加すると同時に供給者の評價が下降するの傾向を有してゐる。例へば前掲の甲は事業を擴張したる爲めに、九錢にても千個を供給することを得るに至り、十錢ならば二千個、十二錢ならば四千個、十三錢ならば六千個、十五錢ならば八千個を供給するを得るかも知れ無い。即ち器械製作品に在りては益々精巧なる器械を用ひ、且つ規模を大にすればするに従ひ、愈々一個當りの生産費を軽減することを得るものであつて、生産費が減少すればするに従ひ、益々安價に供給するを得るのであるから、器械製作品に於ては製造の規模を擴大するは頗る有利である。従つて此種の貨物の供給に在りては競争が時として激烈となることがある。即ち各製造業者は競争者に先んじて事業を擴張し同業者よりも安價に且つ多量に供給せんと圖るのである。而かも此競争が或る一定の限度を超えて行はるゝ際には、生産業者の利益が消滅するのみならず、時としては生産高が需用に超過する結果として、市價が暴落するに至り、夫れが爲めに生産業者が莫大の損失を招くことすらあるから、一貨物の生産業者は相互の利益を慮りて競争の中止を約定することがある。其の手段は一定の賣價

を協定して夫れ以下の價格にて市場に供給せざることを互に約束するか、或は生産量を制限するか、或は又此兩手段を併用するに在るが、此手段を適宜に用ゆれば、前款に於て説明したる餘剰收得、即ち普通に所謂利潤の減退を防止するを得る。斯くの如く、器械製作品に在りては價格が低下するに従ひ供給が却つて増加することがある。是れ一見最初説明したる供給の法則と衝突するが如く思はれるも、實はさうで無い。一貨物の市價が低落するに従ひ供給は減少するの傾向を有するとなす供給の法則は一定の時に於ける事情を根據とするものであるから、時間が経過し事情が移動する場合には適用されないことを生ずるは勿論である。器械製作品の製造の規模が擴大され、價格が低落するとも供給が膨脹する際に在りても、一定の時に於ては此供給の法則は働いてゐるのである。即ち或る一定の日に於ては、縦合價格の低下するに従ひ供給の増加しつゝある器械製作品に在りても、市價が高ければ高き丈け供給が多いのである。只、或る期間を通じて觀察すれば、此種の貨物に在りては製造規模の擴大に基く生産費節約の結果として市價の低落するにも拘らず供給が減退せざるのみか、却つて膨脹することがあると云ひ

得るのである。

器械製作品に就きて右に述べたる所は直ちに之を農作物に適用することを得無い。人口稠密であつて處女地の尠き舊國に於ては農業の規模を擴大するも、又一定面積の農場より集約的耕作に依りて多量の收穫を圖るとするも、單位生産費は前述の如く膨脹するの傾向を有してゐるから、農作物の供給は市價が騰貴せざる限り増加せざるを常とする。即ち農作物に在りては評價は器械製作品とは反對の方向に移動するの傾向を有してゐる。勿論國內に於て廣大の面積を有する土地が新に開墾せらるゝか、或は國外の殖民地に農業が勃興するか、或は又運輸機關が大に發達して運賃が激減せられたる場合には、農作物の供給が市價の低落せるにも拘らず増加することある可きは贅言するを要し無い。

## 第六節 市價の變動

### 第一款 市價決定要素の表圖

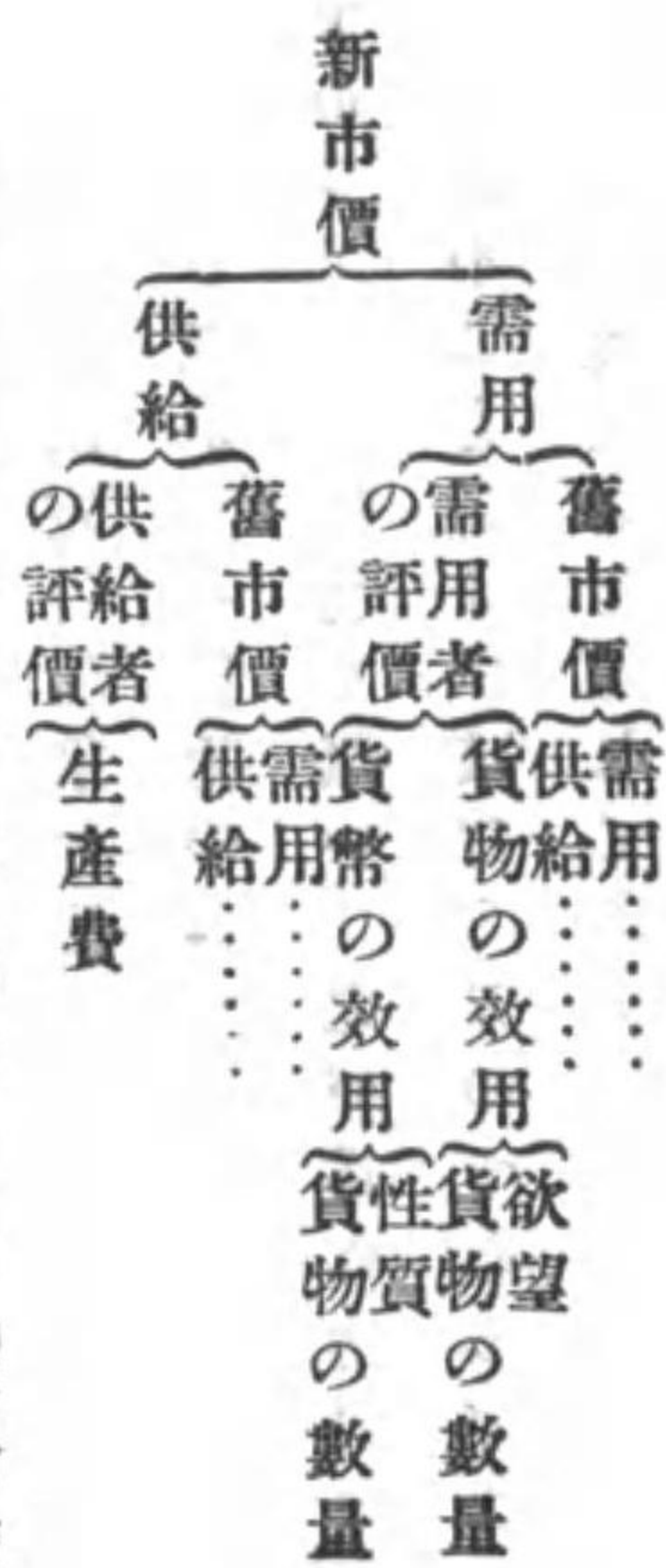
前數節に互りて一貨物の市價が如何にして定まるものなるかを説明したが、是

物價は何故に騰落するか

れより進んで市價が如何なる原因に依りて騰貴又は低落するものなるかを明かにしたい。此市價の變動に就きては既に上文に於て簡單なる解説を加へて置いたのであるが、市價騰落の現象は頗る複雑なるものであつて、自ら其原因に關しては幾多の異説が唱へられてゐるから、誤解を防ぐ爲めに物價變動の原理をば更に一層詳細に説述する必要があると思はれる。

抑も一貨物の市價を變動せしむる原因は無數であるが爲め、物價變動の原理に關して種々の誤解を懐いて居るものが尠くないのであるが、若し上文に於て縷説したる市價決定の順序を常に念頭に置けば、其變動の原則を會得するのは左程困難なることでもあるまい。即ち一貨物の新市價は其貨物の需要と供給との一致する點に於て定まるものであつて、需用は舊市價と其貨物に對する需用者の評價とに依りて定まるのである。而して此舊市價は同じく需用と供給との一致に依りて定つたものである。又、貨物に對する需用者の評價は需用者に對する其貨物の效用と代金として支拂はるゝ貨幣の效用とに依りて定まるものである。更に又供給に就きて觀るに、其の大小も亦舊市價と貨物に對する供給者の評價とに依

りて決定されるが、供給者の評價を論ずる際には貨物をば(一)古書畫骨董品等の如く複製し能はざるものと(二)他の自由に複製し能ふ大多數の貨物とに分類しなければならぬ。此の中第一種の貨物に對する供給者の評價は一般貨物に對する需用者の評價と同様に行はれるが、第二種の貨物に對する供給者の評價は供給に要する諸費を基礎として行はれる。今此市價と市價決定の諸要素との關係を表すすれば左の如くである。



右表の内需用の一決定要素たる「舊市價」と供給の一決定要素たる「舊市價」とは勿論同一物である。又舊市價の決定要素たる需用と供給とは表中に示したる新市價を定むる需用並に供給と同一の原則に依りて定まるものであるから、其表

物價は何故に騰落するや

示は之を省略して點線を施して置いた。斯くの如く一貨物の新市價は需用と供給との兩脚の上に立つてゐるのであつて、需用は更に舊市價と需用者の評價との兩脚の上に供給は舊市價と供給者の評價との兩脚の上に立つてゐるものである。従つて市價決定の現象を飽くまで既往に遡りて討究すれば、其決定の要素は無數となる。而かも一貨物の市價をば新たに決定せしむる直接原因は需用と供給とであつて、他に何物も無い。之が爲め物價を變動せしむる原因は、根本的に論ずれば、無數あると云はねばならぬのであるが、此等無數の原因は結局需用か或は供給か或は又此兩者を通じて市價に影響を及ぼすものであることを忘却してはならぬ。

### 第二款 市價變動の直接原因

前述の如く市價決定の要素は既往に遡れば遡るに従ひ増加するのであるから、其要素の數は無數であると云ひ得るが、此無數の要素の一到變化が生ずれば、市價は其の影響を蒙りて騰貴又は低落するに至るのである。従つて市價は無數の原因に依り變動するのであるが、此市價變動の無數の原因をば直接原因と間接原因との二種に分類して研究を進むるを最も便宜なる方法とする。茲に直接原因と

稱するのは市價を直接に變動せしむる原因であつて、こは云ふまでも無く需用又は供給の變動に外ならない。次に間接原因とは直接原因即ち需用又は供給の變動の原因を謂ふのであつて、此間接原因は直接原因に對する關係の密粗を標準として更に第一次の間接原因、第二次の間接原因、第三次の間接原因等に分類するを得る。第一次の間接原因とは直接原因の原因であつて、第二次の間接原因とは第一次の間接原因の原因を謂ひ、他は之に準ずる。

借て市價變動の直接原因は既述の如く需用又は供給若しくは兩者の變動に外ならないのであるが、一貨物の需用が増加する際に、供給が増加することもあれば、又減退することあるは勿論、時には増減せざることもある。又其の供給が増加する時に需用が増加し、或は縮少することもある。此需用供給伸縮の組合せは都合九つあつて、各其組合せの如何に依りて市價の受くる影響が夫れ々異なつてゐる。今此組合せを表示すれば左の如くである。

需用	供給	結果
増	同	稍騰貴す

物價は何故に騰落するや

増	増	増	減	減	減	減	減	同	同	同	同
増	増	減	同	増	増	減	同	同	増	増	減
變動なし	暴騰す	稍下落す	暴騰す	變動なし	變動なし	稍下落す	稍騰貴す	稍下落す	稍騰貴す	稍騰貴す	稍騰貴す

右表に示すが如く、需用供給伸縮の組合せの如何に依りて、市價は種々の影響を蒙るのであるが、其影響中三は「變動なし」、二は「稍騰貴す」、二は「稍下落す」、一は「暴騰す」、他の一は「暴落す」である。尙ほ三個の無變動の内一は需用竝に供給共に増加し一は需用と供給とが減退した結果であるが、此結果は勿論需用と供給とが同一程度に増減する際に生ずるものであつて、若し兩者の變動の率が異なれば、市價は騰貴若しくは低落せざるを得無い。即ち需用竝に供給共に増加する

も、若し需用の増加率が供給の増加率よりも高ければ、市價は騰貴す可く、又其増加率が之と反對の關係を有するとすれば、市價は下落する。需用竝に供給共に減退する場合に於ても、若し需用の減少率が供給の減少率よりも高ければ、市價は下落するが、前者が後者よりも低ければ、市價は勿論騰貴するに至るものである。

以上は物價をして變動せしむる直接原因の説明であるが、然らば貨物の需用供給は如何なる原因に依りて伸縮するものであるか。換言すれば、市價變動の間接原因は何であるか。此問題の研究は直接原因の研究よりも重要である。何故となれば、間接原因とは云ふもの、直接原因の原因であるから、根本原因とも名く可きものであるからである。されば是れより進んで市價變動の根本原因を明かにせねばならぬ。以下先づ需用増減の原因を尋ね、然る後に供給の變動に論及しやう。

### 第七節 需用變動の原因

#### 第一款 人口の増減

物價は何故に騰落するや

單に一貨物の需用と云へば、其貨物の社會的需用を指すものなることは既に述べた通りである。而して此社會的需用は多數の個人の需用の總計に外ならない。従つて一貨物に對する需用の増減は需用者の數の増減又は各個人の需用の伸縮に依りて誘致せらるゝものであると云ひ得る。茲には先づ需用者の増減に基づく需用の伸縮を解説し、各個人の需用の増減に對する説明は次款以下に譲る。

貨物の需用者數の増減を誘致する最大原因は人口の増減に外ならない。人口の増減は(一)自然的増減並に(二)地方的分布の移動に分類することが出来る。人口の自然的増減とは出産と死亡との差に基く増減を謂ふのである。即ち或る一定の國又は地方に於ける出産數が死亡率に超過すれば人口は増加し、出産數が死亡率に及ばざれば人口の減少するのは勿論である。一般的に論ずれば、出産數は佛國等の例外を除き概して死亡數に超過してゐるから、人口は世界的に年々増加するの趨勢を持続してゐる。此見地より觀れば、一般貨物に對する需用者の數は増加しつゝあるものと看做し得る。換言すれば、總ての貨物、少くとも大多數の貨物に對する需用は年々歳々膨脹しつゝあると見て差支へ無い。然しながら、此理由

のみに依りて、物價は年一年と騰貴するに相違ないと速斷してはならぬ。尤も貨物の需用が人口増加の爲めに膨脹しつゝあるにも拘らず、供給が増加しないとすれば、物價は勿論一般に騰貴するに極つてゐる。然しながら、人口が増加すれば貨物の生産者も亦増加するから、貨物の供給も自ら膨脹せざるを得ない。従つて人口が増加するから物價が必然的に騰貴するものであると考へてはならぬ。只、人口が増加すれば貨物に對する需用は概して膨脹するの傾向を有すると云ひ得るに過ぎない。

次に人口の地方的分布の移動は(甲)永久的移動と(乙)一時的移動とに分類しなければならぬ。此の中永久的移動とは移住を指すのであつて、移住は更に國內的移住と國際的移住とに分ち得る。國內的移住の數例としては北米合衆國に於ける東部住民の中央及び西部移住、露西亞に於ける歐露人の西比利亞移住、我國に於ける北海道の開拓且つ各國に於ける人口の都市集中等を挙げ得る。人口が斯くの如く一國の或る地方より他の地方へ移動する際には、貨物の需用に地方的變動が生ずる。即ち移動人口の新住地に於ける貨物の需用は膨脹するも、舊住地に於け

る貨物の需用は之に反して減退するか、或は其需用の膨脹率が減退するに至るものである。

更に國際的移住の最も著しき例は南北兩米大陸への歐洲諸國人の移住である。殊に北米合衆國の移民來住の數最も多く、戰前には一ヶ年に百萬人を超えたことすらある。勿論斯くの如く一國より他の國へ多數の者が移住するとすれば、舊國に於ける貨物の需用は減退するの傾向を有するに反し、移住國に於ける貨物の需用は膨脹する。然しながら移住國に於て貨物の市價が必然的に騰貴するものと斷定してはならぬ。多數の人が來住する國は北米合衆國の如く資源の豊富なる國柄であるから、貨物の産出が多量に上つてゐる爲め、貨物の供給が自ら潤澤である。否な新來住者が富源の開發に貢獻する爲めに貨物の市價が却つて低落するの傾向を有することすらある。而かも單に貨物の需用其物のみならず、就きて云へば、他國人の來住は貨物の需用を増加せしむるものであると斷定しなければならぬ。最後に人口の地方的分布の一時的移動は労働者の出稼、都會住民の避暑避寒、觀光旅行等より生ずる現象である。労働者出稼の著名なる一例としては伊太利人

の國外出稼を挙げ得るが、仕事が終われば歸郷するの常であるから、人口の地方的分布が一時的に變動を蒙るに止まる。都會人士の避暑避寒も亦季節的に行はるゝものであつて、我國の例を取れば箱根、大磯、逗子、鎌倉等の人口が一時的に膨脹するも、各其の季節が終われば其地方の人口は再び縮小するものである。觀光旅行も亦之に類するものであつて、觀光旅行者の永住地の人口は夫れが爲め一時的に減退し、名所古跡所在地の人口は周季的に膨脹する。此等人口の移動は一時的であるから、其の影響も亦一時的である。即ち季節的に人口の膨脹する地方に於ける貨物の需用は一時増加するも、季節後には減退し、之に反して一時的に移動する者の永住地に於ける貨物の需用は季節中は幾分減退し、其の後は舊に復するの傾向を有してゐる。而して労働者の出稼に基づく影響は別として、避暑避寒客及び觀光旅行者は勿論至る所に於て物價を騰貴せしむる。是れ彼等は貨物の需用を膨脹せしむるが、一方必ずしも供給が夫れが爲めに増加し無いからである。

#### 第二款 貨幣の效用の増減

前款に於ては需用者の増減に基づく貨幣需用の伸縮を説明したが、是れより進ん

で各需用者の需用が如何にして増加し、又如何にして減少するかを明かにし度い。一貨物に對する一個人の需用は、既に上文に略説したるが如く、其貨物の市價と其貨物に對する個人の評價とに依りて定まるものである。即ち市價高ければ個人の需用尠く、市價低くければ需用が多い。之に反して個人の評價高ければ需用多く、評價低くければ需用が尠いのである。従つて或る一貨物に對する一個人の需用が何故に増減するかを明かにするには市價と評價とか如何にして變動するかを研究す可きである。然しながら市價變動の原因は既に上文に於て説明したのであるから、茲に其説明を繰返す必要が無い。従つて特に説明を要するは貨物に對する需用者の評價の變動のみである。此需用者の評價は既述の如く需用者に對する貨物の效用と貨幣の效用とに依りて定まるものであつて、貨物の效用高ければ評價も高く、貨物の效用低くければ評價も亦低い。之に反して貨幣の效用高ければ評價は低く、貨幣の效用低くければ評價は高いのである。従つて貨物に對する各需用者の需用増減の原因は之を貨物の效用と貨幣の效用との増減に求めねばならぬ。此兩效用中本款に於ては先づ便宜上貨幣の效用が如何にして増減

するかを明かにし、次款以下に於て貨物の效用の伸縮に論及することにする。

一個人に對する貨幣の效用の大小を定むる原因をば大別して内的原因と外的原因に分つことが出来る。内的原因としては(一)知識と智力、(二)性質、(三)習慣、(四)年齢、(五)健康、(六)趣味等を挙げ得る。(一)知識博くして智力高き者は金錢を無益に消費すると比較的少なきに反し、無學無智の者は金錢を浪費するの傾向がある。即ち前者に對する貨幣の效用は高く、後者に對する其の效用は低い。(二)進取の氣性に富める者又は虚榮心の強き者は金錢を輕んずるが、然らざる者は金錢を左程浪費し無い。即ち前者に對する貨幣の效用は高く、後者に對する其の效用は高いと云ひ得る。(三)飲酒、喫煙、其他種々類似の習慣を有する者に對する貨幣の效用は低く、此種の習慣を有せざる人々に對する貨幣の效用は比較的高いと看做すを妨げ無い。(四)人は年齢の加はると共に漸次金錢を重んずるに至るの傾向がある。小兒は勿論貨幣の效用に就きて普通殆んど何等の理解を有つてゐない。青年は稍々金錢を重んずるも、尙貨幣の效用を高く見てゐないを常とする。然るに壯年、中年、老年に達するに及び、次第に貨幣の效用が高くなる。(五)他の事情にして同一なる限り



虚弱者に對する貨幣の效用は強壯者に對するよりも高い。蓋し病弱者は健康を恢復せんが爲めに強壯者には必要で無い失費を負担せねばならぬからである。

(六)音樂、繪畫、演劇、登山、其他種々の娛樂等に關する趣味の廣き者に對する貨幣の效用は此等の趣味の少なきか或は全然之を有せざる者に對するよりも低い。或る一趣味を満足せしめるには多少の費用を要するを常とするものであるから、貨幣の效用の低き者でなければ趣味を持ち得無いとも云へるし、又趣味の廣き者は金錢を比較的輕んずる者であるとも言ひ得る。

次に外的原因としては(一)財産、(二)收入、(三)社會上の地位、(四)係累の有無多少、(五)社會の風習、(六)資本の支配權等を擧げ得る。(一)財産家に取っては金錢は左程貴く無い。之に反して貧困者は財寶を大切にすることを常とする。従つて金満家に對する貨幣の效用は貧棒人に對するよりも低い。他の總ての事情にして全然同一なりとすれば、貨幣の效用は財産の多少に反比例すると云ひ得る。言葉を換へて云へば、財産が多ければ多い丈け貨幣の效用は低く、財産が少なければ、少きに從ひ、貨幣の效用は高いのである。然しながら他の總ての事情が必ずしも同一でないから、或る

富豪が却つて赤貧洗ふが如き者よりも節儉家であるやうなことも見る。さは云へ、大體に於て金持に對する貨幣の效用は低い。財産家が學校又は慈善事業に多額の寄附を爲すのは貨幣の效用を低く見積つてゐるからである。(二)收入の大小も亦貨幣の效用に對して財産と同様の影響を及ぼしてゐる。即ち收入の多き者に對する貨幣の效用は少額の所得を有する者に對するよりも低い。尤も同じく收入と云ふも、財産より生ずるものと、企業より生ずるものと、勤勞より生ずるものと、この別がある。此の中財産より生ずる所得は最も多く確實性を帯びてゐるから、此種の所得を多く收めつゝある者に對する貨幣の效用は他種の所得を有する者に對するよりも低からざるを得無い。之れに反して勤勞所得は最も不確實なものである。自分の腕一本の働きて生計を立てゝゐる者が病氣に罹るか或は怪我をすれば直ちに收入の道が絶える。加之、縦令無病息災の時でも仕事が無ければ收入を求めるとが出来無い。従つて此種の所得に依りて衣食する者に對する貨幣の效用は金額は同じであるも種類の異なる所得を有する者に對するよりも比較的高い。更に企業所得は其の確實性に於て財産所得と勤勞所得との中間

に位してゐる。換言すれば、企業より生ずる所得は財産の収入程確實なものでは無いが、俸給賃銀等よりも安全である。總ての營利事業には盛衰浮沈があるから、其の利潤は地代家賃又は公債の利子の如く確定的でなく常に増減するのみならず、時としては利潤が全然消滅して損失を生ずることすらある。然しながら又一方に於ては企業家は労働者の如く常に失職の危険に曝されてゐない。斯くの如く企業所得は勤勞所得よりも永續性に富めるも、又一方に於て財産所得よりも變動し易きものであるから、企業家に對する貨幣の效用は他の二階級に對する貨幣の效用の中間に在ると看做し得る。(三)次に社會上の地位が個人に對する貨幣の效用に如何なる影響を及ぼすかと云ふに、貴族は平民以上に門戸を構へ體裁を飾る必要があるから、前者に對する貨幣の效用は自ら高くなる。又、官吏、辯護士、醫師等は商工業に従事せる者よりも収入に比して、程度の高き生活を營まざるを得ざる地位に立てるが爲めに、前者に對する貨幣の效用は後者に對するよりも高いと云ひ得る。(四)係累の有無多少も亦貨幣の效用に何等かの影響を與ふるものである。獨身者は妻子の生活費を支出する必要が無くして、所得の全額をば自身の

爲めに費消し得るから、貨幣の效用は自ら比較的低い。之に反して妻子を有する者は所得の全部を自己のみの生活費に充當することが出來ず、其一部分、時としては其の大部分を家族扶養の爲めに割かなければならぬから、貨幣の效用は自然高くなる。従つて家族の數が多ければ多きだけ貨幣の效用は高からざるを得無い。(五)社會の風習も一部の世人に對する貨幣の效用に大なる影響を與へることがある。我國には冠婚葬祭に身分不相應の費用を投ずる風習があつて、此風習を無視し得ざる者は屢々所得の少なからざる部分を無益に浪費する結果として、此等の者に對する貨幣の效用は自ら高くなる。(六)最後に企業家竝に政府當局者は自己の財産及び収入以外に他人の財産をば或る特種の目的の爲めに自由に利用するを得るの地位に立つとがある。例へば銀行の經營者は顧客が預入せる資金をば普通貸付、手形の割引又は有價證券の購入等に利用することが出来る。又、或る者は株式會社を設立して多人數の有せる遊金を吸集し之を資本として諸種の事業を經營する。會社は更に増資を行ひて運用資金を増加することもある。社債の募集に依りて株式會社が其の事業を擴張を圖ることもある。斯くの如く他人の財

産を利用する企業家に對する貨幣の效用は他人の財産を利用してゐない企業家に對するよりも低い。従つて企業家が利用する他人の資金の總額が多ければ夫れだけ貨幣の效用は益々低くならざるを得無い。勿論此場合の貨幣の效用は企業家としての貨幣の效用であつて、個人としての貨幣の效用では無い。此兩者を混同してはならぬ。上文に説明した個人に對する貨幣の效用に何等かの影響を及ぼす種々の原因は勿論企業家に對しても働いてゐるのであつて、企業家としての職分上感知せらるゝ貨幣の效用の大小も其影響を蒙らざるを得無い。然しながら企業家が個人として感知する貨幣の效用が頗る高いに拘らず、企業家として知覺する貨幣の效用が低いことがあり得る。例へば或る銀行の一重役が勤儉貯蓄家であつて、個人としては貨幣の效用を高く見積つてゐるが、銀行の預金が巨額に上つてゐる爲めに銀行家としては銀行所有の通貨の效用を低く見積り低率にて貸付又は割引を行ふかも知れ無い。以上企業家に就きて説述したることは政府當局者にも適用し得る。政府は租税の徴收、官業の収益、公債の募集、又は借入金に依りて一般政費又は官業の擴張或は特種事業の費用を調達してゐるのであつ

て、此等の國庫收納金が多額なればなるに従ひ、政府當局者に對する貨幣の效用は愈々低くなる傾向がある。國庫に剩餘金の在る際に往々にして不急の事業が企てられんとすることあるは是れが爲めである。

以上各個人に對する貨幣の效用の高低を定むる事情として六個の内的原因と同數の外的原因を略説したが、企業家及び政府當局者を除きたる總ての人々に對しては内的原因の全部並に外的原因中第一より第五迄が常に働いてゐるのであつて、企業家並に政府當局者に對しては内的及び外的原因の全部が作用してゐるのである。換言すれば一個人に對する貨幣の效用の高低は此等種々の原因の綜合的影響に依りて定まると云ひ得る。極端なる一例を取れば、假りに或る一個人が知識博くして智力が高く、進取の氣性に乏しくして、惡習を有せず、年齢は高く、病弱であつて、趣味少なく、多額の財産又は収入を有せず、社會上の地位は高く、係累多くして且つ社會の風習を無視すると能はない者であるとするならば、此個人に對する貨幣の效用は頗る高からざるを得無い。之に反して若し知識狭くして智力低く、進取の氣性に富むと同時に惡習を有し、年は若く壯健であつて、趣味頗る廣く、

多額の財産及び収入を有し、社會上の地位は低く係累少くして且つ社會の風習に盲從せざる者であるならば、貨幣の効用は頗る低いであらう。然し此二例は兩極端を示したのであつて、實際には斯くの如き事例はあり得ない。普通各個人に對する貨幣の効用は一部の事情の爲めには高くなり、他の事情の爲めには低くなる傾向を有してゐる。例へば或る個人は年齢が高く、病弱である結果として貨幣の効用が高くなるとする傾向があるも、又一方に於ては多額の財産及び収入を有する爲めに、此方面よりして此個人に對する貨幣の効用を低下せしめんとするところがあり得る。此等種々の事情の組合せは百以上に達するのであつて、其組合せの如何に依りて或る人に對する貨幣の効用は高く、又他の人に對する貨幣の効用は低く定まるのである。

而して貨幣の効用の高低を定むる此等の原因は勿論一定不變のもので無くして、月日の経過と共に徐々に或は又急激に變動するものなることは言ふ迄も無い。此變動の程度は内的原因と外的原因との間に一大運庭がある。即ち知識、智力、性質、習慣、年齢等の内的原因は普通徐々に變化するものであるが、財産、收入、資本の支配權等の外的原因は往々にして急激に變動することがある。例へば財産を相続し、又は事業が成功して奇利を博し、或は又會社を設立して巨額の資本を運用し得るに至ることがある。

斯くの如く事情の變化には大小遲速の差はあるが、何れの場合に於ても此等の内的及び外的原因が變動すれば、貨幣の効用が其影響を蒙りて或は以前よりも高く或は従前よりも低くなるは明かである。而して各個人に對する貨幣の効用の高低を定むる原因が變化した結果として、貨幣の効用が高くなれば、貨物の効用に變化なき限り、貨物に對する個人の評價は夫れが爲め低くなり、又貨幣の効用が低くなれば、貨物に對する個人の評價は高くなるを得無い。評價が斯くの如く高くなつた場合に、若し市價に何等變動がなければ、貨物に對する需用が増加する。之に反して評價が低くなれば、需用が減少するに至るは茲に再言する必要が無い。

### ◎第三款 消費欲の増減

貨物に對する需用者の評價は需用者に對する貨物の効用と其代金として支拂はるゝ貨幣の効用とに依りて高低が定まるのであるから、貨物の効用又は貨幣の

效用或は又此兩者に變動を生ずれば、貨物に對する需用者の評價も亦貨物並に貨幣の效用の増減する程度に應じて變動するものであるは言ふ迄もないことであつて、其中貨幣の效用が如何にして變動するかは前款に於て説明した故に、本款以下に於て貨物の效用が如何にして増減するものであるかを明かにしたい。然し貨物は營利又は公益事業に用ゐらるゝ場合と個人の消費に充てらるゝ場合とがある故に、貨物の效用をば貨物使用の目的を標準として消費用貨物の效用と事業用貨物の效用との二種に分類し別々に其效用の増減を説述するを便宜とする。から、本款にては先づ消費貨物の效用の伸縮を説明し他の效用は次款以下に譲る。飲食物、衣類、其他日用品及び裝飾品等總て個人が生活又は享樂の用に供する爲めに消費若しくは使用する貨物の效用は此等の貨物に對して個人が有せる欲望の強弱に依りて定まるものである。即ち欲望強ければ、貨物の效用高く、欲望弱ければ效用が低い。従つて或る一貨物に對する一個人の欲望が増加すれば、其の效用が高まり、貨幣の效用に變化なしとせば、同貨物に對する此個人の評價も高くなる。而して斯くの如く個人の評價が高くなつた際に市價に何等の變動が無ければ、同貨物に對する此個人の需用は増加せざるを得無い。

然らば貨物に對する個人の欲望は一般に増加しつゝ、ありや或は又減少しつゝ、あるやと云ふに、概して減退するよりも寧ろ増進してゐると看做すことを得るのである。蓋し各國民の文化の程度が次第に向上し、教育が下層階級にまで普及するゝに従ひ、必需品、日用品及び奢侈品に對する消費欲が増加せんとするの傾向を呈してゐる。概して云へば知識の程度の低き者は欲望の範圍が狭く、知識の程度の高き者は之に反して欲望の範圍が廣い。文明國人は野蠻人よりも多くの種類の貨物を多量に生産し且つ之を消費してゐる。若し果して然りとすれば、貨幣の效用に生ずる變動を一時度外視するとせば、貨物に對する個人の評價は漸次高くなり、貨物に對する需用は従つて次第に増加するの傾向があると言ひ得る。

#### 第四款 景氣の循環

次に事業用貨物の效用に就きて考ふるに、經濟界には景氣の周期的循環なるものありて、事業用貨物の效用は此循環に隨ひて増減するの傾向がある。抑も事業界の好景氣は永久に繼續すると無くして普通兩三年又は四五五年の壽命を有する

に過ぎ無い。好景氣の起るのは經濟界の一角に或る貨物の需用が増加して、其貨物の市價が騰貴し、市價が騰貴した爲めに其貨物の生産が増加すると同時に、其生産増加の影響が他の貨物に及ぼされ、商工業が旺盛となるからである。此好景氣に伴ふ主要現象としては各種貨物に對する需用の膨脹、物價の騰貴、金利の引上、製造、運輸、金融事業等の新設又は擴張、貨物産出の激増、信用の膨脹等を挙げ得る。此好景氣の永久に繼續し得ないのは一方に於ては貨物産出額が需用額に超過せんとし、又一方に於ては資力以上に資金の借入を行ひて事業を經營し來りたる者が何等かの原因に依りて債務を履行するを得なくなつて破綻した爲めに、銀行が警戒して新貸出を制限する結果として、金融逼迫し企業家は資金に不足を感じ事業を收縮せざるを得ざるに至り、爲めに貨物の需用頓みに減退するからである。然かも貨物の需用が減少すれば、物價は必然的に低落し、物價が低落すればするに従ひ貨物の生産が愈々減退し失職者を多數に出すことになる。此不景氣の状態が兩三年繼續すると、茲に再び景氣恢復の徴候を呈し、遂に更に好景氣時代に移るのである。

而して此好景氣時代に於ては諸種營利事業に要する貨物の效用は自ら高く、不景氣の時には此種の貨物の效用は之に反して低い。即ち工場機械、原料、船舶其他事業に必要な有ゆる貨物の效用は上述の如く景氣の周季的循環に應じて増減するものである。

#### 第五款 政府の政策

中央又は地方政府が所謂積極政策若しくは緊縮政策を採るかに依りても事業用貨物の效用は一大影響を蒙ることがある。若し政府が積極政策を採りて鐵道の擴張又は改良、港灣の修築、治水、道路の改修等を大規模に行はば、此等の事業に要する貨物の效用が増加し、従つて其の需用が膨脹するに至る。之に反して若し政府が消極政策を採りて、所謂行政整理及び政府事業の緊縮を斷行するとすれば、貨物の效用が減少し、夫れに對する需用が收縮する。従つて積極的政策を採る政府の下に於ては物價は騰貴するの趨勢を持續し、消極的政策を採る政府の下に在りては物價が低落するの傾向を呈するを常とするものである。

右の積極的政策を遂行する際に於ける政府の財政方針も亦貨物の效用に對し

て多少の影響を與ふることがある。政府が積極的政策を採りて諸種の新事業を企つるに當りて、若し租税の増徴、公債の募集又は借入金をも以て其の費用に充つるとすれば、貨物の效用は其新事業の影響を蒙りて増加する以外に特に政府の財政方針の爲めに著しき増減を來たすことが無い。然しながら若し政府が此際大藏省證券を發行して上叙の經費に充つるとすれば、貨物の效用は其の爲めに増加するの傾向を呈する。何故となれば、大藏省證券を受取りたる者は中央銀行に其割引を請求し、中央銀行は之に對して兌換券を増發するから、通貨が膨脹し、通貨が膨脹すれば企業が刺戟せられることがあるからである。

## 第六款 戦争

諸種の貨物に對する需用を増減せしむる原因は上文に指摘せる如く無數あるが、悉く戦争程貨物の需用を急激に膨脹せしむるものはあるまい。戦争が起れば、政府は多量の食糧品、被服、日用品を軍隊の爲めに買上げる。兵器彈藥に對する需用も激増する。政府が造兵廠にて軍隊に供給するを要する兵器彈藥を全部製造する場合には其の原料を購入せねばならぬ。又、出征軍隊の輸送の爲めに民間

會社若しくは個人の所有に係る船舶を借入れる必要も生ずる。此等の貨物及び其他總て軍需品に對する需用が増加すれば、此軍需品の生産が勿論刺戟せられ、且つ此種の生産業が旺盛になれば、其生産に用ゆる器械、器具、原料、燃料等に對する需用が自ら膨脹する。更に又、政府に諸種軍需品を供給する所謂御用商人の收むる利益が激増する結果として、此等の商人中には従前よりも多額の生活費及び娛樂費を支出することを辭せざる者を出す爲めに、軍需品以外の貨物に對する需用も亦増加するに至るを常とするのである。此需用の膨脹は漸次他の貨物にも波及するが故に、戦時には貨物に對する需用は一般的に膨脹するものであると言ひ得る。然るに貨物の供給は戦争が起りたりとて一般的に増加するものではない。従つて、戦時中には大多數の貨物の市價は騰貴せざるを得ないことになる。

然らば戦争が終熄すれば、諸種貨物に對する需用は直ちに減退するかと言ふに、勿論軍需品に對する需用は激減し、其の市價も自ら暴落するが、他の貨物に對する需用に就きては必ずしも然りと云ふを得無い。尤も媾和談判進行中は實業家が其談判の結果に關して危惧の念を懷き、消極的に事業を經營するが爲めに、軍需

品以外の一般貨物に對する需用も減退し、物價も概して低落するの傾向を有するものであるが、媾和が無事に成立して其の條件が自國に有利なる場合には景氣恢復して、軍需品以外の貨物に對する需用が戦時中に於けるよりも尙ほ幾分が増加し、物價が戦時中よりも却つて騰貴することがある。媾和成立後に經濟界の景氣が恢復するのは出征軍隊の送還と解隊並に平時事業の復活に基くものである。政府は出征軍隊の送還の爲めに巨額の支出をなさなければならぬが、其支出は一時事業界を潤すことになる。又軍人軍屬が除隊せらるゝ際に一時賜金を受くる者も受けざる者も出征中の憂を晴らす爲めに金錢を費消して都鄙を賑はすこともある。更に戦時中繰延又は中止して居つた平時の事業が戦後復活され此方面に多額の資金が新たに投ぜられる。媾和成立後に於ける此等の事情は皆な貨物の需用を膨脹せしむるの傾向を有してゐる。従つて是れが爲め媾和談判進行中一旦低落するの徴候を呈したる物價が再び騰貴の趨勢を示すに至るのであるが勿論此現象は永久に持續するもので無くして一兩年後に反動を起すは言ふまでもないことである。

## 第八節 供給の増減

### 第一款 複製不可能の物品

前節に於ては貨物の市價を騰落せしむる直接原因の一である需用の増減が如何なる事情に依りて誘致せらるゝものなるかを説明したから、本節にては他の直接原因である供給の増減が如何なる原因に依りて發生するものであるかを略述した。一貨物の供給は前述の如く其貨物の市價と其貨物に對する供給者の評價とに依りて定まるものであるから、其供給の増減が其市價の騰落若しくは供給者の評價に生ずる變動に依りて誘致せらるゝものなるは勿論である。従つて供給増減の原因を知らんと欲するならば、市價並に供給者の評價が如何にして變動するものなるかを明かにしなければならぬのであるが、市價變動の原因は既に研究し來つた問題であるから、茲に繰返す必要が無い。従つて吾人が新たに講究するを要するは貨物に對する供給者の評價が何故に變動するかである。然るに貨物の供給を論ずるに當りては總ての貨物をば古書畫骨董品の如き自由に複製し



能はざる物品と資本並に勞力を投ずれば任意に生産することを得る他の財貨との二種に大別し、各別に供給増減の原因を説くを便宜とするから、本款にては先づ複製し能はざる物品の供給が何故に増減するかを論述し、他は次款に之を譲ることにした。

古書畫骨董品に對する供給者の評價は需用者の評價と同じく、貨幣の效用と物品の效用とに依りて定まるものであるから、供給者に對する貨幣の效用高くなれば、評價は低くなり、貨幣の效用低くなれば、評價は高くなる。之に反して供給者に對する物品の效用が高くなれば、供給者の評價も高くなり、物品の效用が低くなれば、評價も亦低くなるのである。需用者の評價に就きて云ふも亦同一である。然らば何故に古書畫骨董品等の如き複製し能はざる物品に於て需用者と供給者との別が生ずるのであるか、換言すれば何故に或る者は古書畫骨董品の需用者となり、又他の者は其の供給者となるのであるかと言へば、此等の物品を高く評價する者は需用者となり、比較的低く評價せる者は供給者となるのである。例へば一名畫の現所有者が一萬圓に之を評價せるに、之を譲受けんと欲せる者が一萬圓以上

に評價せりとせば、賣買が行はれる。尤も或る場合には、現所有者が一古畫を一萬圓に評價せる際に、希望者が其倍額を提供せるにも拘らず、先祖より傳り來れる家寶を手放すことを欲せずと云ひて賣却を拒絶することもある。是れ一見右に述べた所と相容れ無いが如く思はれるが、事實はさうでない。現所有者が一萬圓にて評價せる物品をば二萬圓にても賣拂は無いのは、其評價が客觀的評價であつて主觀的評價で無いからである。即ち所有者は右の古畫の客觀的價值をば一萬圓位に見積つてゐるのであるが、自己に對する其古畫の價值をば二萬圓以上に評價してゐるから、二萬圓では之を賣却しないのである。換言すれば、所有者は此家寶を若し市場に公賣するとすれば一萬圓位に賣却することを得るならんと思惟してゐるのであるが、自身に取りては其金額よりも遙かに大なる價值を有してゐるものと看做してゐるのである。

斯くの如く古書畫骨董品等に對する供給者の評價は供給者に對する貨幣の效用と此等の物品の效用とに生ずる變動に依りて或は高く或は低くなるものであるが、其中貨幣の效用が如何にして増減するものなるかは既に前節に於て説述

したから、次下此種の貨物の效用が何故に増減するかを略述する。

古書畫骨董品の愛玩貯藏は第一に趣味の問題であるから、此等の物品に對する趣味が増加せば其の效用は増加し、趣味が減れば其の效用も減退するのは自明の理である。次に此種の物品の貯藏は一種の流行でもあるから、其風習の盛んなるときには各人に對する古書畫骨董品の效用高く風習衰へれば效用も自ら低くなる。又此等の物が先祖より傳はれる家寶なる場合に祖先崇拜の念が強くなれば其效用増加し、崇拜の念が衰へれば其效用も縮少する。

古書畫骨董品に對する趣味は文化の程度が高かまるに連れて概して一般的に増進するの傾向がある。然しながら此趣味は常に進化してゐる。其の著しき一例としては内國品に對する趣味が比較的衰へて外國品に對する趣味が増加することを挙げ得る。斯くの如く一方に於ては古書畫骨董品に對する趣味が變化すると同時に、又一方に於ては此等の物品を貯藏せる者に對する貨幣の效用に、増減を生ずる爲めに、評價が或は高く或は低くなる。古書畫骨董品に對する所有者の評價が此等の原因に依りて假りに低くなりたる際に、其評價よりも高き價格を以

て購入せんとするの希望を有する者があらば、其の供給が増加するに至るのである。我國に於て戦争景氣の最も盛なりし時に家寶の賣立が流行せしは是れが爲めである、即ち一方に於ては企業利潤が物價暴騰の爲め激増し企業家の収入が順みに膨脹せる結果として此等の者に對する貨幣の效用が激減し、古書畫骨董品に對して大金を支拂ふことを辭せざる者が輩出せると同時に、又一方に於ては多くの家寶を藏せる華族の中には物價騰貴の割合に収入の増加せざる家勢からずして家寶に對する此等華族又は諸家の評價が自ら低くなりたる爲めに、古書畫骨董の供給が増加するに至つたのである。

#### 第二款 普通商品

古書畫骨董品を除きたる他の一般商品は相當の資本と勞力とを用ひさへすれば任意に複製するを得るを常とするものであつて、此等の貨物に對する供給者の評價は上文に指摘したる如く生産費又は生産費並に營業費に依りて定まるものであるから、生産費又は營業費が減少すれば供給者の評價は低くなり、此兩費が膨脹すれば供給者の評價も亦高くなるは贅言するの要を見ない。而して營業費は

營業の規模を大にすればするに従ひ減ずるの傾向を有してゐる。生産費に就きても亦概して然りと言ふを妨げ無いのであるが、生産規模の擴大に伴ふ生産費減少の程度は貨物の性質に依りて著しく異なつてゐる。例へば農産物に在りては既述の如く縦令農業の規模を大にするも生産費を左程節約することを得無い。農業に於ける生産費の減少は種子、肥料、農具、技術等の改良に之を俟たねばならぬ。手工製作品に在りても規模の擴大は大なる影響を生産費に與へない。之に反して機械製造品の生産費は其製造の規模を増大すればするに従ひ減退するの傾向がある。夫れが爲め農産物及び手工製作品に比して機械製作品の供給が増加し、其市價が前者に比して益々低位を保つ趨勢を示してゐる。

## 第二章 物價平準

### 第一節 物價平準の意義

前章に於ては個々の貨物の市價が如何にして變動するものなるかを闡明するに努めたが此個々の貨物の市價に生ずる變動が各其貨物の生産又は販賣に従事する者竝に當該貨物を常に多量に消費又は使用する者の利害に一大影響を及ぼすものなることは多言を須ひずして明かである。然しながら日々に賣買されつゝある貨物は無數であつて、其の市價は常に變動してゐる。即ち或る貨物の市價は騰貴し他の貨物の市價は低落してゐる。而して此無數の貨物の市價に生じつゝある騰落を平均すれば物價が一般的に騰貴してゐるか或は低落してゐるか、或は又騰落が全く相殺されて物價が一般的に云へば従前と同一の程度を保つてゐるかを知ることが出来るのである。此總ての貨物の市價の高さの平均は之を物價平準と名け得る。従つて騰貴せる貨物の騰貴率の平均が下落せる貨物の低落率の平均よりも高ければ、物價平準が騰貴し、前者の平均が後者の平均よりも低く

ければ物價平準は低落したと言ひ得るのである。而して個々の貨物の市價に生ずる變動は概して局部的影響を與ふるのみに過ぎざるに反し、物價平準の騰落は其の影響する所頗る廣い。従つて個々の貨物の市價のみならず此物價平準に對しても研究を怠らざる學者が尠くないのであるが、個々の貨物の市價と物價平準との間に於ける關係に對する研究が閑却されてゐるの觀があるから、以下本章にては此關係を明かにすることを主眼として物價平準の本質並に其の騰落の原因を略説したいと思ふ。

### 第二節 交換の媒介物

各貨物の市價と物價平準との關係を述ぶるに先ち、交換の媒介物の性質を明かにして置かんが爲めに、茲に甲、乙、丙、丁の四人より成る一社會を假想し、甲、乙、丙、丁共に各々一種類の貨物を所有し、且つ各々他の一種類の貨物入手せんと欲してゐると假定する。即ち甲は米を所有し、且つ衣服を入手せんと欲し、乙は衣服を所有し、牛を入手せんと欲し、丙は牛を所有し、車を獲得せんと欲し、丁は車を所有し、米を

入手せんと欲してゐると看做す。此關係を表示すれば左の如くである。

個人	所有品	需用品
甲	米	衣服
乙	衣服	牛
丙	牛	車
丁	車	米

此場合に若し交換の媒介物として一般に何物も用ゐられてゐないとすれば、甲は自己の欲せる衣服を入手する爲めに都合三回の交換を行はなければならぬ。何故となれば、衣服を所有せる乙は米を需用してゐないが故に、甲は先づ米を需用せる丁に米を提供して車と交換し、次に車を手せんと欲せる丙に車を提供して牛を受取り、更に牛を需用せる乙に牛を提供して茲に始めて乙の所有せる衣服を譲り受くることを得るが爲めである。

衣服を所有し牛を需用せる乙も、牛を所有し車を入手せんと欲せる丙も、又車を所有し米を得んと欲せる丁も一物を得る爲めに各々三度の交換を行はなければ

ならぬ。尤も甲、乙、丙、丁の四人が同時に所有品の交換を欲するとすれば、容易に交換が行はれるが、總ての人が同日の同時刻に物品の交換を欲すると云ふが如きことは通常あり得ない。假令一步を譲りて總ての人の交換を希望せる時刻が一致することがありとしても、各個人が悉く同一の價值を有せる物品の交換を望むが如きことはあり得可からざることである。而かも交換せられんとしてゐる貨物の價值の間に懸隔があれば、交換が圓滑に行はれ得ないのは勿論である。又、米は一石、一斗、一升、一合、一勺等種々の單位を用ふることを得る結果として、米と交換せらるゝ貨物が値の高きものたりとも、又低きものたりとも、交換に不便を感ぜざるも、衣服、牛、車等の貨物は各一個、即ち衣服は一着、牛は一頭、車は一臺を以て單位と爲すものであつて、衣服三分の一着、牛八分の一頭、車十一分の一臺等の如き單位を用ゆることが出來ないから、衣服、牛、車等と交換せらるゝ貨物は此等の貨物と同一の價值又は其の倍數に相當する價值を有してゐなければならぬ。

然しながら、甲、乙、丙、丁が米の如く任意に分割するも價值を減ぜざる貨物を交換の媒介物として用ゆることに談合して、乙、丙、丁共に先づ各々自己の所有せる貨物をば米と交換し之を貯藏して置けば、何時にても米を提供して自己の欲する貨物を容易に入手することを得る。尤も實社會に於て交換の媒介物が用ゐらるゝに至るのは合議の上では無く知らずくの間自然に行はるゝものである。通例世人の全部が常に入手せんと欲してゐる物品が此交換の媒介物として用ゐらるゝに至る傾向がある。米、鹽、貝殼、煙草、鐵、金、銀等は其の數例である。

### 第三節 貨物の交換比例

前節に於て甲、乙、丙、丁の四人より成る一社會があつて、甲は米、乙は衣服、丙は牛、丁は車を所有して居つて、各自が相互間に此等の貨物を交換するものと假定したが、各其の交換の比例即ち價格に對して何等言及する所が無かつたから、本節に於て簡單に之が説明を試みやうと思ふ。尤も價格の決定及び其の騰落に關しては既に第一章に於て詳論したのであるから、只本節に於ては物價平準との關係上より觀たる貨物の交換比例を説明するに止る。

今假りに或る社會に米、林檎、牛肉及び鶏卵の四種の貨物が在つて、此等貨物の數

量及び相互間に於ける交換比例を左の如くであると定める。

貨物	數量
米	一萬石
林檎	一萬個
牛肉	一萬斤
鶏卵	一萬個

交換比例(第一表)

米	一合	林檎	二個	牛肉	十二匁	鶏卵	一個
林檎	一個	米	五勺	牛肉	六匁	鶏卵	半個
牛肉	一斤	米	一升	林檎	二十個	鶏卵	十個
鶏卵	一個	米	一合	林檎	二個	牛肉	十二匁

右の如く米一合が林檎二個と交換せらるゝは米を提供する者に對する米一合の效用と林檎二個の效用とが略相同しく、且つ林檎を提供する者に對する此兩物品の效用も約一致せるが故である。他の貨物に就きて云ふも亦同じである。交

換せらるゝ物品の效用が略同一と云ふのは提供さるゝ物の效用が通例之を交換せらるゝ物の效用よりも稍々低いからである。物品の交換と云ふも實は效用の交換であつて、人は皆な常に小なる效用を以て大なる效用と交換せんと欲してゐる。

此效用の大小なるものは物に對して人の有してゐる欲望の強弱に依りて定まるものである。而して欲望の強弱は貨物に於て人が客觀的に認むる用役と人が所有し又は所有せんとしてゐる其貨物の數量とに依つて定まる。即ち客觀的用役が高ければ欲望も高く、用役が低くければ欲望も亦弱い。之に反して數量が多ければ欲望が低く、數量が少なければ欲望が強い。されば、吾人が或る特定の一貨物に於て客觀的用役に變化なしとする場合に、若し其の數量が増加すれば、其の效用は減少し、又數量が減少すれば、其の效用は増加するに至るのである。

今此理を前掲の例に適用して、假りに米、林檎、牛肉及び鶏卵に於て人の認むる客觀的用役に何等の變化なく、且つ米、林檎及び鶏卵の數量は依然舊の如くなるも、牛肉の數量のみが突然一萬斤より二萬斤に増加したと假定すれば、牛肉に對する欲

望に變化を來たし、其の效用が減退するは明かである。而かも牛肉のみの效用が減退すれば、米、林檎及び鶏卵の三種の貨物間に於ける交換比例には何等の異動なきも、此三種の貨物と牛肉との間に於ける交換比例には一大變化を生ずるに至るは當然のことである。此際假りに牛肉の效用が従前の一半に減少したとすれば、交換比例は左の如くなる。

交換比例(第二表)

米	一合	林檎	二個	牛肉	二十四匁	鶏卵	一個
林檎	一個	米	五勺	牛肉	十二匁	鶏卵	半個
牛肉	一斤	米	五合	林檎	十個	鶏卵	五個
鶏卵	一個	米	一合	林檎	二個	牛肉	二十四匁

即ち他の貨物間の交換比例は舊の如くなるも牛肉のみが以前の二倍に相當する分量を以て交換せられるのである。

次に四種の貨物の數量には何等の變動なく、又米、林檎、鶏卵の三種の貨物に於て世人が認むる客觀的用役には何等の變化なきも、若し肉食の弊害に對する議論が

盛んと爲り、人が牛肉に於て認むる客觀的用役に影響を及ぼしたとすれば、牛肉の效用は減退するに相違ない。假りに其效用が最初の四分の一々減少したとすれば第一表に示した交換比例は左の如く異動するかも知れない。

第三表

米	一合	林檎	二個	牛肉	四十八匁	鶏卵	一個
林檎	一個	米	五勺	牛肉	二十四匁	鶏卵	半個
牛肉	一個	米	二合五勺	林檎	五個	鶏卵	二個半
鶏卵	一個	米	一合	林檎	二個	牛肉	四十八匁

以上牛肉に就きて説明したることは牛肉以外の貨物の數量若しくは客觀的用役に變化を生じたるにも勿論適用せらるゝものである。

要するに各貨物間に於ける交換比例は各貨物の效用に依りて定まり、效用は客觀的用役と數量とに依りて定まるものであるから、或る特定の貨物の客觀的用役若しくは數量に變動を生ずることがあれば其貨物と他の貨物との間に於ける交換比例に異動を來たすことになる。然しながら若し各貨物の客觀的用役が悉く

同一程度に増減したならば、各貨物間に於ける交換比例に何等の變動が起ら無い。各貨物の數量が同時に同一の割合を以て増加し若しくは減少したときも亦同じである。尤も各貨物數量が著しく増加したる場合には、鶏卵の如き腐敗し易き貨物の効用は米の如き長期間貯藏に堪へ得る貨物の効用よりも甚だしく減退し、交換比例に大なる變動を來たすかも知れない。又、各貨物に對して人々が認むる客觀的用役が同一程度に變化し、或は各貨物の數量が同一の比例を以て増減することを理論的に假定するは、差支への無いことではあるが、實際には用役若しくは數量が同時に同一の割合を以て増減するが如きことなきは喋々するを要せざる所である。

#### 第四節 物價平準(過渡時代)

前節に於て各貨物間の交換比例が如何にして變動するかを略述したが、今や進んで物價平準が如何にして發生し且つ變動するものであるかを説述し、各貨物の價格と物價平準との間に於ける關係を明かにしたい。然しながら説明をば物々

交換より直ちに今日の貨幣經濟に移しては右の關係を闡明にすること困難であるから、先づ貨物の中一種が交換の媒介物として使用せらるゝ過渡期の經濟組織に於ける價格と物價平準との關係を説きたいと思ふ。

上文第二節に於て指摘したるが如く、物々交換には種々の不便あるが故に、何れの社會に於ても貨物の交換が盛んに行はるゝに至らば、其貨物の中一種が遂に交換の媒介物として使用せられ、他の物品は皆な此貨物を通じて間接に交換せらるるを常とするのである。此交換の媒介物として用ゐらるゝ貨物は社會を構成せる人々の全部若しくは少くとも其の大多數が珍重又は需用せるものであつて、何時にても他の貨物に對する代償として何人も受取ることを拒まないものでなければならぬ。最れが爲め各國に於て最初交換の媒介物として用ゐられたるものは其國に於ける一重要産物であつた。

従つて前節に用ゐたる假設例に於けるが如く、米、林檎、牛肉及び鶏卵の四種の貨物が交換せられてゐた場合に、米が交換の媒介物として廣く用ひらるゝに至つたと假定して、左に貨物の交換比例と物價平準との間に存する關係を明かにしたい。



斯くの如く米が交換の媒介物として一般に流通するやうになれば、以前單に消費財としての客觀的用役を認められたる米は今や消費財としてのみならず交換の媒介物としての客觀的用役を認めらるゝに至る可きが故に、米の數量に變動なき限りは、米の效用は夫れが爲め幾分か増加し、米と他の貨物との交換比例は自ら變更さるゝことになる。今假りに此際米の效用が二倍に増加したとすれば、前節に掲げたる第一表は左の如く變化するに至るであらう。

第四表

米	一合	林檎	四個	牛肉	二十四匁	鶏卵	二個
林檎	一個	米	二勺半	牛肉	六匁	鶏卵	半個
牛肉	一斤	米	五合	林檎	二十個	鶏卵	十個
鶏卵	一個	米	五勺	林檎	二個	牛肉	十二匁

即ち米と他の各貨物との間に於ける交換比例のみ變動し、他の貨物間に於ける交換比例は舊の儘である。然しながら、各貨物は今や米と交換せられ、其他の貨物とは直接に交換せられない。例へば、林檎を所有せる者が鶏肉を求めんと欲すれば、

ば、鶏卵を、所有せる者に林檎を提供して鶏卵を譲り受くるに非ずして、林檎をば先づ米と交換し、然る後更に米を提供して鶏卵と換ゆるのであるから、林檎と鶏卵との間に於ける直接的交換比例を知るの必要が無い。然しながら、之に反して米と林檎との交換比例並に米と鶏卵との交換比例を知らなければならぬ。要するに今や米以外の各貨物が交換せらるゝ際には、其相手の貨物は常に米であるから、各貨物の交換比例と云へば米との交換比例を意味するのである。従つて各貨物の交換比例を表示するには、第四表の如き複雑なるものを要せずして、左の如く各貨物の價格を米にて云顯はしたる至極簡單なるものにて充分である。

第五表

林檎	一個	米	二勺半
牛肉	一斤	米	五合
鶏卵	一個	米	五勺

此場合に於て米の價格は表に加ふるを要しない。何故となれば、米一升の價格は矢張り米一升であるからである。而して若し此際米、林檎、牛肉、鶏卵の客觀的用

役並に米、林檎及び牛肉の數量に何等の變動なく、單に鶏卵の數量のみ二倍となれり、と假定せば、第五表は左の如く變更するであらう。

第六表

林檎	一個	米	二勺半
牛肉	一斤	米	五合
鶏卵	一個	米	二勺半

若し又米の數量のみ倍加せば、第五表は左の如く變更さるゝかも知れない。

第七表

林檎	一個	米	五勺
牛肉	一斤	米	一升
鶏卵	一個	米	一合

即ち第六表にては鶏卵の價格のみ變動し、第七表に於ては各貨物の價格は悉く變動してゐる。従つて第六表に示したる價格變動の平均と第七表に示したる價格變動の平均は同一でない。先づ第六表に於ける價格變動の平均を示せば左の

如くである。

	舊價(第五表)	新價(第六表)	百分比例
林檎 一個	二勺半	二勺半	一〇〇
牛肉 一斤	五合	五合	一〇〇
鶏卵 一個	五勺	二勺半	五〇
平均			八三

即ち各貨物の舊價を百とすれば、舊價に對する新價の百分比例の平均は八十三である。斯くの如く諸種貨物の舊價に對する各其の新價の百分比例の平均が百以下になることを物價平準の下落又は單に物價の下落と云ふのである。斯くの如く物價平準が低落する場合には米の價格が騰貴せるものと見ることを得ると同時に、米の購買力が増加したとも云ひ得る。

次に第七表に於ける交換比例變動の平均は左の如くである。

	舊價(第五表)	新價(第七表)	百分比例
林檎 一個	二勺半	五勺	二〇〇
物價平準			

牛肉	一斤	五合	一升	二〇〇
鶏卵	一個	五勺	一合	二〇〇
平均				二〇〇

即ち右の場合には各貨物の舊價を百とすれば、此舊價に對する新價の百分比例の平均は二百に上つてゐる。斯くの如く舊價に對する新價の百分比例の平均が百以上になることを物價平準又は單に物價の騰貴と稱するのであつて、米の價格が低落したとも、又米の購買力が減少したとも云ひ得る。即ち前表に示す所に據れば、物價平準は従前の二倍に騰貴してゐるのであつて、米の購買力は半減してゐる。如何となれば、以前林檎一個に對して米二勺半、牛肉一斤に對して五合、鶏卵一個に對して五勺を要したるに、今や林檎一個に對して五勺、牛肉一斤に對して一升、鶏卵一個に對して一合を提供しなければならぬからである。

此交換の媒介物の購買力に生ずる増減の原因が貨物側より起ること、交換の媒介物の側より生ずること、ある。例へば第六表に於ける米の購買力増加の原因は鶏卵の増加に存し、第七表に示したる米の購買力減少は米其物の増加に起因してゐる。

又、物價平準、換言すれば、交換媒介物の購買力に何等の變動なきに拘らず、貨物の價格にのみ變動の生ずることがある。例へば米の數量に何等の變動なきも、林檎及び牛肉の數量が倍加し、鶏卵の數量が之に反して以前の半額に減じたとすれば、左の如き結果を呈するかも知れ無い。

		舊價(第五表)	新價	百分比例
林檎	一個	二勺半	一勺四分ノ一	五〇
牛肉	一斤	五合	二合五勺	五〇
鶏卵	一個	五勺	一合	二〇〇
平均				一〇〇

斯くの如く林檎、牛肉並に鶏卵の價格が皆な以前よりは或は騰貴し或は低落してゐるにも拘らず、其騰落が相殺せらるゝの結果として、物價平準は従前とは何等の相違なく、依然として百を示してゐる。

以上米が交換の媒介物として用ひらるゝものと假定して物價平準に生ずる變

動を説明したのであるが、此説明は米以外の貨物例へば林檎、牛肉若しくは鶏卵が交換の媒介物として用ひられたる場合にも適用し得るものである。今此理を明かにする爲めに、第四表に掲げたる交換比例を基礎として林檎、牛肉並に鶏卵が交換の媒介物として用ひられたる場合に於ける各貨物の交換比例を算出し、且つ各交換媒介物の數量が倍加したるときと半減したるときとに於ける各貨物の價格を測算するとすれば左の如き結果を呈するであらう。

交換媒介物		舊交換比例		(交換媒介物倍加)		同上半減	
米	一合	四	個	八	個	二	個
林檎	一斤	二十	個	四十	個	十	個
牛肉	一斤	二十	個	四十	個	十	個
鶏卵	一個	六	匁	十二	匁	三	匁
米	一合	二十四	匁	四十八	匁	十二	匁
林檎	一個	六	匁	十二	匁	三	匁
牛肉	一個	六	匁	十二	匁	三	匁
鶏卵	一個	十二	匁	二十四	匁	六	匁
米	一合	二	個	四	個	一	個

鶏卵		林檎	
一斤	一個	十	個
一斤	一個	二十	個
一斤	一個	五	個

斯くの如く交換媒介物の數量が倍加する場合には貨物の價格は騰貴し、交換媒介物の數量が半減する場合には各貨物の交換比例は低落する。換言すれば、前の場合には物價平準は騰貴し、交換媒介物の購買力は減少するに反し、後の場合には物價平準は下落し、交換媒介物の購買力は増加するのである。

又、或る一貨物の數量が激増したる場合には、其貨物と交換媒介物との間に於ける交換比例のみならず、他の各種の貨物に對する交換比例も亦影響を蒙るものであるが、此激増せる特種の貨物と直接交換せらるる物は、交換の媒介物である爲めに、其貨物と交換媒介物との間に於ける交換比例のみ變動するが如く見え、其貨物と他の貨物との間に於ける交換比例の變動は人の注意を惹かない。其の理由は上述の如く、其貨物と他の貨物とが直接に交換せられないからである。而かも人の注意を惹くと惹かざるとに關せず、一貨物と交換媒介物との間に於ける交換比例が變動すれば、他の貨物との交換比例も變動することがある。假りに上文第五

表を基礎として牛肉の數量が突然二倍に増加し、夫れが爲め牛肉の效用が半減した結果として、價格も亦従前の五割に低落したとすれば、第五表は左の如く變更しなければならぬ。

舊價(第五表)		新價	
林檎 一個	米 二勺半	米 二勺半	
牛肉 一斤	米 五合	米 二合五勺	
鶏卵 一個	米 五勺	米 五勺	

右表に示すが如く、牛肉一斤に付以前米五合であつたのが今や米二合五勺に下落してゐるも、林檎及び鶏卵の價格に何等の變動がない爲めに、此兩種の貨物に對する牛肉の交換比例には一見何等の増減を生じてゐないやうに思はれるが、事實は之に反して、此兩貨物に對する牛肉の交換比例は米に對すると同じく左表に示すが如く變動してゐるのである。

牛肉 一斤	舊價格	米 五合	林檎 二十個	鶏卵 十個
一斤	新價格	米 二合五勺	林檎 十個	鶏卵 五個

即ち米、林檎及び鶏卵の間に於ける交換比例には毫も増減を生じてゐないが、此三種の貨物に對する牛肉の交換比例は悉く變動してゐる。

要するに、或る一貨物の數量が激増したならば、其貨物が交換の媒介物として用ゐらるゝものなると否とを問はず、他の總ての貨物交換の媒介物をも含むに對する其貨物の交換比例は低落する。唯交換の媒介物として用ゐられつゝある貨物の數量が増加した場合には、總ての貨物の交換比例が變動する爲めに特に人の注意を惹くの差があるのみである。

### 第五節 物價平準(貨幣經濟)

前節に於て米が交換の媒介物として用ゐらるゝ場合に於ける貨物の價格と物價平準との間に存する關係を述べたが、今や一步を進めて貨幣經濟組織に於ける、即ち今日一般に貨幣と名けられてゐる物が交換の媒介物として用ゐらるゝ場合に於ける各貨物の價格と物價平準との關係を説述しやうと思ふ。

此際矢張り前節の第五表を出發點として之に金を一新貨物として加へること

に定める。然し金は最初は交換の媒介物として用ゐられず、單に一貨物として交換せられ、其比例は金一分(一匁の十分の一)に付米一升二合五勺であると假定する。此條件では第五表は次の如く改訂せられねばならぬ。

第八表

林檎	一個	米	二勺半
牛肉	一斤	米	五合
鶏卵	一個	米	五勺
金	一分	米	一升二合五勺

次に金一分(量目)に對する他の各種貨物の交換比例を計出すれば左の如くである。

金 一分 米一升二合五勺 林檎五十個 牛肉二斤半 鶏卵二十五個

此交換状態の下に於て金が米に代りて交換の媒介物として用ゐらるゝに至つたとすれば、第八表は第九表の如く變化することになる。(計算を簡略になす爲めに、金が交換の媒介物として使用せらるゝに至りたるときに、其の效用が夫れが爲

めには増加しないと看做す。)

第九表

米	一合	八毛	牛肉	一斤	四厘
林檎	一個	二毛	鶏卵	一個	四毛

若し此場合に牛肉の數量が二倍に増加すれば、第九表は左の如く變化する。

第十表

米	一合	八毛	牛肉	一斤	二厘
林檎	一個	二毛	鶏卵	一個	四毛

更に又他の貨物の數量に何等の變動なくして、金の數量のみ倍加若しくは半減すれば、第九表の交換比例は左表の如く變動するかも知れない。

第十一表

舊比例 金倍加の場合 金半減の場合

米	一合	八毛	金一厘六毛	金四毛
林檎	一個	二毛	金四毛	金一毛
牛肉	一斤	四厘	金八厘	金二厘
鶏卵	一個	四毛	金八毛	金二毛

金の數量が倍加せる場合には金を標準とせる貨物の價格が騰貴し、金の數量が半減せる場合には價格が下落するは右表に示すが如くである。前の場合には物價平準が騰貴し、後の場合には物價の平準が低落するのである。換言すれば、前者に於ては金の購買力が減少し、後者に於ては金の購買力は増加してゐるのである。以上金が交換の媒介物として用ゐらるゝ場合に於ける各貨物の價格と物價平準との關係を略説したが、今日各文明國にては金は價格の標準となつてゐるも、此標準として用ゐられつゝあるものは前表に示したるが如き金の量目でなくして、一定量の金に對して與へられたる特種の名稱に外ならない。例へば、米國にては純金大約四分を一弗と稱し、英國に於ては純金大約二匁を一磅と名け、我國に於ては純金二分をば一圓と號してゐるのである。即ち米國に於ては純金約四分と米

貨一弗、英國にては純金約二匁と英貨一磅、我國に於ては純金二分と邦貨一圓とが同一の價值を有してゐる。されば、米國に於て帽子一個の價格をば一弗と云はずして純金四分と云ひ、英國に於て靴一足の價格を一磅と稱せずして純金二匁と云ひ、我國に於て下駄一足の價格を一圓と云はずして純金二分と稱するを妨げないのである。唯貨幣法に於て一定量の純金を標準として之に特種の名稱を與へ價格の稱呼に便ならしめてゐるに過ぎない。

従つて吾々も今や貨物の價格を言現はすに金の量目を用ゐずして、我國に於て一定量の金に與へられたる名稱即ち純金二分に對して與へられたる一圓なる名稱を標準として前掲第九表に示したる貨物の價格をば普通の貨幣にて言現はしたる代價として左の如く換算する。(純金二分は一圓であるから、一錢は純金二毛に相當する。)

第十二表

	純金(量目)	貨幣
米	一合	八毛
		四錢

林檎	一個	二毛	一錢
牛肉	一斤	四厘	二十錢
鶏卵	一個	四毛	二錢

次に金の數量が倍加若しくは半減せる場合に於ける貨物の貨幣價格は左の如くである。

第十三表

	金倍加の場合		金半減の場合	
	量	貨幣	量	貨幣
米	一合	一厘六毛八錢	四毛	二錢
林檎	一個	四毛	二錢	一毛
牛肉	一斤	八厘	四十錢	二厘
鶏卵	一個	八毛	四錢	二毛

金の數量が倍加するとき若しくは半減するときに、各貨物の貨幣價格も亦倍加若しくは半減すること又は少くとも倍加或は半減するの傾向を有することは右表に示す如くである。右の場合には勿論各貨物の數量に變動なく、且つ各貨物に

對して世人が認めてゐる客觀的用役に何等の變化なしと假定してゐるのである。實際社會に於て金の數量が二倍に増加するとき、又は通貨の流通額が倍加せるときは、各貨物の價格が必ずしも従前の二倍に騰貴しないのは他に種々の原因もあるが、貨物の數量及び貨物の客觀的用役が同時に變動することをも其原因中に數へねばならぬ。又、縦令貨幣として用ゐられつゝある物の數量に變動なくとも、他の貨物の數量若しくは客觀的用役又は兩者が各々異なる比例を以て變動しつゝある爲めに、貨物の價格が騰落することあるを記憶せねばならぬ。

### 第六節 物價平準(名目貨幣流通の場合)

前節に於て吾人は金が貨幣として用ゐらるゝ場合に於ける各貨物の價格と物價平準との關係を説明したのであるが、今日文明國にては貨幣は金貨のみで無くして、銀貨、白銅貨、銅貨及び紙幣等所謂名目貨幣も併用せられてゐるのであるから、此等の名目貨幣が物價に及ぼす影響に就きても一言しなければならぬ。

銀貨、白銅貨及び銅貨は一定の制限の下に金貨と同様に流通するものである。



例へば我國に於ては銀貨は十圓まで、白銅貨及び銅貨は一圓まで、金貨と同様に法貨として授受せらるべき規定になつてゐる。此制限がある爲めに此等の補助貨幣は絶對的に金貨の代用物たるの性質を具備してゐると云ふことを得ない。若し補助貨が濫發せらるゝとすれば、流通上の制限がある爲めに、補助貨の價値は勢ひ低下し、五圓の銀貨は五圓の金貨と同一の購買力を有せざることになるであらう。然しながら、補助貨が濫發せられざる間は、其の發行は金貨の流通を夫れ丈け膨脹せしめたと同一の結果を呈し、従つて其範圍内に於て物價を騰貴せしむるものである。

次に紙幣は正貨即ち本位貨幣(金本位制の國にては金貨)の代用物として使用せらるゝものである。従つて紙幣の額面價格は正貨の額面價格を標準としてゐる。例へば我國に於ける紙幣の額面價格は金貨と同じく圓を單位としてゐるのである。然しながら、紙幣の購買力は常に必ずしも金貨の購買力と同一でない。此兩者が同一であるか否かは紙幣が金貨と自由に交換され得るか否かに依りて定まるものである。

抑も紙幣の發行は政府に依りて行はるゝものたるゝと發行の特權を有する銀行に依りて行はるゝものたるゝとを問はず、其紙幣の引換に對する準備金即ち所謂正貨準備を置くを原則とするのである。時としては米國の獨立戰爭、佛蘭西の革命戰爭及び歐洲大戰亂中に於けるが如く、軍費調達の必要上より政府が巨額の紙幣を濫發し、或は中央銀行をして濫發せしめ、之が償却を怠りたる爲めに、人民に一大損害を與へたることもあるが、紙幣を濫發し又は濫發せしめたる政府は一旦其の引換を停止したる後に於て事情の許す限り速かに之が引換を開始せんと努むるを常とするものであるから、兌換紙幣即ち正貨と常に自由に引換へらるゝ紙幣は紙幣の常態と看做す可きものである。

然らば此兌換紙幣(一名兌換券)は物價と如何なる關係を有してゐるか。物價に及ぼす此兌換券の影響を論ずるに當りては先づ其の流通が戰前に於ける英米佛の諸國に於けるが如く正貨を悉く驅逐せざる場合と我國に於けるが如く全く正貨を驅逐せる場合とを區別しなければならぬ。紙幣の流通額が貨幣の需用額に及ばざるときには正貨が悉く驅逐せらるゝことなく、又之に反して前者が後者に

等しきか若しくは後者に超過するときには、紙幣は正貨を全く驅逐したる傾向を有してゐる。而して紙幣が正貨を悉く驅逐せずして後者と相並んで流通する際には、紙幣の購買力は正貨の購買力と全然同一である。加之、若し此際紙幣の發行に依りて流通貨幣の總額が少しも膨脹してゐないとすれば、換言すれば、一定額の紙幣の發行は單に同額の正貨を流通外に驅逐したに過ぎないとすれば、紙幣の流通は物價に對して何等の影響を及ぼしてゐないと云へる。然しながら、若し此場合に紙幣の流通が貨幣の數量を膨脹せしめたとすれば、言葉を換へて云へば、若し驅逐されたる正貨が紙幣の發行高よりも少額であるとするならば、物價は夫れに比例して騰貴するに至るであらう。

之に反して我國に於けるが如く、紙幣が正貨を悉く驅逐せる場合の貨幣の購買力、即ち物價平準の高低は如何と云ふに、若し紙幣の流通額が貨幣の需用を充たすに足るのみに過ぎ無いとすれば、紙幣の購買力は紙幣に依りて驅逐せられたる正貨の購買力と同一であると看做し得る。換言すれば、發行せられた紙幣の總額が驅逐せられた正貨と同額であるならば、紙幣の發行は物價の高低に對して何等の影響を及ぼすものではない。然しながら、若し紙幣の流通額が貨幣の需用額に超過すれば、即ち紙幣發行の爲めに正貨が悉く驅逐せられたのみならず、驅逐せられた正貨の總額以上に紙幣が發行せられたとすれば、物價は騰貴せざるを得ないことになる。

以上は兌換制度の維持せられてゐる場合に於ける紙幣と物價平準との關係であるが、兌換制が中止又は全然破壊せられて兌換紙幣が不換紙幣となりたる實例が頗る多いのであるから、是れより進んで不換紙幣と物價平準との間に於ける關係に論及せねばならぬ。然しながら、不換紙幣の購買力を論ずるに當りては、法貨の性質を具備せるものと具備せざるものとを區別するを要する。尤も兌換紙幣と雖も法貨の性質を備へてゐるものと備へざるものとがあるも、兌換制度が維持せられてゐる限り、物價平準に對する紙幣の關係を論ずるに當りて、其法貨たる否とを區別する必要が無い。如何となれば、兩者は共に物價に對して同一の影響を及ぼすからである。然るに、不換紙幣の場合には法貨たる否とは物價平準に多少異なりたる影響を及ぼすことがある。

先づ不換紙幣にして法貨の性質を具備せざる紙幣の購買力を論ずるとすれば、此種類の紙幣の購買力は、若し紙幣の流通額が貨幣の需用を満たすに過ぎないとすれば、其紙幣が不換紙幣であることの爲めに殆んど何等の影響を蒙ら無い。換言すれば、法貨の性質を備へざる不換紙幣の流通高が總ての取引及び支拂に必要なとする貨幣の總額以上に達してゐないとすれば、夫れが不換紙幣である爲めに物價が騰貴すること殆んど無しと云ひ得るのである。例へば是れまで國內に總額十億圓の兌換紙幣が流通してゐた際に、突然兌換が停止せられたとしても、其紙幣が増發せられざる限り、物價は殆んど何等の影響を蒙ることが無い。尤も兌換が停止せらるれば、紙幣の對外價值が低落するの傾向を生ずるを常とするものである。換言すれば、内國の貨幣を以て言顯はしたる外國貨幣の相場即ち所謂爲替相場が騰貴するの傾向を有するのである。斯くの如く兌換が停止されたる場合に爲替相場の騰貴する傾向を有するのは内國の紙幣が正貨と自由に引換へられ無くなつた爲めに、即ち不換紙幣となつた爲めに、其の價值が同一額面の正貨の價值以下に低落するの傾向を有するからである。而して若し此傾向が實現せられて、爲替

相場が騰貴したならば、國內に於ける物價は幾分か騰貴するに至るであらう。然らば此際に於ける物價騰貴率は爲替の騰貴率と同一であるか。換言すれば、爲替相場が一割騰貴した場合に、物價も一割騰貴するものであるかと云ふに、大體に於て不換紙幣の流通する國の物價騰貴と爲替相場の騰貴とは雁行するものであると云ひ得る。尤も爲替相場の騰貴に物價が追付くには多少の時日を要するものであるから、爲替相場が急激に奔騰する場合には、爲替相場に對する物價の調節が充分に行はれずして、時としては物價騰貴の率と爲替騰貴の率との間に大なる開きを生ずることがある。是れ戦後歐洲諸國に於て巨額の不換紙幣が濫發された際に世人の注目を惹いた現象である。

然しながら、上文の假定の如く、不換紙幣の流通額が取引上絶對に必要な貨幣の數量を超ゆるとなければ、上記の傾向は單に傾向として存するのみであつて、實際に現はるゝが如きことは無い。即ち物價は騰貴しないのである。何故となれば、兌換が停止せられたとしても、夫れと同時に紙幣が増發せられ無いとすれば、國民の購買力が増加し無い。而かも國民の購買力が増加しなければ、貨物に對する

需用が膨脹しない。而して貨物に對する需用が膨脹しなければ、物價は騰貴しないと云へる。物價が斯くの如く騰貴しなければ、爲替相場も亦騰貴しないのを常とする。其の理由は次の如くである。爲替相場即ち内國の貨幣を以て言現はしたる外國貨幣の相場が騰貴するのは内國貨幣の購買力と外國貨幣の購買力との間に於ける數量的關係に變動が生ずるからである。換言すれば、外國貨幣の購買力に何等の變化なしと假定したる場合に、若し内國貨幣の購買力が低落したとすれば、即ち物價平準が騰貴したとすれば、爲替相場は夫れ丈け騰貴する。又、物價が之に反して下落すれば、即ち内國貨幣の購買力が膨脹すれば、爲替相場は略ぼ同程度に低落するの傾向を有してゐる。然るに吾人の假定に依れば、紙幣の兌換が停止せられた際に、其増發が行はれなかつた爲めに、物價が騰貴しないのである。従つて物價が騰貴しない故に、爲替相場も亦騰貴し無いと斷じ得るのである。

以上爲替相場と物價平準との關係を説明するに當りて、爲替相場とは内國の貨幣を以て言現はしたる外國貨幣の相場であるとの定義に依つたのであるが、爲替相場には外國貨幣を以て内國貨幣の相場を言現はしたるものもある。例へば正金

銀行では新嘉坡、馬尼羅、青島、香港等と我國との間に於ける爲替相場は邦貨を以て示してゐるに反し、倫敦、巴里、羅馬、漢堡、紐育等と我國との間に於ける爲替相場は各當該外國の貨幣を以て表示してゐる。斯くの如く、外國の通貨を以て言現はしたる内國貨幣の相場の意味に於ける爲替相場と物價平準との關係は勿論前述の關係と全然正反對でなければならぬ。例へば上文には國內の物貨が騰貴すれば爲替相場も騰貴するの傾向を有してゐると論じたが、若し爲替相場をば外國の貨幣を以て言現はしたる内國貨幣の相場と云ふ意味に用ゆれば、國內の物價が騰貴すれば、爲替相場は低落するの傾向があると論斷せねばならぬのである。孰れにしても理論は全然同一であるが、爲替相場の定義の如何に依りて、其理論の説明が全く正反對になるのであるから、誤解を豫防する爲めに茲に一言附加して置く。

以上略説したる如く、縦令紙幣の兌換が停止せられても、増發せられない限り、紙幣の購買力は殆んど何等の影響を受けないのを常とする。然しながら、實際には兌換の停止せらるゝ場合には、紙幣の流通高が大に膨脹してゐることを記憶せなければならぬ。蓋し紙幣の流通高が異常に膨脹してゐなければ、兌換を停止する必

要が無い。戦時には何れの國も紙幣を濫發するを常とするものであつて、到底戦前備へ置きたる正貨準備を以てしては兌換制度を維持することが出来ないから、紙幣が正貨と引換へられ、其引換へられたる正貨が海外に流出する前に兌換の停止を行ふのである。是れ今次大戦亂突發後歐洲交戦諸國が直ちに採つた政策に外ならない。従つて不換紙幣の流通せる國に於ける通貨は大に膨脹してゐると看做し得るのである。而かも通貨が膨脹すれば、其膨脹に比例して物價が騰貴するに至る可きは理の當然であると云はざるを得ない。されば、法貨の性質を備へざる紙幣の兌換が停止せられたとしても、紙幣が増發せられない限り、兌換停止其物の爲めに物價は必ずしも騰貴するものではないが、實際には兌換停止には紙幣の濫發を伴ふを常とするのであるから、不換紙幣の流通は物價の騰貴を誘致するの傾向を有してゐると云ひ得る。米國獨立戰爭中に聯邦政府の發行せる紙幣は法貨の性質を有して居らなかつたのみならず、其の流通高も貨幣の需要額即ち必用額を大に超過した爲めに、其の購買力は自ら暴落し、物價は奔騰して、紙幣は當時殆んど何等の價值をも有せざるに至つたのである。

次に法貨の性質を具備する不換紙幣と物價平準との關係は如何と云ふに、此種類の紙幣も亦其の流通總額が貨幣の需要額に超過せざる間は、兌換の停止に依りて其購買力を失ふが如きことは無い。勿論兌換停止と共に流通額が増加すれば、物價は騰貴する。然しながら、此種類の紙幣が濫發せられたる際に於ける其の購買力が減退する程度は法貨の性質を備へざる不換紙幣が濫發の爲めに購買力を失ふ程度に比すれば稍々輕微であると云ひ得る。其の理由は次の如くである。貨幣は單に貨物の代金として支拂はるゝものたるに止まらずして、納税家貨又は地代の支拂、債務辨償等に要する支拂要具として用ひらるゝものであるが、通貨が膨脹すれば、物價が騰貴して、貨物の購買には従前よりも多額の貨幣を要するは勿論である。従つて貨物に對する不換紙幣の購買力は、紙幣が濫發せらるれば、激減するの傾向を有してゐると看做さなければならぬ。然しながら、通貨が膨脹して物價が騰貴する際に、家賃及び地代等は最初は物價程に騰貴し無いのが常である。従つて法貨として流通する不換紙幣、即ち何人も其の受納を拒絶すること能はざる不換紙幣の價値は貨物に對しては大に減退することありても、家賃並に地代の

支拂に用ゐらるゝ不換紙幣の價値は貨物の代金として支拂はるゝ不換紙幣の價値程には減少しない。次に物價が騰貴すれば、租税の納入高が自然に増加する換言すれば、税率が引上げられざる場合に於ても或る種の租税、例へば所得税、營業税及び其他従價税率を課してゐる租税の納入額は増加するの傾向を帯びてゐる。加之、物價の騰貴する際には税率が往々引上げられる結果として人民の租税負擔額が加重する。殊に戦時多額の軍費を要し、不換紙幣が濫發され物價が暴騰してゐる際に然りである。然しながら、租税の納入額は物價騰貴と同一の程度には増加しないを常とする。是れ歐洲大戦争中及び戦後に於て歐洲大陸交戦國に於て吾人の觀察したる現象である。従つて納税者が政府に支拂ふ不換紙幣の價値は貨物に對して支拂はるゝ不換紙幣の如くには低落しないことがあると云ひ得る。換言すれば、租税に對する不換紙幣の購買力とも云ふ可きものは貨物に對する不換紙幣の購買力程には減少しないものである。勿論是れは不換紙幣が完全なる法貨の性質を與へられてゐることを前提とした斷定であつて、若し兌換の停止されたる紙幣が法貨でなくして政府が其の受納を拒絶し得るものであるとするならば、濫發せられつゝある不換紙幣は租税に對して全然其の價値を失ふに至る可きことは茲に喋々するの要を見ない。

最後に債務は縦合物價が如何程騰貴すると其の額面は何等の變化を受ないものである。例へば甲が乙より金千圓を借入れ居る際に、戦争が突發し巨額の不換紙幣が發行せられた結果として物價が假りに戦前の千倍に騰貴したとするも、甲が乙に對して負ふ債務は依然として金千圓であるから、其返済の期日が到達したときには、債務者は債權者に金千圓丈けの不換紙幣を差出せば宜いのである。而かも此際に甲が乙に支拂ふ不換紙幣は戦前の千分の一に相當する價値を有してゐるに過ぎない。即ち若し甲が此一千圓の不換紙幣を以て貨物を購入するとすれば、戦前の千分の一に相當する丈けの貨物を買ひ得るに過ぎないにも拘らず、若し同一の不換紙幣をば債務の決済に利用するとすれば、戦前と同様に之を千圓の價値を有するものとして使用し得るのである。債權者は勿論此決済に受領したる千圓の不換紙幣を以て戦前の千分の一に相當する貨物を購入するを得るに過ぎないのであるから、不豫期の一大損失を蒙るのであるが、債務者の立脚地より

之を觀れば、債務決済に對する法貨の性質を具備せる不換紙幣の價值は、物價が従前の千倍に暴騰してゐるにも拘らず、寸毫も減退してゐない。此理は勿論個人間の貸借のみに就きて存するものでは無く、總ての公債、社債、債券、預金等に就きて云ふも亦同じである。

斯くの如く法貨の性質を具備したる不換紙幣が濫發せられたる際には、貨物に對する其の價值は大に減退するも、家賃、地代、租税等の支拂に用ゐらるゝ不換紙幣の價值は夫れ程減少しないのみならず、債務の辨済に使用せらるゝ不換紙幣の價值は毫も殺減されないものであるから、法貨の性質を有する不換紙幣が濫發せらるる際に於ける其の購買力減退の程度は法貨の性質を有せざる不換紙幣の如く甚だしく無いと斷定し得る。蓋し家賃、地代、租税等の支拂並に債務の決済に用ゐられる不換紙幣の價值は、若し法貨の性質を備へてゐるとすれば、貨物に對する購買力程に激減しないのであるから、此事情は自ら貨物に對する購買力の減退を幾分か阻止するの傾向を有してゐると看做し得ると思ふ。換言すれば法貨たるが故に此不換紙幣の價值は一般的に多少吊上げられるものである。

### 第三章 貨幣數量說

#### 第一節 緒言

前章に於て各貨物の價格と物價平準との間に存してゐる關係を説明すると同時に、物價平準が通貨の流通高の増減に伴ひて騰落することあるを叙説したが、斯くの如く物價の騰落をば流通貨幣の伸縮に基くものなりと説くを貨幣數量說と稱するのである。此貨幣數量說は、一般物價昂落の原因を説明するものとしては、夫れに對する幾多の反對說があるにも拘らず、最も有力なる學說であると看做さなければならぬ。さは云へ、通貨の數量と物價の高低との間に存する關係は前章に於て説述したる如くに單純なるものでは無い。換言すれば、貨幣の流通高が二倍になつたならば、物價は従前の二倍に騰貴する傾向はあるも、常に必ずしも實際に二倍になるものであると云ふことを得ない。第二章に於ては物價平準變動の根本原理を闡明する爲めに特に傾向のみに注意を集中したのであるが、今や之より進んで流通貨幣の數量に生ずる變動が如何なる場合に且つ如何なる程度まで

物價を騰貴又は低落せしむるものであるかを稍々詳略に論述しようと思ふ。

抑も物價平準は何れの國に於ても常に變動しつゝあるものであつて、其騰落の程度が輕微である限り特に世人の注意を惹かないのであるが、時としては一般物價が世界的に激騰して幾多の問題を惹起せしむることがある。斯くの如く物價が世界的に暴騰して政治家竝に學者間に於て其の原因竝に夫れの對策に關する論争を喚起せしめたことが近世に於て少くとも五回ある。第一回は十六世紀中の出來事であつた。是れより先き千四百九十二年に米國がコロンブスに依りて發見せられて以後幾多の探見家及び冒險者が相踵いで新大陸に渡航し、土人の所有せし金銀を手に入れて歐洲に持歸りたる爲めに、歐洲諸國に於ける通貨の流通高が幾分か潤澤になる傾向があつたのであるが、其の中に南米のポリビヤ國のボトシと云へる處に在る銀鑛が千五百四十六年に發掘せらるゝに至つてより、米國より歐洲への銀の流入が激増したのみならず、當時諸國の國王が政費及び軍事費の缺乏を補ふ爲めに貨幣を貶造濫發せしめた結果として十六世紀の後半には物價が暴騰したのである。次いで物價が世界的に騰貴したのは十八世紀の末葉より十

九世紀の初頭に掛けてゝある。千七百七十六年には米國に於ける英國の殖民地に獨立戦争が起り、十三箇の殖民地の聯合政府は軍費に窮して紙幣を濫發した爲めに物價は奔騰するに至つた。又、佛國に於ては千七百八十九年に革命が突發し、新政府は巨額の不換紙幣を發行した。夫れに引續いて奈翁戦争が起り歐洲諸國が其の渦中に引込まれたのであるが、此佛國の革命戦争竝に奈翁戦争中に物價は少くとも歐洲諸國に於て暴騰したのである。十八九世紀の交に於ける此物價騰貴に次ぐものは十九世紀の中葉に起つた現象であつた。千九百四十八年に北米合衆國のカリフォルニア州に金が發見され、次いで千九百五十一年にも英領濠洲に於て同様の發見があつた結果として世界の金産額が頓みに増加した爲めに物價も著しく騰貴するに至つた。第四期の世界的物價騰貴は十九世紀が終りを告げんとせる頃起りて二十世紀に持越した。此物價騰貴も金産額の激増に基くものである。其金産額激増の原因としては採金術の進歩と千八百九十六年中に於ける米領アラスカ州クロナイクの金發見とを挙げ得る。第五次即ち最近の物價騰貴は千九百十四年に勃發した大戰亂中竝に戦後に生じたものであつて、主と



して不換紙幣の濫發に基いてゐる。

斯くの如く近代に於て物價は少くとも五回世界的に騰貴したのであるが、此世界的騰貴の起る毎に學者の注意を惹き其の研究を促がした。其騰貴の原因として學者の指摘した現象には勿論種々あるが、通貨の膨脹に其の原因を求めんとした者が頗る多い。既に十六世紀中に物價が暴騰した際に、佛蘭西の法律家にしてジャン・ボタンと云へる人は米國に於ける銀産額増加の誘致した通貨の膨脹を以て當時に於ける物價騰貴の原因の一に數へたのである。夫れ以來歐洲諸國殊に英國の學者中にて物價騰貴の現象を研究せる者は多く通貨の膨脹をば其の主因の一若しくは唯一の原因と看做し來つたのであるが、十九世紀に入りて銀行の預金制度が大に發達し、諸種の支拂に小切手が廣く用ひらるゝに至りて後は、通貨の流通高に生ずる變動のみを以て物價騰落の原因と看做すは不穩當なりとの説を懐く者が輩出した。何故となれば、小切手は購入貨物に對する支拂並に其他諸種債務の決済に通貨の代りに用ゐらるゝのであるから、縦合通貨の數量が減少しても、若し小切手の振出高が増加すれば、物價が低落しないのみならず、假りに通貨の

收縮率以上に小切手の振出高が激増するとせば、物價は却つて騰貴するに至ることがあり得ると考へられたからである。而して小切手は勿論當座預金に對して振出さるゝものであつて、當座預金の總額が膨脹すればするに従ひ、小切手の振出高も自ら増加することを豫期しなければならぬ。然るに十九世紀中に當座預金制度は歐米諸國殊に英米兩國に於て長足の進歩を呈し、小切手の使用が益々盛んになり、英米にては小切手を以て決済せらるゝ諸種取引の總額は通貨を以て行はるる取引總額の九倍に達するとの説が行はるゝに至つた爲めに、通貨の伸縮は物價の騰落を誘致するものであるとの單純なる貨幣數量説は最早支持さるゝ價值が無いと思惟する者を生じた。加之、貨幣の流通速度なるものが研究さるゝやうになつた。貨幣の流通速度(一名循環速度)とは通貨が人と人との間に轉々流通する速さを言ふのであつて、同一の通貨が授受さるゝとが頻繁になればなるに従ひ、貨幣の流通速度が増すことになる譯である。此流通速度は一ヶ月、一週間又は一日を標準として測定することを妨げないのであるが、普通一ヶ年を標準として考察するとなつてゐる。即ち或る特定の一圓紙幣又は五十錢銀貨が一ヶ年間に五十回

支拂に用ゐられたとすれば、換言すれば、五十回其所有主を換へたとするならば、其一圓紙幣又は五十錢銀貨の流通速度は一ケ年五十回であると言ひ得る。普通補助貨幣の流通速度は頗る高い。白銅貨及び小額紙幣の中には殆んど毎日人から人に渡るのみならず、時としては日に數回も所有主を換へるともあらう。若しありとすれば、其の流通速度は一ケ年數百回に上ると看做し得る。之に反して十圓紙幣又は百圓紙幣等の高額紙幣の中には銀行若しくは金満家の金庫に貯藏せられた儘にて一ヶ月間も、時としては一ケ年間にも互りて一回だに使用せられないものもあるであらうと思はれる。斯くの如く貨幣の中には流通速度の高きものと低きものがあり、且つ一國の通貨は金銀貨幣、紙幣、補助貨幣等を通算すれば、數億を測るとは不可能であると言はなければならぬ。然らば如何にして一國の通貨の流通速度を測定するを得るか、と云ふに、先づ一ケ年間に授受せられたる通貨の總額を計出し、之をば矢張り、一ケ年間に流通してゐた通貨總額の平均を以て除して得たる商をば一ケ年間の通貨流通速度と看做せば宜しいのである。通貨の

平均流通額を用ひて流通速度を計出するのは、通貨の流通額は日々に異なるものであるから、一ケ年中の或る一定の日、例へば一月一日とか十二月三十一日とかの流通額に依りては正確なる結果を擧げること不可能であるからである。此流通速度の計出をば數字を以て例示するとすれば、假りに一ケ年間に授受せられたる通貨の總計が二百五十億圓であつて、通貨の平均流通高が十億圓であるとするれば、流通速度は一ケ年二十五回になる。

尤も數千又は數萬に上る銀行會社及び其他の法人並に數百萬に上る個人の間、に一ケ年中に授受せらるゝ通貨の總額を正確に計出するは絶対に不可能のことであると云はざるを得ない。此の總額は種々の方法に依りて概算するを得るに過ぎないものである。通貨の平均流通高も正確には計出し得ないものであるが、通貨の授受總額よりも稍々正確に測定することが出来る。然しながら、通貨の授受總額に就きては到底正確に近き計數を求むること不可能であるから、一國の通貨流通速度を計算すると云ふも、單に概算することを得るに過ぎないものである。斯くの如く通貨の流通速度は正確に計出すること不可能であるが、其現象の存

在してゐることには何等疑ひを容るゝ餘地のない所であるのみならず、物價との關係上に於て非常に重要な事柄であると云はなければならぬ。何故となれば、流通速度の増減は物價平準に對して通貨の伸縮と同様の影響を及ぼすからである。例へば假りに通貨が従前の二倍に膨脹すれば物價も亦以前の二倍に騰貴するの傾向があると認め得る際に、縦令通貨が實際に膨脹せずとも若し流通速度が二倍に増加すれば、物價は従前の二倍に騰貴する。數字を以て此理を説明するとすれば、假りに或る國に流通せる通貨の總額が十億圓であつて、其の流通速度が一ヶ年二十回である場合に、流通速度に何等の變化無きも若し流通貨幣の數量が突如倍加したとすれば、物價平準が従前の二倍に騰貴するの傾向ありと看做し得る際に、假りに通貨の數量には何等の變動なく依然として十億圓を數ふるに過ぎ無いとするも、流通速度が一ヶ年二十回より四十回に増加したとすれば、通貨は少しも膨脹してゐないにも拘らず、物價は二倍に騰貴することがあり得るのである。尤も流通速度が實際には短日月間に著しく増加することは無い。然しながら、國民經濟が發達し貨物の生産及び交換が増進するに連れて、通貨の流通速度は漸増

するの傾向を有してゐる。概して云へば、後進國に於ける流通速度は低く、先進國に於ける流通速度は高い。又同一國に在りても經濟界の沈靜してゐるときには流通速度は低く、好景氣の際には高いのを常とするものである。

以上略述したる如く、當座預金制度が大に發達し、諸種の支拂に通貨の代りに小切手が廣く用ゐらるゝに至りたるのみならず、通貨の循環速度が物價の高低に及ぼす影響が認められて來た結果として、通貨の伸縮のみに依りては物價の騰落を説明し去ることは不可能であると思惟せらるゝに至つた。是れが爲めに従前の單純なる貨幣數量説を支持する者がなくなつて、新らしき見地より物價騰落の現象を考察する者が出て來たのであるが、此新研究の最も盛んに行はれたのは米國であつて、同國では貨幣數量説は新らしき形式の下に多くの支持者を得て、其の勢力は他國にも及ぼさるゝに至つたのであるから、先づ左に貨幣の數量と物價との關係に對する二三の米國學者の研究を紹介しやうと思ふ。

## 第二節 ニューユームの研究

最初に紹介するのはサイモン・ニューコム氏 (Simon Newcomb) の研究である。氏は十九世紀後半に於ける最も有名なる天文學者の一人であつて、火星に地球上の人類に劣らざる智力を有する動物が住んでゐるとの學說の有力なる支持者であつた。曾て強力なる電燈を以て火星の人と相圖を交換することを提唱して天文學界並に一般世人の耳目を聳動せしめたこともある程の熱心なる天文學の研究者であつて、米國天文學界の一大權威であつたのであるが、氏は單純なる天文學者で無く多方面の人であつて、小説をも書いた外に經濟學にも深き趣味を有し、論文を公にしたのみならず、千八百八十六年には *Principles of Political Economy* と名けたる經濟學の根本原理を説きたる著述を上梓したのである。由來經濟學は科學的に取扱はれ得るものであり且つ取扱はれなければならぬものであるにも拘らず、一は經濟現象が宇宙並に地球上の物理現象よりも遙かに複雑であつて、如何に綿密なる研究を試みるも、天文學又は物理學に於ける研究の如くには正確なる結果を擧ぐることに不可能であるのと、一は經濟學の研究に従事した者の多くが科學の素養を缺いて居つたが爲めに、經濟學は動ともすれば非科學的に研究せられんと

するの傾向があつた。ニューコム氏は爰に鑑みる所ありて、自身が天文學者であるから、嚴正なる科學の立脚地より經濟學に臨んで上記の著書を物したのである。本書は五篇に分ちて第一篇には經濟學の論理的基礎と研究方法、第二篇には社會の經濟組織、第三篇には需用並に供給の法則、第四篇には社會循環、第五篇には經濟學の應用を論じてゐる。此の中第五篇の「社會循環」は社會に於ける貨幣の流通並に夫れに伴ふて發生する種々の現象を説明したものであつて、十五章に區分されてゐるが、其中最も重要なるは第一章貨幣の流動、第二章社會循環方程式及び第三章社會循環方程式の變動である。以下記述せる所は此三章の大意に外なら無い。

凡そ一國又は一社會に於て行はるゝ總ての交換を研究するに當りては交換を行ふ能力を有する全部の者に就て考察しなければならぬ。其の中には財産を所<sub>有</sub>し能ふ總ての法人が含まれる。又、勿論個人も其の一部を構成するのであるが、夫に扶養せらるゝ婦人及び小兒等の如く自己の計算にて取引をなさざる者は除外されなければならぬ。原則としては一家の主人及び妻子は一個人と看做し得

る。

倍て此等の總ての法人竝に個人の間には常に貨幣が授受されつゝあるのであるが、先づ最初一個の法人又は個人が一定期間、例へば一ヶ年間に支拂ひたる貨幣の總額の計算を試みると假定する。茲に「貨幣」と云ふは其文字の最も廣き意義に解せらる可きであつて、貨物若しくは勤勞に對して支拂はるゝ總ての物を包含するのである。而して右の計算をば一個の法人又は個人のみならず、一社會を構成する數十萬又は數百萬の法人竝に個人に對して行ひ、各人の支拂總額を合計すれば、其社會に於て一ヶ年間に授受せられたる貨幣の總計を求むることが出来る。此總計を名けて「貨幣の流動」と稱する。

通貨の流動に關する此計算は支拂の方面より行ひたるものであるが、收納の方面よりも同一の計算を試みても差支へない。或る人が一定額の貨幣を支拂ふ場合には他に必ず其貨幣を受取る人がなければならぬのであるから、各法人若しくは各個人が一ヶ年間に受領する貨幣の總額を社會の全部に亘りて通算すれば、其合計は支拂額の總計と符合す可き筈である。尤も何れの場合に於ても内國人が

外國人に支拂ひ若しくは外國人より受納する金額は除外しなければならぬ。然らざれば一國內に於ける支拂高と受取高とは一致しない。此國際間に於ける貨幣の授受は非常に重要な經濟現象であるが、吾人は一時之を度外視しなければならぬ。尤も世界全體を一社會と看做して貨幣の支拂額と受納額とを計算すれば、兩者が一致す可きは勿論である。

次に吾人は貨幣の流動と貨幣の原本とを區別しなければならぬ。貨幣の原本とは一定の時、例へば何月何日の午前零時と云ふが如き時に社會に存在してゐる貨幣の總額を謂ふのである。此貨幣の數量は有形の貨幣と無形の貨幣との二種を含むものであつて、有形の貨幣とは鑄貨、銀行券及び其他の信用證券を謂ひ、無形の貨幣とは小切手の使用に依りて所有權の移動する銀行の當座預金を意味するのであるが、此兩種貨幣の數量と流動との間に於ける關係は各種の貨幣に就きて別々に説述しなければならぬ。

先づ最初に或る一枚の一弗紙幣が一月一日に一人の青年の手よりアイスクリーム店の代金として菓子屋の手に移り、次に菓子屋より乾物商に、乾物商より馬力の

手へと夫れから夫れへ移り行くとなし、十二月三十一日まで其の紙幣が所有主を換へる度数を計算するとすれば、一ヶ年間に於ける貨幣全部の流動總額の中に此の紙幣の流動額が幾何に上つてゐるかを知らることが出来る。假りに一ヶ年間に此の紙幣が授受せらるゝ度数を百回とすれば、夫れの流動額は百弗である。而して次に國內に流通してゐる他の總ての一弗紙幣に就きて同様の計算を行ふのみならず、五弗、十弗、二十弗等の紙幣並に總ての金銀貨幣に對しても亦流動額を算出し、夫れを全部總計すれば、有形貨幣の流動總額を知ることが出来る。吾人は此總額をF'と名ける。此F'をば流通してゐる紙幣及び鑄貨の總額を以て除すれば、一ヶ年間に有形の貨幣が所有主を換へる度数の平均を求むることを得るのである。更に一年三百六十五日をば此平均数を以て除するとすれば、一個人の手に有形貨幣が保持される平均日數を知ることが出来る。

次に銀行の當座預金の流動は如何と云ふに、聊か有形貨幣の夫れとは異つてゐる。當座預金は上述の如く有形の貨幣ではなくして、單に有形の貨幣に對する權利に外ならないものであつて、銀行の帳簿に記載せられたる數字に依りて代表さ

れてゐるに過ぎ無い。而かも尙ほ銀行當座預金は通貨の一部分を構成してゐる。然しながら、此銀行預金は紙幣の場合に於けるが如く一弗宛に分離することの出来ないものである。とは云へ、其の流動に及ぼす結果から觀れば、性質の相違は計算に對して直接何等の妨害とはならない。甲が自己の取引銀行に有する當座勘定に對して一定金額の小切手を振出して乙に與ふる毎に、當座預金を夫れだけ流動せしむるのであつて、乙が此小切手を更に丙に交附するとすれば、銀行預金の流動額が夫れだけ増加することになる。従つて銀行に當座勘定を有する總ての人が一ヶ年間に振出す小切手の額面を總計すれば、當座預金の一ヶ年間に於ける流動總額を知ることが出来る。吾人は此流動總額をばF''と名ける。而して若し此F''をば當座預金の平均額を以て除すれば、一ヶ年間に當座預金が所有主を變更する平均度数を求むることを得るのである。——總ての銀行の當座預金の總額は日々に變動するものであるから、其預金が所有主を變更する平均度数を計出するに當りて、正確なる結果を得んと欲したならば、或る一日の預金總額をば計算の標準とせずして、平均額を用ゆ可きは當然である。此平均額とは勿論一年三百六十

五日の平均に外ならない。——而して斯くの如く計出したる所有主變更の平均度數を以て更に一年三百六十五日を除すれば、當座預金として預入せられたる各一弗の金子が一人の預金者の所有に屬してゐる平均日數を計出することが出来る。今假りに有形並に無形の貨幣の流動總額をば  $F$  と名くるとすれば、次の如き方程式を作ることを妨げない。

$$F = F_1 + F_2$$

以上社會に於ける總ての支拂の合計並に通貨の總額が如何なるものであるかを説明したが、血液の循環と比較すれば、此兩者間に於ける關係を一層明瞭に爲すことが出来ると思はれる。若し人體の或る器官又は部分、例へば食指に流入する血液を計量すれば、其食指内に循環する血液の分量を知ることが得るのは勿論である。然るに同一の血液が其食指内の血管を通じて幾度も繰返して流動するのであるから、此食指内に於ける血液の循環總量は人體の各部分に存在してゐる血液の總量よりも多量に上ることがあり得る。而して食指の血液循環量は計量の時間が長ければ長き程夫れ丈け多量に上るのであつて、若し其時間が一時間な

れば循環量は一分間の循環量の六十倍に達し、一晝夜を標準としたる場合の量は一時間の二十四倍に相當するは多言を須ひずして明かである。されば若し人體の總ての器官及び部分を通じて二十四時間に流動する血液量を總計すれば、一晝夜の循環總量を求むることが出来る。従つて此循環總量をば人體内に在る血液の總量を以て除すれば、一日間に於ける血液の循環速度を知るを得るのである。

通貨も亦血液が人體内を循環すると同じく社會に流動するものであつて、其流動總額をば通貨の總額を以て除すれば、前述の如く通貨の流通速度を知ることが出来る。今假りに流動總額をば  $F$  を以て示し、通貨の總額をば  $V$  にて現はし、流通速度をば  $R$  に依りて代表せしむるとすれば、通貨の流動總額、通貨の總額並に流通速度の三者間に於ける關係は之を左の如き方程式に依りて明示することを得る。

$$F = V \times R$$

然らば此  $R$  即ち通貨の流通速度の大小を定むる法則なるものがあるか。換言すれば各一弗の金銭が或る一個人の手に保持されてゐる期間の長短を定むる何等の法則なるものがあるかと云ふに、此期間の長短、即ち流通速度の大小は數々の

原因に依りて變動するものであるから、或る一定の法則に依りて支配せられてゐると看做すことが出来ないものであるが、少しく考へれば、此流通速度は略ぼ一定してゐるものであつて、甚だしく増減しないものであることが明かになる。

若し總ての人が或る一定額の貨幣を受取るや否や直ちに之を拂出すとすれば、此授受の間の期間は勿論非常に短いが、人が通例斯くの如く一定額の貨幣を受領した次の瞬間に之を他に支拂ふと云ふが如きことは稀であつて、多くの場合には貨幣を受取りたるより之を支拂ふに至るまでには若干の時間が経過するものである。月給取は普通月末に月俸を受取り、其一部分は直ちに家賃、出入商人の勘定等の支配に充てるが、残額は之を手許に置いて翌月の月末に至る一ヶ月間に於て必要に應じて漸次少額づゝ費消するのが常である。假りに或る會社員が月末に月俸を受領せる際に其一半を直ちに支拂ひ、残りの半額をば一ヶ月間に毎日同一の割合にて費消し盡すとすれば、貨幣が此人の手に保持せられる時間は平均一ヶ月の四分の一即ち七日強に相當する。

何故此場合に貨幣停滯の平均期間が一ヶ月の四分の一に相當するかと云ふ

に、収入金額の半分が直ちに支拂はれ他の半額が同一の率で一ヶ月間に費消せられるとすれば、其人の手許在金の平均額は一ヶ月間の支拂總額の四分の一に相當するからである。若し支拂總額が千圓であつて、平均手許在高が二百五十圓であるならば、一ヶ月の循環速度は四であるから貨幣が右の人の手許に止まる平均時間は一ヶ月の四分の一に相當する。尙ほ一假例を設けて詳細に此理を解説するとすれば、假りに一人の官吏があつて、月俸六百圓を受けつゝあるが、月末に俸給を受取りたる時に直ちに其の半額即ち金三百圓を諸種の支拂に充て、残額金三百圓をば夫れより次の月末まで即ち三十日間に毎日十圓づゝ費消して支拂盡したと定める。さすれば此官吏の手許在高の平均は百五十圓に相當する。其理由は次の如くである。最初の日の朝六百圓を受取り其中より三百圓を支拂ひたる後の残額は上述の如く勿論三百圓であるが、其日の中に更に十圓支出するのであるから、同日夜の在高は二百九十圓である。従つて最初の日の手許在高の平均を二百九十五圓と看做すことが出来る。第二日目の朝の在高は二百九十圓であるが、其の日の中に前日



と同じく矢張り十圓費消するのであるから、夜の在 high は二百八十圓であつて、其日の平均 in high は二百八十五圓に相當する。他は之に準ずるとすれば、最後の日即ち三十日目の朝の in high は十圓であるが、夜に至れば手許金は全然費消し盡さるゝのであるから、其日の平均 in high は五圓と看做し得る。今此三十日間の平均 in high を總計すると四千五百圓になる。之を三十日にて除すれば、一日の平均 in high は百五十圓となるのである。

斯くの如く手許 in high は平均百五十圓であるが、一ヶ月の支拂總額は合計六百圓であるから、此支拂總額をば平均手許 in high を以て除したる商、即ち四は一ヶ月間に於ける此官吏の貨幣循環速度である。此循環速度を以て一ヶ月の日數を除すれば、此官吏の手に貨幣が保持せらるゝ平均日數、此場合には七日強を求むることを得るは前述の如くである。

借て假りに一社會を構成する總ての人の貨幣循環速度が上記の假例に於けるか如く月四回であるならば、此社會に於ては貨幣は一ヶ年間に平均四十八回其の所有主を換へることになる。此貨幣の循環速度は取引金額が多ければ多き丈け

増大するものである。凡そ人は現金を手許に置けば利子を失ふと感ずるものであるから、有利の支途がある限り出來得る丈け速かに支拂はんと試みる。而して授受の金額が多ければ多き丈け、有利に且つ従つて迅速に支拂ふことが出来る。

貨幣が一個人の手に保持せらるゝ期間の長短を定むる原因は一時的の性質を備へ且つ常に變化して止まざるものであるから、貨幣循環速度の平均を求むることは全然不可能であると思惟する者があるかも知れぬ。尤も絶對的に正確なる平均速度は之を知ること不可能である。然しながら大量觀察に依れば、即ち各々數百數千弗の貨幣を授受しつゝある數百萬人に就きて流通速度の平均を求むれば、餘程正確なる平均數を知ることが出来る。勿論此平均循環速度は諸種取引に對して影響を及ぼす有ゆる原因に依りて變動を蒙るものであつて、或る事情は此平均速度を促進し、他の事情は之を遲緩ならしむるの傾向を有してゐる。

以上説明したる通貨の流通總額は社會に於て人と人との間に授受せらるゝ通貨の總額であるが、我々は之より其總額中に於て通貨の受領者より其の支拂者に讓渡したる或る物に對する代償として提供されたる通貨の流動のみを研究せな

ければならぬ。此「或る物」は通貨受領者の所有して居つた有形の財貨でも、或は又通貨受納者の勞力を以て遂行せられたる勤勞でも差支ない。假りに或る人が勞働者を一名備ひて之に賃銀を與ふるとすれば、其人は此賃銀の代償として勞働者の勞働の結果たる勤勞を受くるのである。又茶商より一斤の茶を購入するとすれば、代金に對して其一斤の茶を受領するものであると云ひ得る。従つて一定額の通貨が甲より乙へ流動する毎に、反對の方面に即ち乙より甲に其通貨の金額に相當する財貨又は勤勞が流動するのである。故に社會には金額は同一なるも正反對の方面を有する二個の循環があつて、一は或る種の通貨より成り、他は人間の勞力の産物である或る欲望の對象物より成つてゐる。此兩者を混同しないやうに後者を産業循環と名け、此兩者を總稱して社會循環と呼ぶこととする。

偕て此産業循環に通貨を以て支拂ふ總ての財貨及び勤勞のみを含有せしむるとすれば、此循環の總額は當然財貨又は勤勞の代償として支拂はるゝ通貨の流動總額と一致せなければならぬ。勿論此流動總額よりは通貨の貸借、銀行の預金、其他類似の通貨の流動を全部除外するを要する。何故となれば、夫れに對する財貨

又は勤勞の流動なるものがないからである。而して斯くの如く財貨及び勤勞の流動と夫れに對して支拂はるゝ通貨の流動とを對照せしむれば、通貨流通總額は通貨を以て計算したる産業循環の總額と一致する筈である。

然しながら此産業循環の總額の計數は總ての物の數量的價值は計量の單位と反比例に増減するものであると云ふ一般測定の原則の適用を免れないのであつて、貨幣の購買力に變動を生ずる毎に、産業循環の總額は他の事情にして同一なる限り反比例に増減する。換言すれば、産業循環の價額は物價の騰落に正比例して伸縮するものである。従つて貨幣を以て計算したる産業循環の總額は或る數量に價格(財貨並に勤勞の價格)を乗じたる積に外ならない。此或る數量とは比較の標準として用ゆる價格を以て計算したる産業循環の總額を謂ふのである。

(大正十年に於ける所謂産業循環の總額と大正十一年中の同總額とを比較せんと欲したならば、各年中に取引せられたる貨物並に勤勞に其當時の價格を乗じて之を合計すれば良いのは勿論であるが、通貨と物價との數量的關係を明かにするには上述の如き一種特別の計算法を採用するのを便とす

るのである。即ち大十年に對しては其年中に取引せられたる貨物並に勤勞には其當時の價格を乗じて所謂産業循環の價額を計出するのであるが、大正十一年に對しては其年に取引せられたる貨物並に勤勞に前年即ち大正十年に於ける各其の價格を乗じて之を合計し、先づ大正十年の價格を以て算出したる大正十一年の産業循環の價額を計出し、更に大正十年の價格を標準として算定したる大正十一年の物價平準を乗じて、大正十一年に於ける真正の産業循環の價額を計算するのである。換言すれば、大正十一年の産業循環の價額を算定するに當りて、同年の價格を計算の標準として用ゐずして、比較の標準年たる大正十年の價格に依りて計出し、價格の變動と取引貨物並に勤勞の數量の増減とを各別に數字を以て表示し、以て大正十年と大正十一年との間に於ける比較を一層明確ならしめんとするのが右の計算法採用の一理由である。

今若し標準として用ゆる價格を以て計算したる産業循環の價額をばKを以て表示し、此標準價格を基礎として測定したる物價平準をばPとすれば、産業循環の

貨幣價値は左の如く書き現はすことが出来る。

$$K \times P$$

此積は既に説明せる所に依りて明かなるが如く通貨の流動總額と同額であるから、流動總額に對して上文に用ゐたる記號即ち  $V \times R$  と對照せしめて、左の如き方程式を作ることを得るのである。

$$V \times R = K \times P$$

此方程式は交換論に於て最も重要なものであつて、之を社會循環方程式と名くるを妨げ無さ。

此社會循環方程式中のKは上述の如く標準價格を以て計算したる産業循環の總價額に外なら無いのであるが、同時に又貨物の讓渡並に勤勞の提供に依りて代表せらるゝ社會組織内の活動の全部を表示してゐる。然らば如何にして社會に於ける人間の活動がKに依りて表現せられてゐるかを示し得るかと云ふに、夫れには或る一系統に屬する連續的の活動を例に取りて説明するを便とする。其の一例として茲には羊毛が種々の作業を経て遂に一着の衣服となるまでに讓され

る通貨流動の例を用ゆることにする。一着の衣服を造るには先づ最初に野に羊を養ひ羊毛を刈取らねばならぬ。此産業的作業の價額は羊の所有者が其の使用人に對して支拂ふ賃銀に依りて代表せられる。次の産業的作業は羊毛を鐵道にて市俄古に輸送することがあると看做し得る。此作業の價額は羊の所有者が鐵道會社に支拂ふ運賃に依りて代表される。羊毛が市俄古に到着した後には、其の所有權は羊毛商に移り、此取引に對しては羊毛商より羊の所有者への通貨の一定額の流動がある。此種の數次の取引を経て、羊毛は遂に工場に達するが、各取引に對しては一定額の通貨が流動する。工場に於ては職工は羊毛を以て毛織物を製造し、此勤勞に對して工場主より職工へ通貨が流動する。毛織物の所有權が次に卸商へ、卸商より裁縫師へ、裁縫師より衣服の注文者へ移る毎に、反對の方向に通貨の流動を見るのである。他の總ての産業上の取引に就きて云ふも亦同一であつて、各取引に對しては其金額に相當する通貨の流動が行はれる。

然るに總ての人は財貨又は勤勞を高く賣付んとする希望を有してゐるのであるから、價格を出來得る丈け騰貴せしめんとするの傾向がある。而かも此傾向は

産業循環に影響を及ぼしてゐる。其の理由は次の如くである。一定量の貨物又は勤勞が取引さるゝ毎に、其の價額に相當する通貨の流動を生ずるものであるから、一社會に於ける産業循環の總價額は通貨流動の總額以上に達するが如きことはあり得ない。従つて通貨流動の總額が同一なる限り、價格が高ければ高き丈け夫れ丈け産業循環の總價額が低からざるを得ない。(之を通俗的に解説すれば、通貨の數量にして同一なる限り、物價が高ければ高き丈け夫れ丈け取引貨物の數量は少なからざるを得無いと云へる。)今此理を上文に説明したる社會循環方程式  $(V \times R = K \times P)$  に當嵌めて考察するとすれば、若し  $V \times R$  に何等の變動なしとせば、 $P \times P$  にも亦何等の増減なしと看做なければならぬのである。従つて假りに  $P$  に大なる價值を與ふれば、 $R$  には小なる價值を與へねばならぬ。

斯くの如く社會循環方程式の兩邊は原則として常に一致す可きものであるが、是れには二三の例外がある。貨物又は勤勞の取引が現金にて決済されずして、其の代價が貸付けられたる場合には、其取引の價額に相當する通貨の流動なるものが無いのであるから、若し其負債が同一年内に辨償せられなるとすれば、社會循環